

札幌市文化財調査報告書 XLIV

T151 遺 跡

あやめ野中学校遺跡発掘体験学習記録

1 9 9 3

札幌市教育委員会

例 言

1 本書は、豊平区月寒東3条11丁目「あやめ野中学校校地内 遺跡の森」の発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、あやめ野中学校生徒の歴史学習のための体験として行われた。体験発掘にかかる記録は、付篇として収録している。

3 発掘調査は下記の日程で実施した。

平成2年度

平成2年5月29日～6月15日

平成3年度

平成3年5月28日～6月15日

平成4年度

平成4年6月3日～6月20日

4 発掘調査の指導には、札幌市市民局文化部文化財課埋蔵文化財係の職員が当たった。

5 本書の作成は、加藤邦雄が行った。

6 発掘調査には、次の人々が作業と指導補助に当たった。

平成2年度

文化財課嘱託 加藤昌千代、前川英子、辻拓子、西田静子、石戸弘子、成田美代子

平成3年度

和田啓子、小松和子、高橋雅子、山口田鶴子、川口美穂子

平成4年度

文化財課嘱託 前田正弘、伊場昭代、和田啓子、小松和子、高橋雅子、山口田鶴子

7 整理作業は、主として下記の人々が従事した。出土遺物の水洗・注記 あやめ野中学校郷土研究部員（川吉舞子、佐々木利江、桜井絵梨、矢内良枝）、阿波みゆき（石器実測）、高橋雅子（土器拓本、図面トレース）、安念栄子（土器拓本）、山中文雄（土器拓本、図版作成）、三浦進（遺物写真）、アブリ・シルヴィ（土器接合）

目 次

第1章 発掘調査の経緯	7
第2章 遺跡の位置と環境	9
第3章 調査地点の選定と遺跡の層序	15
第1節 調査地点の選定	15
第2節 遺跡の層序	15
第4章 遺構及び出土遺物	20
第5章 発掘区出土遺物	35
第1節 土器	35
第2節 石器	53
第6章 まとめ	60
付篇 遺跡発掘体験学習の記録	97

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	8
第2図	遺跡付近地形図	11
第3図	遺跡現況図	13
第4図	セクション図(1) A-B	17
第5図	セクション図(2) C-D	18
第6図	セクション図(3) E-F	19
第7図	遺構配置図	21
第8図	遺構および出土遺物(1)	22
第9図	遺構および出土遺物(2)	23
第10図	遺構および出土遺物(3)	24
第11図	遺構および出土遺物(4)	25
第12図	遺構および出土遺物(5)	26
第13図	遺構および出土遺物(6)	27
第14図	遺構および出土遺物(7)	28
第15図	発掘区出土土器拓影図(1)	39
第16図	発掘区出土土器拓影図(2)	40
第17図	発掘区出土土器拓影図(3)	41
第18図	発掘区出土土器拓影図(4)	42
第19図	発掘区出土土器拓影図(5)	43
第20図	発掘区出土土器拓影図(6)	44
第21図	発掘区出土土器拓影図(7)	45
第22図	発掘区出土土器拓影図(8)	46
第23図	発掘区出土土器拓影図(9)	47
第24図	発掘区出土土器拓影図(10)	48
第25図	発掘区出土土器拓影図(11)	49
第26図	発掘区出土土器拓影図(12)	50
第27図	発掘区出土土器拓影図(13)	51
第28図	発掘区出土土器拓影図(14)	52
第29図	発掘区出土石器実測図(1)	56
第30図	発掘区出土石器実測図(2)	57
第31図	発掘区出土石器実測図(3)	58
第32図	発掘区出土石器実測図(4)	59

挿 表 目 次

第1表	ピット一覧表	61
第2表	石器計測値一覧表	62

図 版 目 次

図版1	遺跡付近空中写真	65
図版2	A 遺跡遠影	66
	B 遺跡遠影	66
図版3	A 遺跡遠影	67
	B 遺跡遠影	67
図版4	A 遺跡遠影	68
	B 発掘着手時	68
図版5	A 発掘状況	69
	B 発掘状況	69
図版6	A 第1号ピット	70
	B 第2号ピット	70
図版7	A 第3号ピット	71
	B 第4号ピット	71
図版8	A 第5号ピット	72
	B 第6号ピット	72
図版9	A 第7号ピット	73
	B 第8号ピット	73
図版10	A 第9号ピット	74
	B 第10号ピット	74
図版11	A 第11号ピット	75
	B 第13号ピット	75
図版12	A 第14号ピット	76
	B 第15号ピット	76
図版13	A 第16号ピット	77
	B 第17号ピット	77
図版14	A 第18号ピット	78

	B 第19号ピット	78
図版15	A 第20号ピット	79
	B 第21号ピット	79
図版16	A 第22号ピット	80
	B 第23号ピット	80
図版17	A 第24号ピット	81
	B 第25号ピット	81
図版18	A 第26号ピット	82
	B 第27号ピット	82
図版19	遺構出土遺物	83
図版20	発掘区出土土器(1)	84
図版21	発掘区出土土器(2)	85
図版22	発掘区出土土器(3)	86
図版23	発掘区出土土器(4)	87
図版24	発掘区出土土器(5)	88
図版25	発掘区出土土器(6)	89
図版26	発掘区出土土器(7)	90
図版27	発掘区出土土器(8)	91
図版28	発掘区出土土器(9)	92
図版29	底部穿孔土器	93
図版30	発掘区出土石器(1)	94
図版31	発掘区出土石器(2)	95
図版32	発掘区出土石器(3)	96

第1章 発掘調査の経緯

札幌市豊平区月寒東地区に埋蔵文化財包蔵地が存在することは、古くから知られており、昭和40年代から付近の児童、生徒達が雑木林の一部を乱掘し、土器や石器を収集していた。

昭和56年には、現在の道々西野―白石線の北西部分の月寒川に面する部分が宅地造成されることとなり発掘調査を実施し、縄文時代晩期から続縄文時代初頭にかけての土壌墓23個と縄文時代の陥し穴10個を発見している（札幌市文化財調査報告書XXVI T151遺跡 昭和57年）。

その後、昭和62年には、道々西野―白石線の南東部分のラウネナイ川に面する部分に、中学校が新設されることとなり発掘調査を実施した。この時の調査では、縄文時代中期と晩期から続縄文時代初頭にかけての堅穴住居跡が各1軒、晩期から続縄文時代初頭にかけての土壌墓69個、縄文時代の陥し穴8個を発掘している（札幌市文化財調査報告書XXXVIII T151遺跡南側地点 平成元年）。

この時の中学校の新設にあたっては、本遺跡が市内でも貴重な存在であるとの認識から遺跡の主要部分3,300m²については、現状保存するとの決定がされた。校地の発掘で出土した土器、石器は中学校開校後、校舎内のロビーに展示され、現状保存地区は、「遺跡の森」として散策路も設けられ、生徒達の学習にまたは憩いの場として活用されていた。

その後、中学校から「遺跡の森」を生徒の歴史学習に活用できないかとの相談があり、その活用方法について協議を重ねた。数度の協議の結果、実際に生徒達の手で発掘調査を行い、実物を発見し手に触れることが最も大きな学習効果を挙げることができ、埋蔵文化財保護思想の啓発にも役立つであろうとの結論を得た。

ただ、体験発掘を数年間に亘って継続的に実施すると、埋蔵文化財の現状保存を目的とした「遺跡の森」のすべてを掘り尽くしてしまい、当初の目的からはずれることとなるため、1年に100から150m²を発掘する3年間の継続事業とした。

体験発掘の成果などについては、付篇の記録にゆずるが、「遺跡の森」として現状保存を行うことは、都会の中学校に3,300m²もの自然緑地を形成することにもなり、大きな効果を挙げている。しかし、自然緑地そのままでは、生徒達に働きかける情報量がそれ程大きくはない。体験発掘を行うことにより生徒達は、「遺跡の森」の持つ意味を正確に理解し、歴史が新しいといわれる札幌の、それも自分達の本当に身近なところにも、このような古い時代から人々が生活していたことを知り、遺跡を掘ることが古代の人々の生活に関する多くの情報を提供してくれるかを知るとともに、更に加えて埋蔵文化財保護にも理解を深めてくれたことは、大きな成果といえよう。

第2章 遺跡の位置と環境

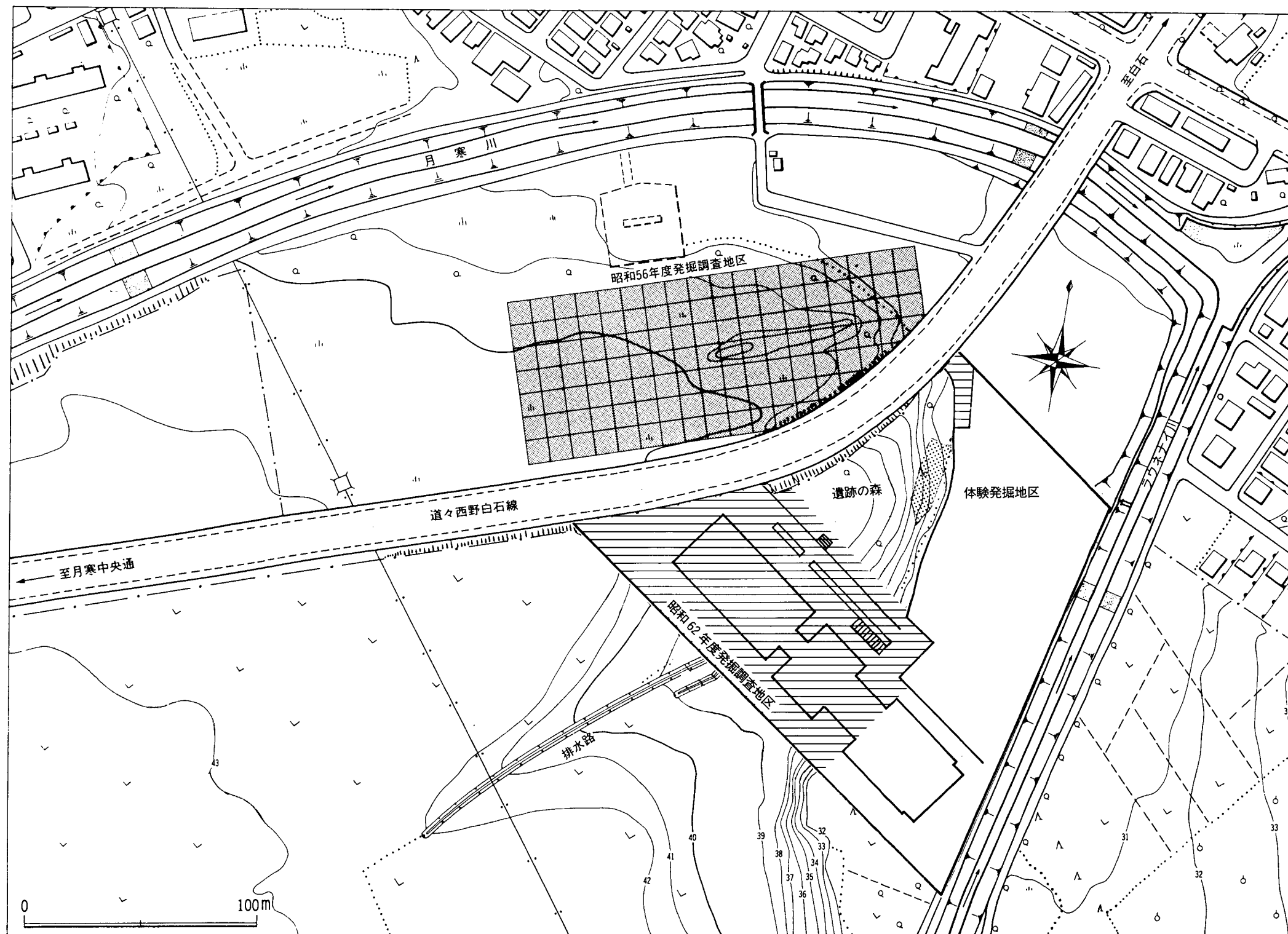
あやめ野中学校校庭の「遺跡の森」は、札幌市埋蔵文化財包蔵地台帳では、T 151 遺跡と命名されている。月寒川とラウネナイ川の合流点の標高 30～40 m の台地上に存在する。遺跡をのせるこの台地は、現在道々西野―白石線により分断される状態にあり、遺跡の南西には各種催事が行われる北海道産業共進会場（月寒グリーンドーム）が存在する。

西野―白石線の北西側は宅地造成計画により昭和 56 年に発掘調査を実施しているが、現在まだ工事に着手していない。南東側は、あやめ野中学校新設にともない発掘調査を実施している。その結果、T 151 遺跡は、あやめ野中学校内の「遺跡の森」とラウネナイ川に面する一部に残るのみとなっている（第 1 図）。

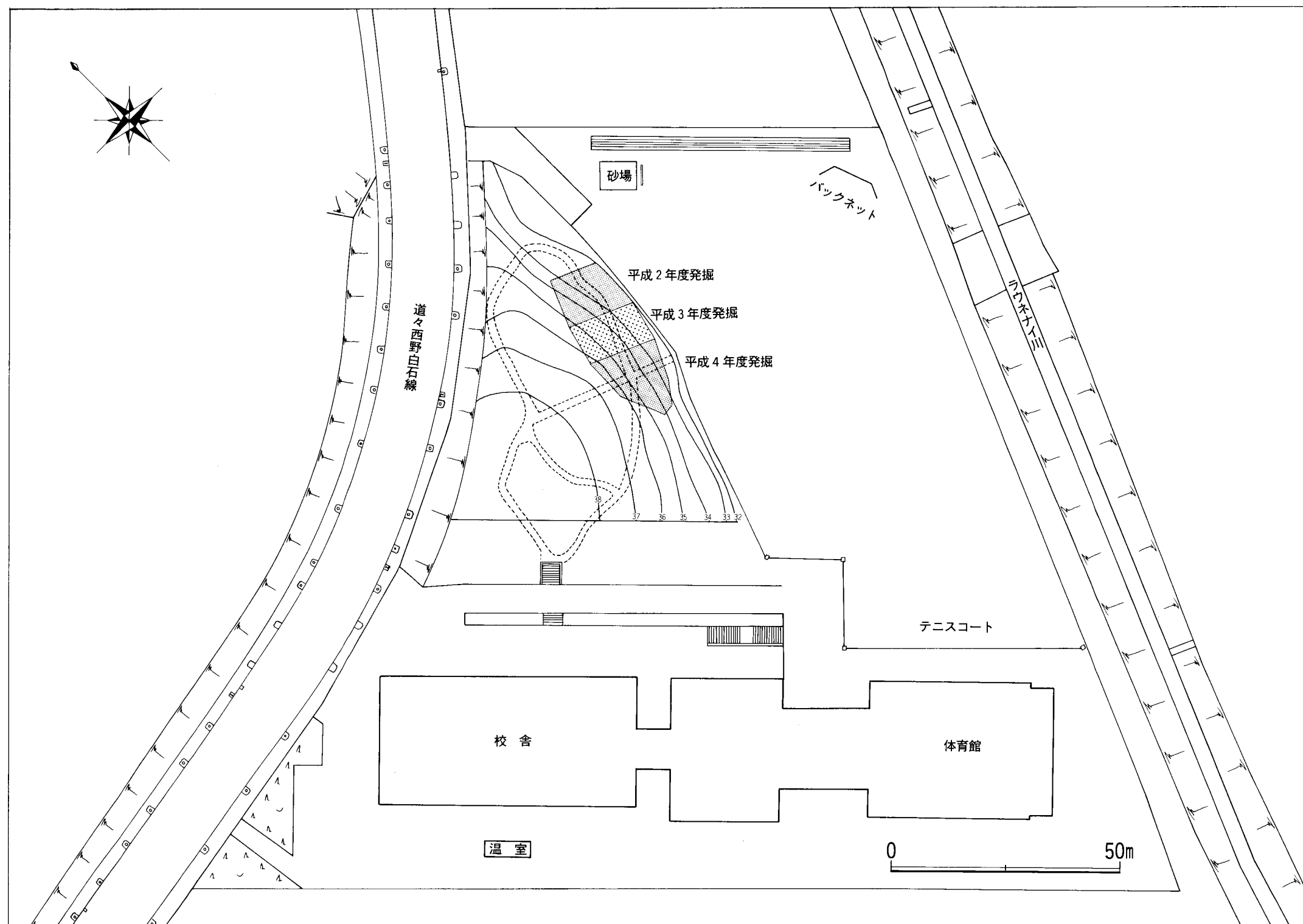
本遺跡の存在する台地は、一般的に月寒台地と呼ばれており、札幌市内でも良好な遺跡が数多く見られる。発掘調査を実施した遺跡のみを取り挙げても次のようなものがある。

月寒川上流の水源近くでは、縄文時代早期、晩期終末の T 210 遺跡、縄文時代中期の T 77 遺跡、縄文時代各時期と続縄文時代の遺構、遺物が発見される S 94 遺跡（白石神社遺跡）などがある。

ラウネナイ川は、3 km 程上流の農林水産省北海道農業試験場内で水源となる。農業試験場内では、縄文時代早期の土器や縄文時代晩期終末から続縄文時代初頭にかけての墓墳と思われるピット群を多数発見した T 466 遺跡、縄文時代中期の T 464、T 465 遺跡などが見られる。



第2図 遺跡付近地形図



第3図 遺跡現況図

第3章 調査地点の選定と遺跡の層序

第1節 調査地点の選定 (第2, 3図)

「遺跡の森」として現状保存してある地区は、ラウネナイ川に向かって東に傾斜を示し、台地の最高部との比高差は約6mである。「遺跡の森」のどの部分の発掘調査を実施するかについては、調査を指導する文化財課とあやめ野中学校の間で種々話し合いを行った。まず発掘調査を行う面積が1年間に約100から150m²であり、3年間の継続事業として実施することに確定していることが大きな前提となった。発掘調査の結果、もし堅穴住居跡が発見されれば復元家屋を作成するとの案も示されたが、しかし、前2回の発掘調査の結果から、堅穴住居跡の発見される可能性が非常に少ないと予想された。更に台地上は、現在ベンチ等が置かれ中学生の散策コースとして使用されているため、総面積で400m²程度とはいえ発掘を行うと、散策路が分断されるとともに、校舎から見える緑が少なくなる等から、発掘を行わないと決定した。また北東部の台地先端の部分は、昭和62年の発掘でも数多くの墓墳状のピットを発見しており、土器や石器が多く発見されると予想され、発掘調査の候補地点としては有望であった。しかしこの部分には桜の木があり、これを残して発掘することはやや困難であると判断した。

「遺跡の森」の東側は、中学校のグラウンドとなっており、野球場でいえばライト側の外野という位置である。あやめ野中学校のグラウンドは、「遺跡の森」のためにライト側が約50mとやや短く、野球のボールがよく「遺跡の森」に飛び込んでいた。下草に笹が生えておりボールを探すことに苦労していること、立木がありボールを追うことに集中する生徒がこれに激突する危険がある等の問題が生じていた。そのため学校としては、安全管理のためにこの部分の立木の抜根と笹の除去を行い芝生等にしたいとの意向も持っており、これらの作業を実施するには、ある程度の発掘調査をも必要とするなど、両者の考えるところが極めて近いため、この部分の発掘を行うことにした。

発掘調査面積は、平成2年度137m²、平成3年度131m²、平成4年度161m²、総計429m²となった。

第2節 遺跡の層序 (第4～6図)

「遺跡の森」は、標高38mの等高線に囲まれるやや平坦な面があり、東に緩やかに傾斜している。標高32mの等高線に囲まれる範囲が台地の縁辺となっており、それから急激に低くなりラウネナイ川の氾濫原となる。

平成2年度の発掘地点は、非常に緩やかな傾斜面となっており、この東側は、すぐラウネナイ川の氾濫原となり、やや急な傾斜を示す。更に平成3年度、4年度の発掘地点に向かって、傾斜がや

や急となる。

発掘地点の基本的な層序は、以下のとおりである（第4，5，6図）。

第Ⅰ層 表土（草の根を含む黒色土）

第Ⅱ層 乳白色火山灰混入黒色土

第Ⅱ'層 赤褐色土（火山灰または焼土）

第Ⅲ層 黒色土（木，草の根が多く混入する）

第Ⅳ層 黒色土（赤褐色火山灰を含む）

第Ⅳ'層 赤褐色火山灰

第Ⅳ''層 黒色土（やや真黒色に近い）

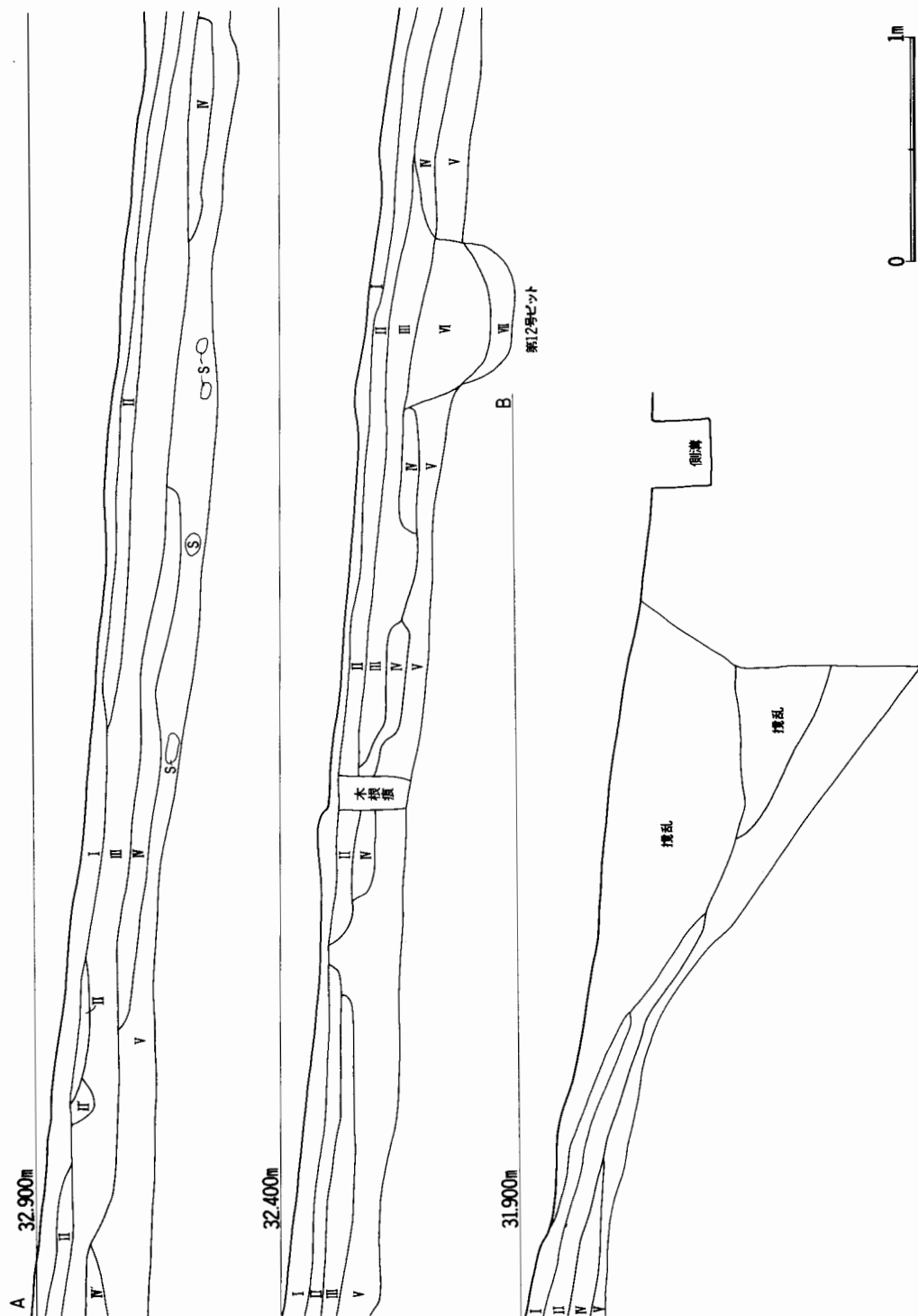
第Ⅴ層 黒色土

第Ⅵ層 真黒色土（第12号ピット埋土）

第Ⅶ層 黒褐色土（第12号ピット埋土）

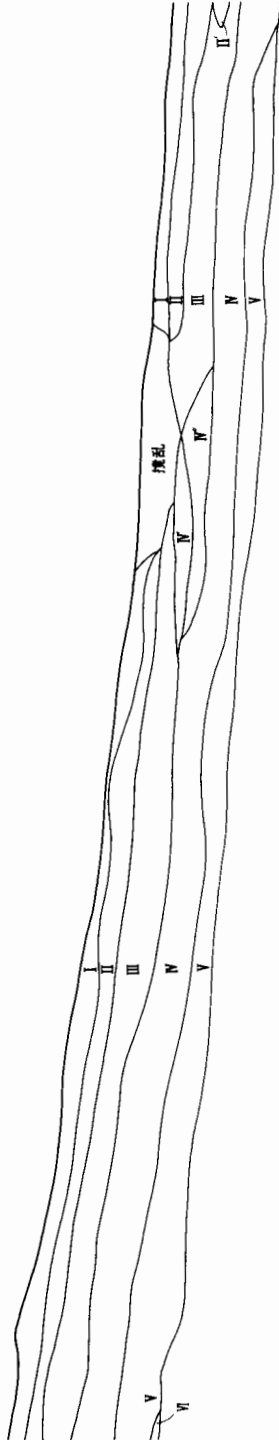
第Ⅷ層 黒褐色土（地山粘土を含む）

本遺跡の火山灰は、正式な分析を行っていないために、正確にその起源を明らかにすることができない。Ⅳ'層としたものは当初焼土かとも考えたが全く遺物を含まないことから火山灰であろうと考えている。

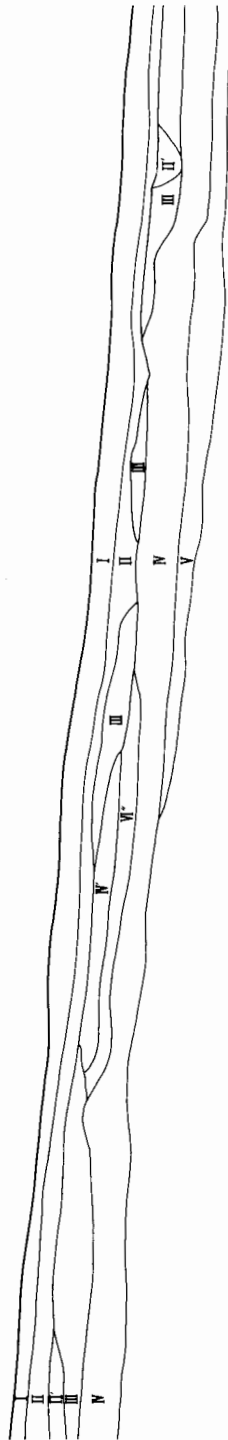


第4図 セクション図(1) A-B

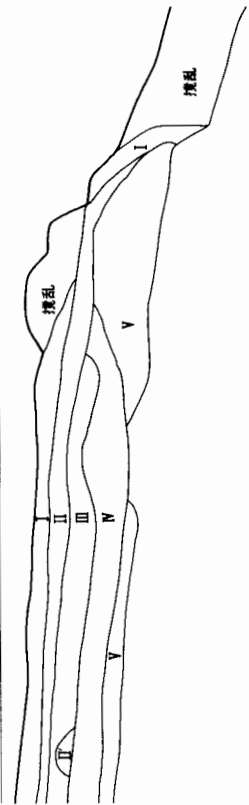
C 33,400m



32,800m

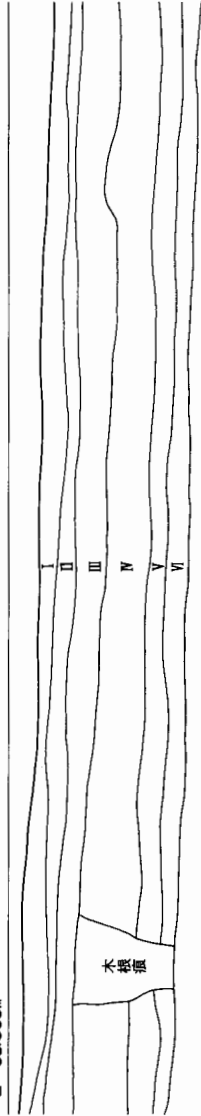


32,200m



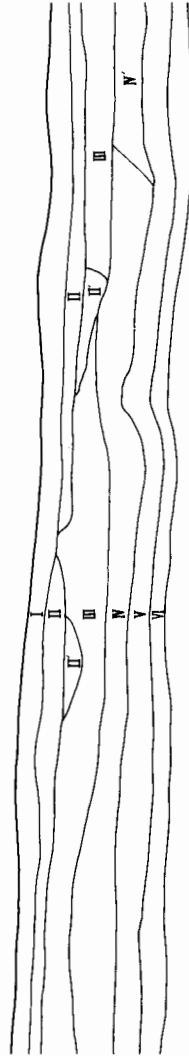
第5図 セクション図(2) C-D

E 33.380m



33.380m

F



0 1m

第6図 セクション図(3) E-F

第4章 遺構及び出土遺物

今回の発掘調査では、27個の墓壇状のピットを発見した。平成2年度14個、平成3年度1個、平成4年度12個である（第7図）。

第1号ピット（第8図，図版6A）

長径192cm，短径103cm，深さ41cmで，円形プランを呈する。人頭大の石1個が壇底から，やや大型の石2個が埋土中から出土し，そのうちの1個は擦石であった。

埋土は，次のとおりである。

第Ⅰ層 黒色土（真黒色）

第Ⅱ層 黒褐色土（褐色土をわずかに含む）

第Ⅲ層 黒色土（乾燥が早い）

第Ⅳ層 黒褐色土（Ⅱ層より褐色が少ない）

第Ⅴ層 黄褐色土

出土遺物は，1は縄文時代後期，2は続縄文時代初頭の土器である。石器は前述の擦石1点が出土したのみである。

第2号ピット（第9図，図版6B）

長径82cm，短径71cm，深さ14cmで，ほぼ円形プランである。埋土中から礫2個が出土した。

埋土は，次のとおりである。

第Ⅰ層 黒色土（真黒色）

第Ⅱ層 黒色土（乾燥が早い）

第Ⅲ層 黒褐色土

出土遺物は，縄文時代晩期末から続縄文時代の土器片18点が出土し，そのうち6点を図示した。

第3号ピット（第9図，図版7A）

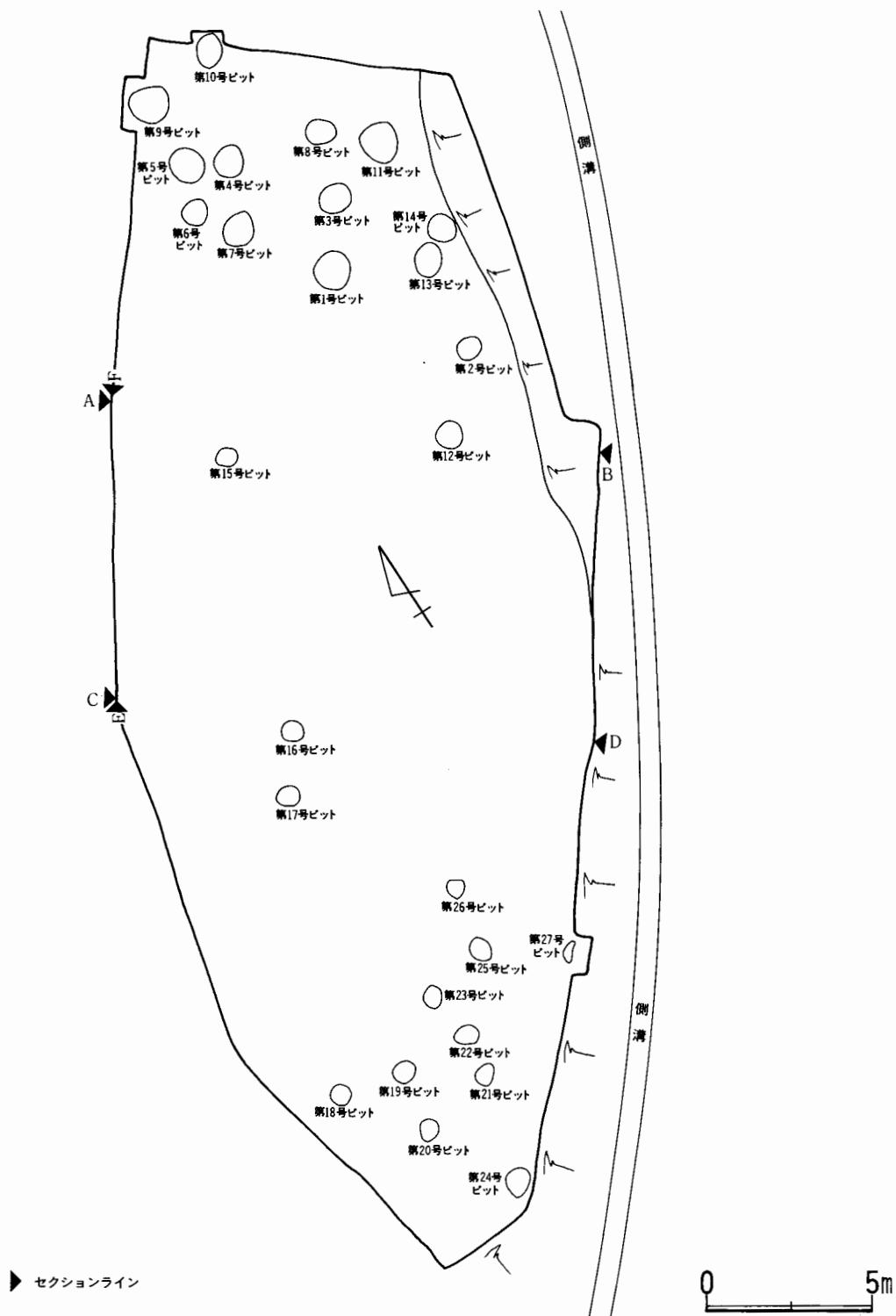
長径101cm，短径85cm，深さ26cm，やや楕円形を呈する。埋土中より拳大から人頭大の石11個が出土している。

埋土は，以下のとおりである。

第Ⅰ層 黒色土（真黒色）

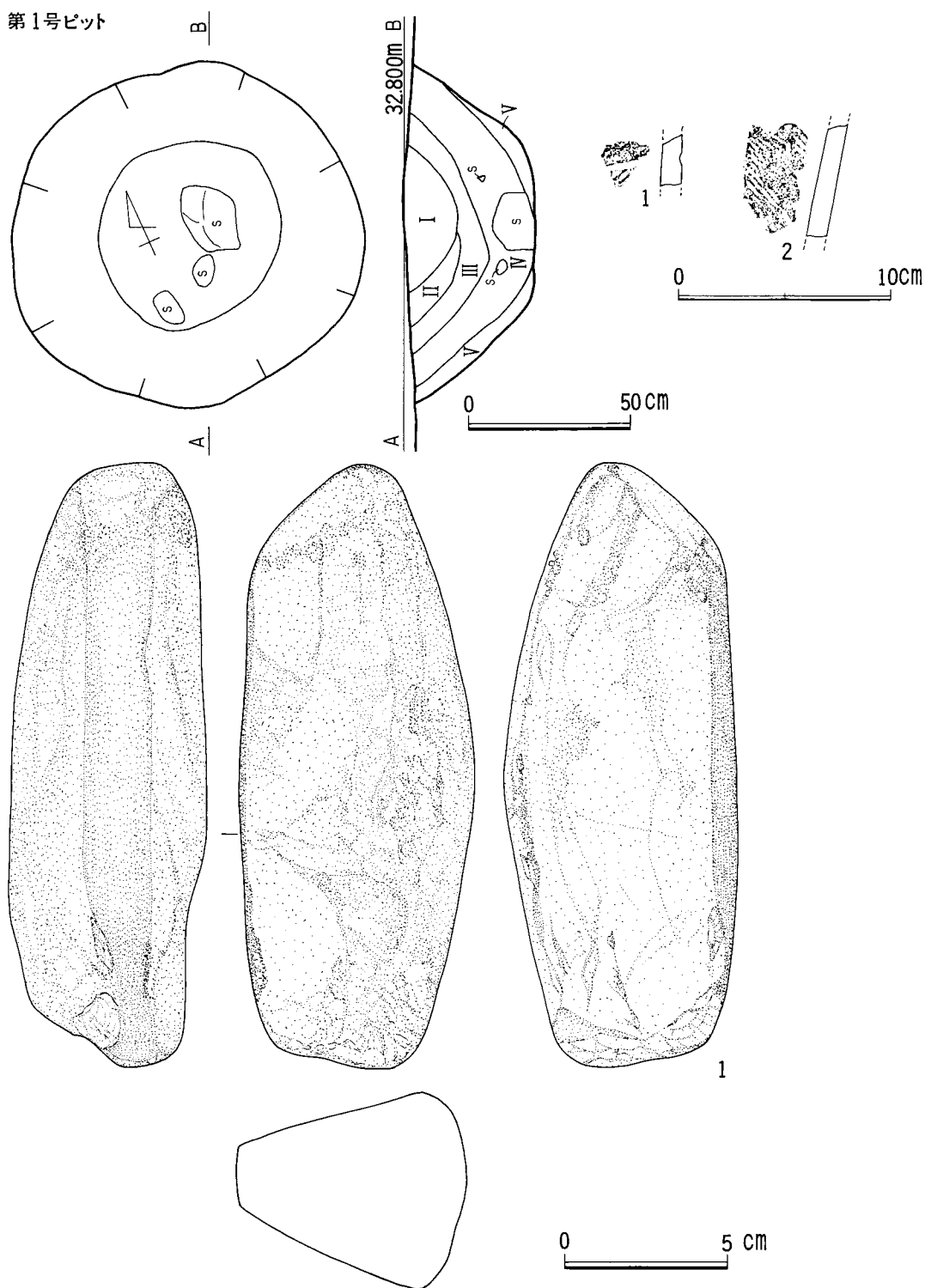
第Ⅱ層 黒色土（乾燥が早い）

第Ⅲ層 黄褐色土

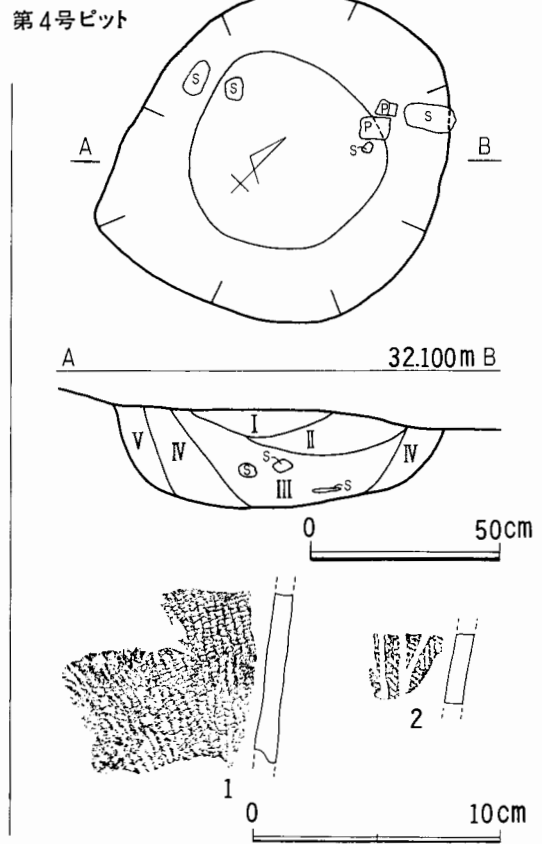
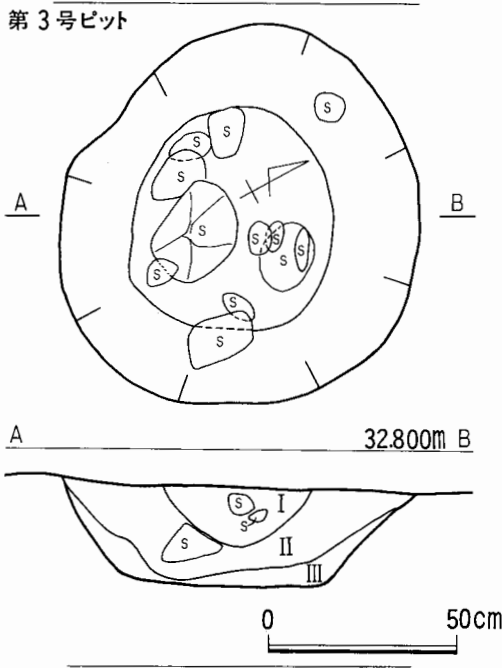
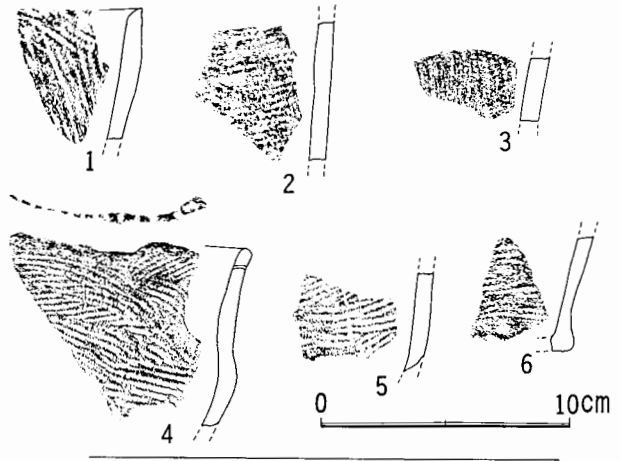
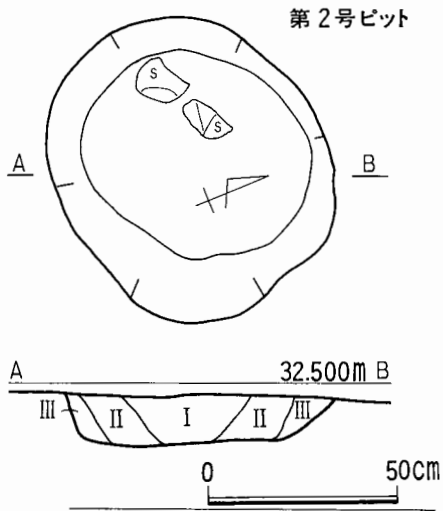


第7図 遺構配置図

第1号ピット

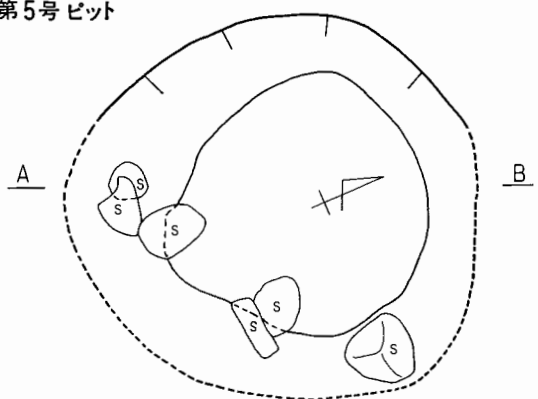


第8図 遺構および出土遺物(1)

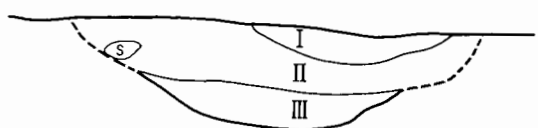


第9図 遺構および出土遺物(2)

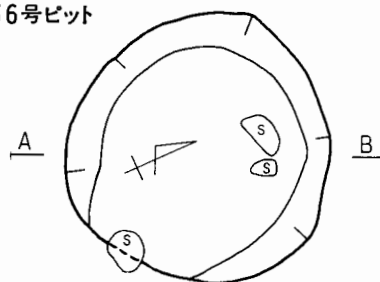
第5号ピット



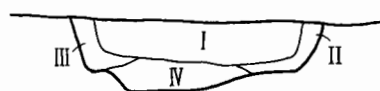
A 32.200m B



第6号ピット



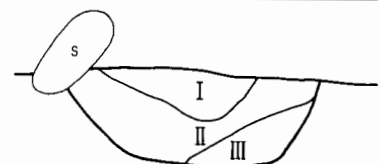
A 32.200m B



第8号ピット

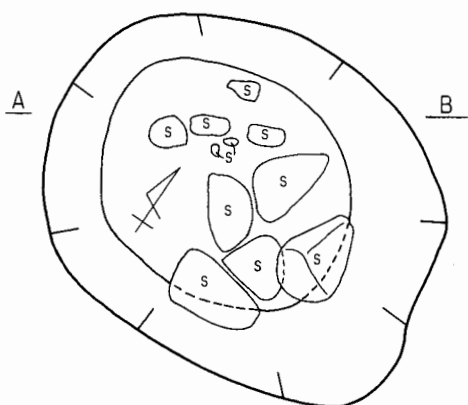


A 32.900m B

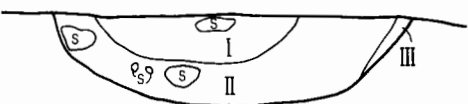


0 50cm

第7号ピット

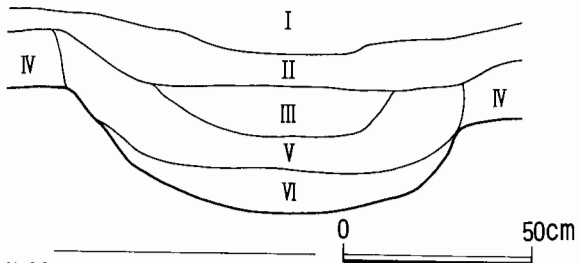
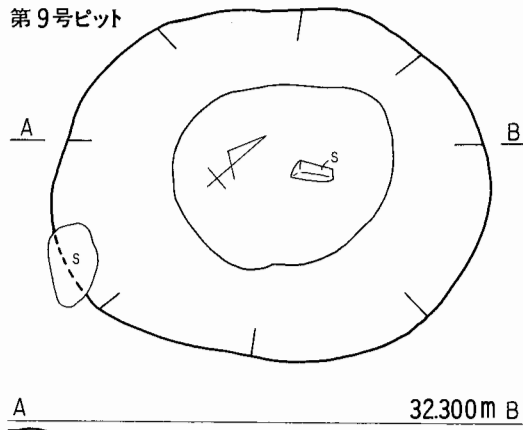


A 32.100m B

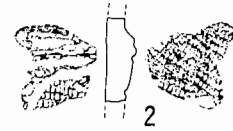
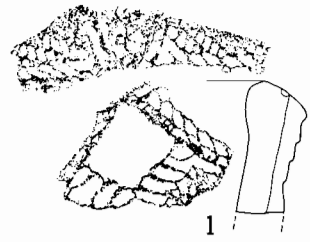
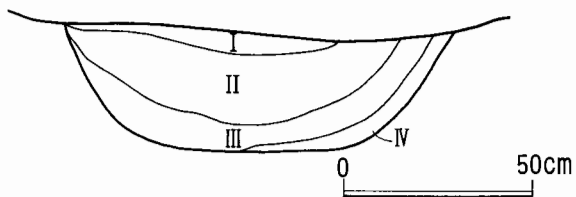
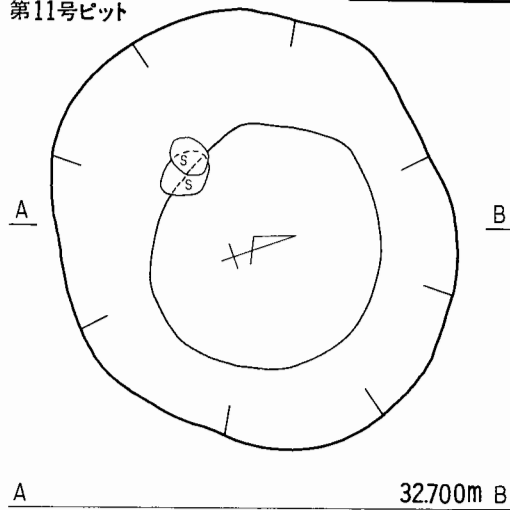


第10図 遺構および出土遺物(3)

第9号ピット



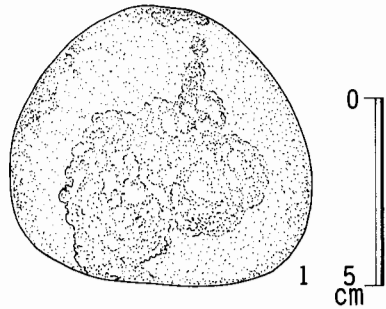
第11号ピット



0 10cm



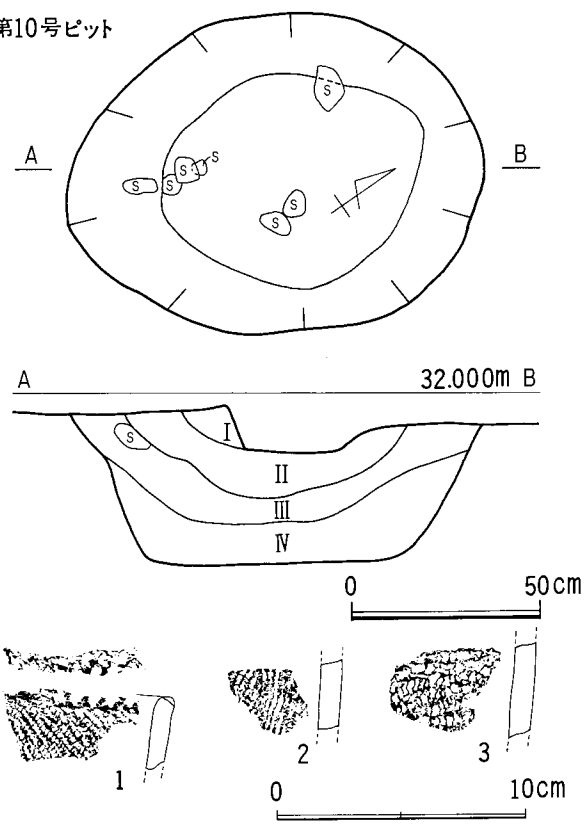
0 10cm



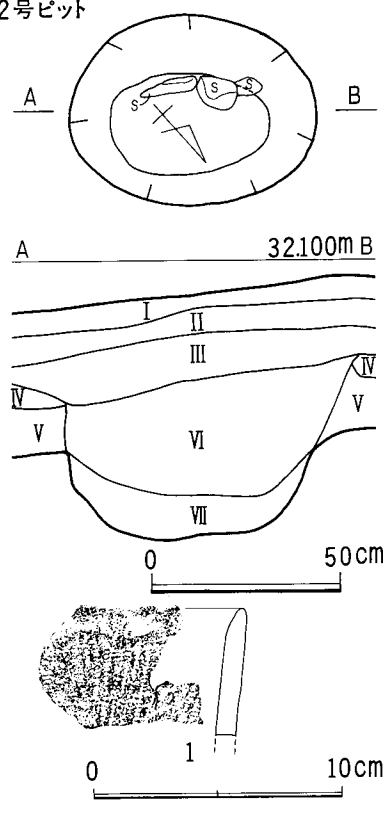
0 5cm

第11図 遺構および出土遺物(4)

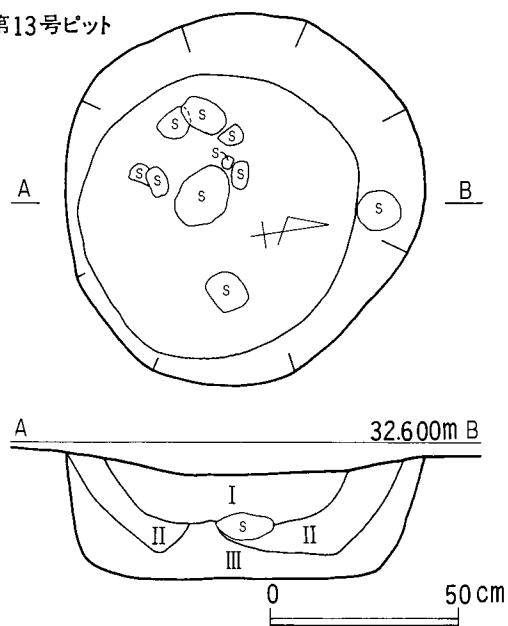
第10号ピット



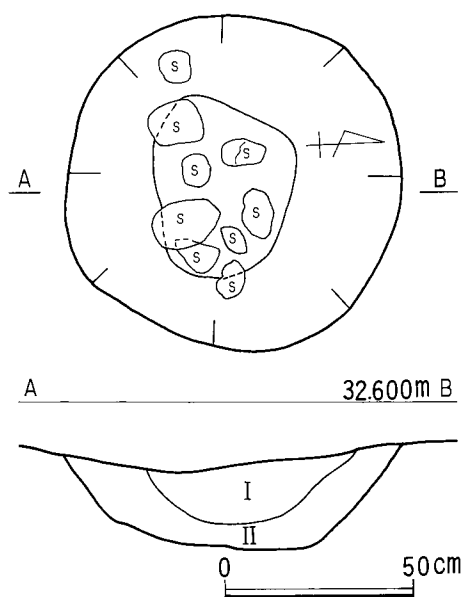
第12号ピット



第13号ピット

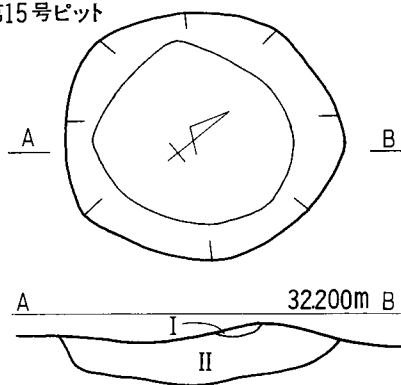


第14号ピット

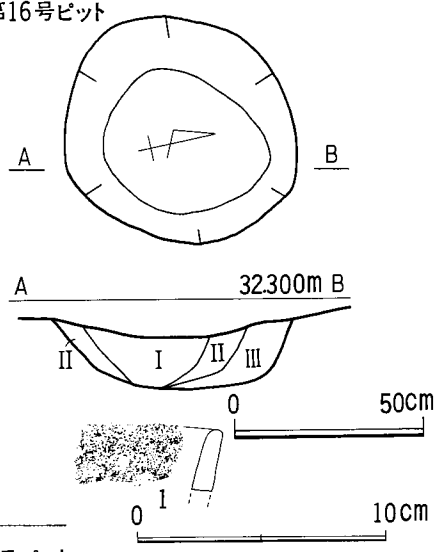


第12図 遺構および出土遺物(5)

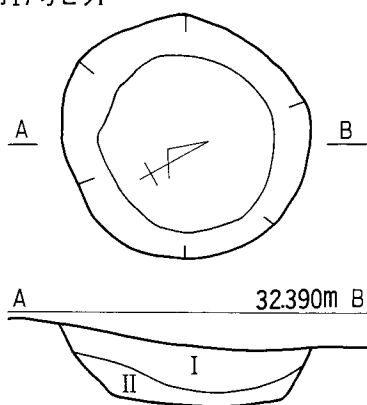
第15号ピット



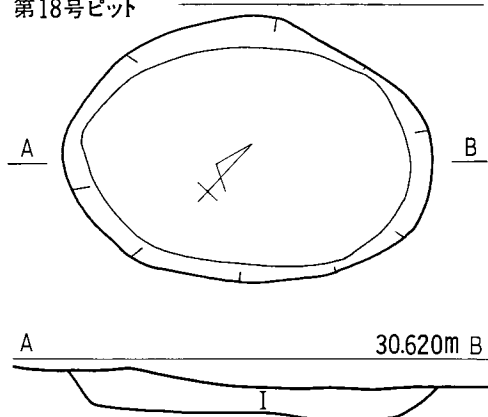
第16号ピット



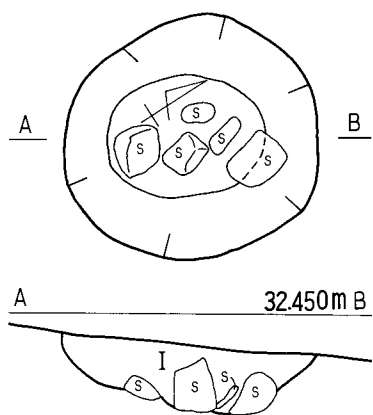
第17号ピット



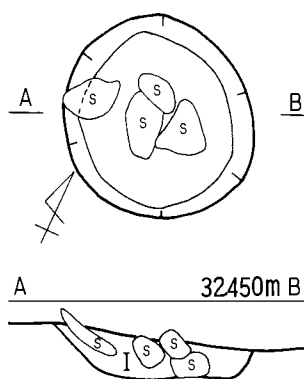
第18号ピット



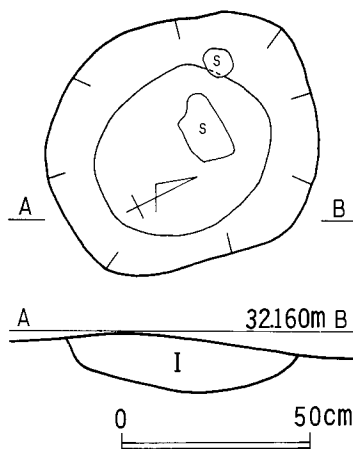
第19号ピット



第20号ピット

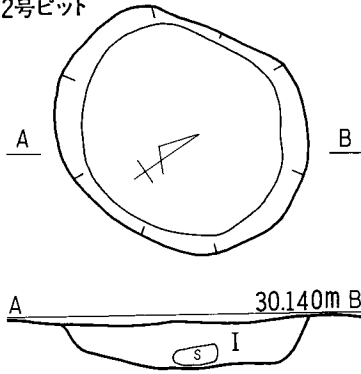


第21号ピット

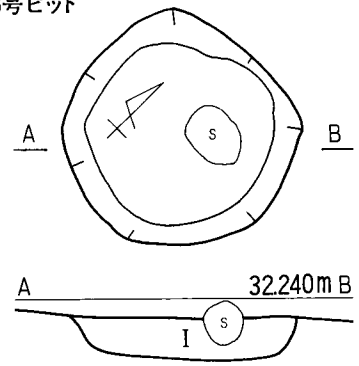


第13図 遺構および出土遺物(6)

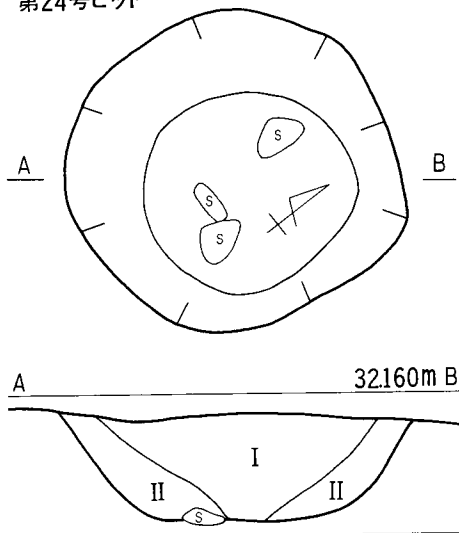
第22号ピット



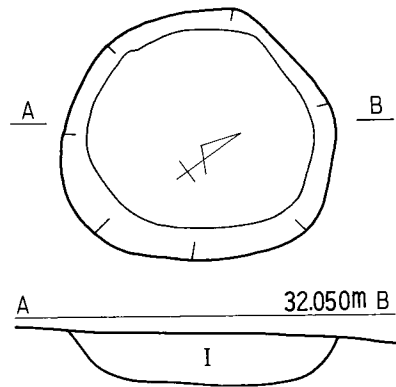
第23号ピット



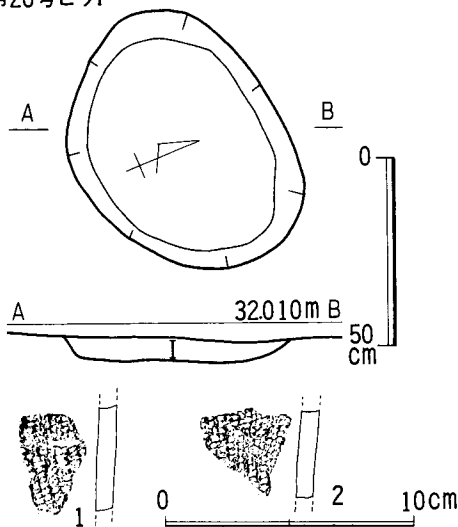
第24号ピット



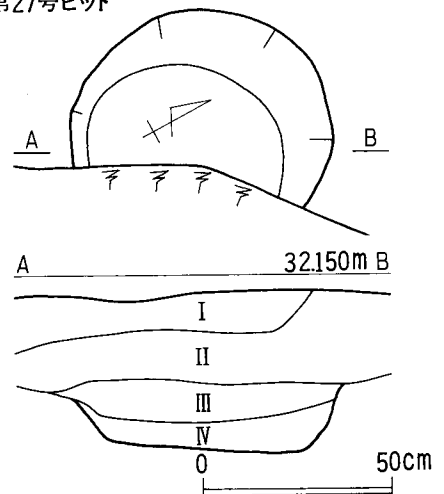
第25号ピット



第26号ピット



第27号ピット



第14図 遺構および出土遺物(7)

出土遺物は、何ら発見できなかった。

第4号ピット（第9図，図版7B）

長径 98 cm，短径 87 cm，深さ 26 cm，やや不整円形プランである。出土遺物は、埋土中から土器片 3 点と拳大の礫 3 個が出土した。

埋土は、次のとおりである。

第Ⅰ層 黒色土（真黒色）

第Ⅱ層 黒色土（乾燥が早い）

第Ⅲ層 黒色土（Ⅰ層よりやや明るい）

第Ⅳ層 黒褐色土

第Ⅴ層 黄褐色土

出土遺物は、1，2 ともに縄文時代後期の土器片である。

第5号ピット（第10図，図版8A）

大部分が立木の抜根により攪乱を受けており、その大きさ全体形は不明であるが、推定 110 cm，深さ 28 cm 程度と思われる。埋土中から人頭大の礫 6 個が出土した。

埋土は、次のとおりである。

第Ⅰ層 黒色土（真黒色）

第Ⅱ層 黒色土（乾燥が早い）

第Ⅲ層 黒褐色土

遺物は、特に発見できなかった。

第6号ピット（第10図，図版8B）

長径 72 cm，短径 70 cm，深さ 19 cm のほぼ円径を呈するピットである。一部が立木の根による攪乱を受けている。埋土中から礫 3 個を発見した。

第Ⅰ層 黒色土（真黒色）

第Ⅱ層 黒色土（乾燥が早い）

第Ⅲ層 黄褐色土

第Ⅳ層 黒褐色土

遺物は全く出土しなかった。

第7号ピット（第10図，図版9A）

長径 111 cm，短径 92 cm，深さ 24 cm の不正円形を呈する。埋土中から拳大から人頭大の礫 11 点が出土している。

第Ⅰ層 黒色土（真黒色）

第Ⅱ層 黒色土（乾燥が早い）

第Ⅲ層 黒褐色土

遺物は出土していない

第 8 号ピット（第 10 図，図版 9 B）

長径 75 cm，短径 73 cm，深さ 25 cm で円形プランを呈する。埋土中から大型の礫を含む 6 点の礫が出土している。

第Ⅰ層 黒色土（乾燥が早い）

第Ⅱ層 黒褐色土

第Ⅲ層 黒褐色土（地山土を混じる）

遺物は全く発見できなかった。

第 9 号ピット（第 11 図，図版 10 A）

長径 116 cm，短径 94 cm，深さ 41 cm のやや楕円形を呈する。本ピットは，現在の表土からセクションを観察することができたため，その掘り込み面も正確に確認することができた。埋土中から礫 2 個が出土した。

第Ⅰ層 表土（黒色草の根が多く混じる）

第Ⅱ層 乳白色火山灰混り黒色土

第Ⅲ層 黒色土（真黒色）

第Ⅳ層 黒色土（赤褐色火山灰を含む）

第Ⅴ層 黒色土（乾燥が早い）

第Ⅵ層 黒褐色土

遺物は，土器片 5 点が出土し，1 は縄文時代中期の口縁部であり，2 は縄文時代晩期終末から続縄文時代初頭の土器である。

第 10 号ピット（第 12 図，図版 10 B）

長径 112 cm，短径 84 cm，深さ 40 cm でほぼ楕円形プランを呈し，比較的大型であり，深さも深い。埋土中から拳大の礫 7 個と土器片 10 個が出土している。

第Ⅰ層 黒色土（赤色火山灰混入）

第Ⅱ層 黒色土（真黒色）

第Ⅲ層 黒色土（乾燥が早い）

第Ⅳ層 黒褐色土

10 片の土器片のうち 3 点を図示した。すべて縄文時代晩期終末から続縄文時代の土器である。

第 11 号ピット (第 11 図, 図版 11 A)

長径 119 cm, 短径 103 cm, 深さ 32 cm で、やや楕円形を呈する。埋土中から拳大の礫 2 点が出土し、うち 1 点は敲石であった。

第 I 層 黒色土 (真黒色)

第 II 層 黒色土 (乾燥が早い)

第 III 層 黒褐色土

第 IV 層 黄褐色土

遺物は土器片 2 点と敲石 1 点が出土した。1, 2 とも縄文時代中期の土器。3 は敲石で全体的に敲打痕が見られるが、特に長軸両端に集中している。

第 12 号ピット (第 12 図)

長径 65 cm, 短径 50 cm, 深さ 42 cm ほぼ円形を呈する。本号も現在の表土からセクションを観察することができ、正確な深さを確認することができた。埋土中から礫 3 個と土器片 1 点が出土。

第 I 層 黒色土 (表土)

第 II 層 乳白色火山灰混り黒色土

第 III 層 黒色土 (草根多し)

第 IV 層 赤褐色火山灰

第 V 層 黒色土

第 VI 層 黒色土 (真黒色)

第 VII 層 黒褐色土

出土土器は、縄文時代晩期終末から続縄文初頭の土器である。

第 13 号ピット (第 12 図, 図版 11 B)

長径 99 cm, 短径 95 cm, 深さ 32 cm, 円形プランである。埋土中から拳大から人頭大の礫 9 個が出土している。

第 I 層 黒色土 (真黒色)

第 II 層 暗黒褐色土

第 III 層 黒褐色土

遺物は全く発見できなかったが、第 31 図 67 に示した礫にはススとタール状の付着が見られる。

第 14 号ピット (第 12 図, 図版 12 A)

89 cm×89 cm, 深さ 26 cm であり、円形を呈する。埋土中からは、拳大から人頭大の礫 9 個を発見した。

第 I 層 黒色土 (乾燥が早い)

第 II 層 暗黒褐色土

遺物は全く出土していない。

第 15 号ピット (第 13 図, 図版 12 B)

長径 73 cm, 短径 66 cm, 深さ 15 cm で, ほぼ円形である。

第 I 層 焼土

第 II 層 黒色土 (やや褐色土混入)

遺物は全く発見できなかった。

第 16 号ピット (第 13 図, 図版 13 A)

長径 63 cm, 短径 58 cm, 深さ 17 cm, 円形プランである。埋土中から土器片 1 点が出土した。

第 I 層 黒色土 (白色粘土混入)

第 II 層 黒色土 (焼土混入)

第 III 層 黒色土 (やや褐色土混入)

1 は, 縄文時代晩期終末から続縄文時代初頭の口縁部破片である。

第 17 号ピット (第 13 図, 図版 13 B)

長径 66 cm, 短径 64 cm, 深さ 18 cm で円形プランを呈する。

第 I 層 黒色土 (やや褐色土混入)

第 II 層 黒色土 (白色粘土混入)

遺物は全く出土していない。

第 18 号ピット (第 13 図, 図版 14 A)

長径 97 cm, 短径 71 cm, 深さ 10 cm と極めて浅い。楕円形を呈する。

第 I 層 黒色土 (やや褐色土混入)

遺物は全く発見できなかった。

第 19 号ピット (第 13 図, 図版 14 B)

長径 67 cm, 短径 56 cm, 深さ 18 cm で円形プランである。墳底から 5 個の礫が発見された。

第 I 層 黒色土 (やや褐色土混入)

遺物は全く発見されていない。

第 20 号ピット (第 13 図, 図版 15 A)

長径 53 cm, 短径 49 cm, 深さ 12 cm の極めて小形の円形のピットである。墳底と埋土中から 4 個の礫が発見された。

第 I 層 黒色土 (やや褐色土混入)

遺物は全く発見できなかった。

第 21 号ピット (第 13 図, 図版 15 B)

長径 78 cm, 短径 69 cm, 深さ 14 cm で, やや不正円形を呈する。埋土中から礫 2 個が出土した。

第 I 層 黒色土 (やや褐色土混入)

遺物は出土しなかった。

第 22 号ピット (第 14 図, 図版 16 A)

長径 69 cm, 短径 56 cm, 深さ 13 cm, ほぼ円形プランを呈する。墳底から礫 1 個が出土した。

第 I 層 黒色土 (やや褐色土混入)

遺物は全く出土していない。

第 23 号ピット (第 14 図, 図版 16 B)

長径 63 cm, 短径 62 cm, 深さ 11 cm でやや不整円形である。埋土中から人頭大の礫 1 個が出土。

第 I 層 黒色土 (やや褐色土混入)

遺物は発見できなかった。

第 24 号ピット (第 14 図, 図版 17 A)

長径 87 cm, 短径 84 cm, 深さ 29 cm で, ほぼ円形を呈する。墳底から 3 個の礫が出土した。

第 I 層 黒色土 (真黒色)

第 II 層 黒色土 (やや褐色土混入)

遺物は出土していない。

第 25 号ピット (第 14 図, 図版 17 B)

長径 73 cm, 短径 66 cm, 深さ 14 cm, 円形プランである。

第 I 層 黒色土 (やや褐色土混入)

遺物は全く発見できなかった。

第 26 号ピット (第 14 図, 図版 18 A)

長径 73 cm, 短径 55 cm, 深さ 6 cm で発見したピット群中で最も浅い。楕円形プランを呈する。

第 I 層 黒色土 (やや褐色土混入)

1, 2 は同一土器の破片であり, 縄文時代晩期終末から続縄文時代初頭の土器である。

第 27 号ピット (第 14 図, 図版 18 B)

南東側の一部は, 斜面のため欠失している。長径 69 cm, 短径 46 cm 程の大きさであったと思わ

れる。深さ 17 cm である。

第Ⅰ層 盛土

第Ⅱ層 黒色土（草の根を多く含む）

第Ⅲ層 黒色土（真黒色）

第Ⅳ層 黒色土（やや褐色土混入）

遺物は全く発見されなかった。

第5章 発掘区出土遺物

本遺跡の発掘調査は、体験発掘という目的のために、発掘面積が極めて狭く少量の遺物しか発見できなかった。しかし、その内容は、以外と変化に富んでおり縄文時代早期、中期、後期、晩期、続縄文時代と各時期にわたる土器が出土している。

第1節 土 器

縄文時代早期土器（第15図1～15）

貝殻腹縁文を主体とするものと撚紐の押圧を主体とするものの2種類がある。

A（1～4）

1，2ともに微隆起線文と貝殻腹縁文により文様を構成する。3は，貝殻腹縁文を口縁部にV字状に施文し，これより垂下する沈線文及び横走条痕文を持つ。4は，横走する条痕文のみが見られる破片である。

B（5～15）

5は，撚紐を押圧し斜行と横走する文様を構成する。口唇には，一部に竹管状工具の側面の押圧による刻み目がつけられる。7，8，9，10，11～14は，焼成，胎土などから同一土器の破片と思われる。7は，口唇部に刻みが見られ，10，12は裏面にも文様がつけられる。口唇部以外では，弧状の文様構成も見られる。6は太い撚紐，9は細い撚紐により施文され，前者の口唇には細い工具による刻み，後者の口唇には太い工具による刺突がつけられる。

撚紐による文様を最も多く施文する土器は，いわゆる東釧路Ⅳ式土器である。しかし，東釧路Ⅳ式土器では，本遺跡出土の5，6，9などの文様構成を持つ土器はほとんど見られず，矢羽根状の文様構成が主である。本遺跡出土土器に近い文様構成のものは，東釧路Ⅲ式土器に見られるが，文様を施文する原体が，組紐や絡条体圧痕文によるもので，やはり本遺跡例とは異なる。広く類例を求めるとすれば，早期よりもむしろ続縄文時代初頭の縄線文土器群に近いものを見ることができる。ここであえてこの時期としたのは，これらの土器の焼成，胎土が晩期から続縄文時代初頭の土器と異なることが大きな理由である。

縄文時代中期（第15図16～37，第16図38～60）

16は，太い工具による刺突と押し引きをくり返すような沈線を施文する。17は，先端の平らな工具による刺突文をせまい間隔で連続的に施文し，沈線状の文様を作り出している。

48～51，53～54は，同一土器の破片であろう。頸部に半截竹管工具の内側による連続刺突文（突引文）を施文した貼付帯をめぐらし，胴部には突引文と同一工具の内側を用いた沈線による文様を

描く。地文は縄文で裏面にも施文される。52 は、やや胎土が異なるが同様な工具による沈線が施文される。57～60 は、突引文を横走させるものである。

18～45 は、縄文の施文される土器群である。18～21 は、綾絡文が見られるものであるが羽状縄文となるもの（18, 19, 21）と、そうでないもの（14）がある。22～24 は、羽状縄文となり、24 は縄文が消失している。焼成がよく比較的縄目の文様が明瞭なもの（27, 28, 30, 31, 33）や、胎土に砂粒が多く磨滅が著しく文様が不明瞭なもの（29, 37, 38）などがある。46, 47 は無文の土器である。

縄文時代中期終末～後期初頭土器（第 16 図 61～73, 第 17 図 74～84, 89～97, 第 18 図 98～104, 第 27 図 424～435）

文様の特長から大きく A, B に分けられる。

A（61～81）

61 は、口縁部に斜行する太い沈線を施文し裏面にも縄文を施文する。62～64 は、口縁部が外反する器形の土器で、表面は無文と沈線文を主とする。62 は裏面にも縄文を施文する。焼成、胎土から同一土器の破片かとも思われる。65 は、指頭状の押圧を持つ貼付帯を施文する。66～75, 78～81 は、沈線文を主体とする土器である。66, 67 は、口縁部破片で弧状、横走の沈線を施文するものである。65 は裏面にも沈線と縄文が見られる。68 は磨滅が著しく文様が明らかでないが、2 条の横走沈線と曲線の沈線により文様が構成される。

69, 70, 73, 75, 78, 79, 80 は、2 条単位の横走沈線と鋸歯状沈線を主体とする。72 もほぼ同様と思われる。74 は、横走沈線と太い撚紐を押圧（縄線文）した斜行する幅広い貼付帯とにより文様を構成する。76 は、太い縄線文を横走させ、81 は弧状の沈線が施文される。以上の土器は、胎土に砂粒を多く含んでおり磨滅が著しく、文様が明瞭でないものが多い。

B（89～104, 424～435）

89 は、口縁に横走する太い縄線文をめぐらし、口唇にも縄文を施文する。90 は、口唇に縄文を施文し、さらに表裏にも縄文を施文する。91 は、90 と同一土器の破片であろう。92～104 は、同一土器の破片である。口縁に 3 条の横走縄線文をめぐらし、その間に竹管工具による刺突文を施文する。口唇と胴部には縄文が施文される。これらの土器は焼成がよく赤褐色を呈し固い。

92 以下の土器は、縄文時代晩期終末から続縄文時代初頭にかけて見られる縄線文と竹管文の土器に施文方法、文様の構成が類似するものがある。しかし、本遺跡の土器は、焼成、胎土が晩期終末以後の土器と異なることから、一応この時期の土器とした。

424～435 は、撚糸文の施文される土器である。網目状撚糸文の見られるもの（427, 428）、口唇に横走する撚糸文を施文し、胴部以下縦走の文様とするもの（424, 425, 429）などがある。

82～88 は、中期及び中期終末から後期初頭の土器群の底部を一括した。83～87 は、焼成、胎土から前者に、82, 88 は同様の理由から後者に帰属するであろう。

縄文時代後期土器（第 18 図 105～102，第 19 図 127～153）

大きく 2 つの時期に分けられる。

A（105～112）

器壁が厚く直線的な沈線によるモチーフを主とする土器で、B より古い段階に位置する。105～107 は、鍵状の沈線による文様を持ち、108、109 は、沈線による角形の文様を描くものである。110、111 は、同一土器の破片であり、弧状と菱形の沈線文を主体とし、112 は、平行沈線を施文する。113 は縄文のみである。

B（114～153）

A 段階の土器よりやや精巧な文様を施文する。口縁部に、弧状、山形の沈線文を施文する土器は A 段階でも出現するが、胎土、焼成から、この段階に含めた。

114～119、121 は、口縁部破片で弧状、山形の沈線を施文する土器群で、115、118、121 は口唇にも縄文が見られ、地文はすべて縄文である。120 は縄文のみが施文される。122～126 は、同様な文様構成を持つ頸部破片であり、前述の土器群の破片と思われる。127 は、無文の口縁部でやや研磨されている。128～130 は沈線の見られる口縁部破片である。131～133 は、S 字状、C 状などの沈線で上下の平行沈線を結ぶものである。134～137 は、単純な平行沈線、段差のある平行沈線を数条めぐらす土器である。138～150 は、直線、曲線の沈線を主体とし、磨消縄文の発達した土器である。151 は、注口土器の破片であろう。本遺跡からは唯一の出土である。152、153 は、この時期に伴うと思われる底部である。

縄文時代晩期終末～続縄文時代初頭土器（第 19 図 154～164，第 20 図～第 26 図，第 27 図 436～446，第 28 図）

154～158 は、同一土器ないしは同一器形の土器であろう。口縁部に貫通孔を有する貼瘤を持ち、平行沈線をめぐらす。胴部は、平行沈線の端末の粘土を盛り上げて工字文風の文様を作り出している。この時期に特有な舟型土器であろう。160～162 は、平行沈線をめぐらす土器で、160 は、口唇に沈線をめぐらし、161 は刻みと縄文を施文する。162 は、160 に焼成、胎土が極めて近い。

163 は、口縁部に山形の沈線と平行沈線を施文し、口唇にも縄文がつけられる。164、165 は、やや太い工具による菱形の沈線文を構成する。166 は、平行沈線間に波状沈線を配する。167～170、176、182 は、太い工具による粗雑な平行または波状沈線を施文する。

171、172 は同一の土器の破片であろう。口唇に刻みを持つ突起を持ち、平行沈線とこれにはさまれる横長の四角形の沈線文とから構成され、胴部以下無文である。173、174 も同一土器の破片で、口唇部にやや幅のある突起を有し、平行沈線と斜行の沈線の見られる土器である。175 は、頸部から大きく外反する器形で、舟型を呈するかとも思われる。口唇には縄文が見られ、頸部近くに外側からの穿孔が見られる。177～181、183～185、187、188 はやや小型の土器もしくは浅鉢形土器の破片である。いずれも沈線文を主としている。186、191 は、太く短い横の沈線を粗雑に施文した土器である。192 以降は、いわゆる縄線文土器群である。縄線文は 2 条から 4 条施文される。太い撚紐に

よる縄線文土器は、口唇に縄文を施文するものが多く(168～199, 202), 口唇の無文のもの(203～206)は数が少ない。口唇に刻みをつける例が2点(200, 201)見られる。

208 は、口縁が大きく外反し頸部に2条の縄線文を施文し口唇に刻みを有する。209 は、太い縄線文を持つ土器の胴部破片、213, 215 は、小型土器で細い原体による縄線文が施文される。

210～212, 214, 216～222 は、撚糸の押圧による土器である。210～212 は、頸部から口縁に向けて大きく外反する土器で同一固体であろう。214 は、細い原体を用いた施文で、口唇に刻みを持つ。216 は横走と波状の文様を構成する。217～220 は、同一土器と思われ焼成、胎土が極めて類似し、弧状の撚紐押圧と縄文による文様である。221, 222 は、横走する文様である。

223～225 は、同一土器の破片である。口唇に刻みを施文し撚紐の押圧による波状の文様構成を主体とし、以下縄文となる土器である。器形は、口縁が大きく広がる形を示し、浅鉢形になると思われる。この土器と似たような文様を持つ土器は、縄文時代早期の土器群にも見受けることができる。しかし、文様構成の基本的なパターンは、早期の土器というより続縄文時代初頭の縄線文土器に最も一般的なものであることから、この時期の土器群とした。226～229 も同一土器の破片である。口唇に横に長い刺突を持ち、4条の横走する撚紐の押圧とU字状の押圧文を施文し、以下縄文となる土器である。道東域に一般的に見られる縄線文土器群の仲間であろう。

第22図は、縄文のみが施文される土器群の口縁部破片である。口唇に縄文を施文するもの(230～244)と無文のものがある。

第23図～第26図384～408 は、胴部破片である。縄文のもの、撚糸文のもの、縞縄文のものなどが見られ、やや時間幅があるが焼成、胎土からそのほとんどは、晩期終末から続縄文時代初頭に位置づけられよう。

第27図436～446もこの時期の無文土器である。

第28図もやはり、この時期の土器の底部を一括した。底部の形は、平底が最も多く、やや丸底を呈するもの少量と揚げ底になるもの少量が認められる。また、意識的に穿孔が認められる土器(図版29)もある。

続縄文時代後半の土器(第27図418～423, 447～455)

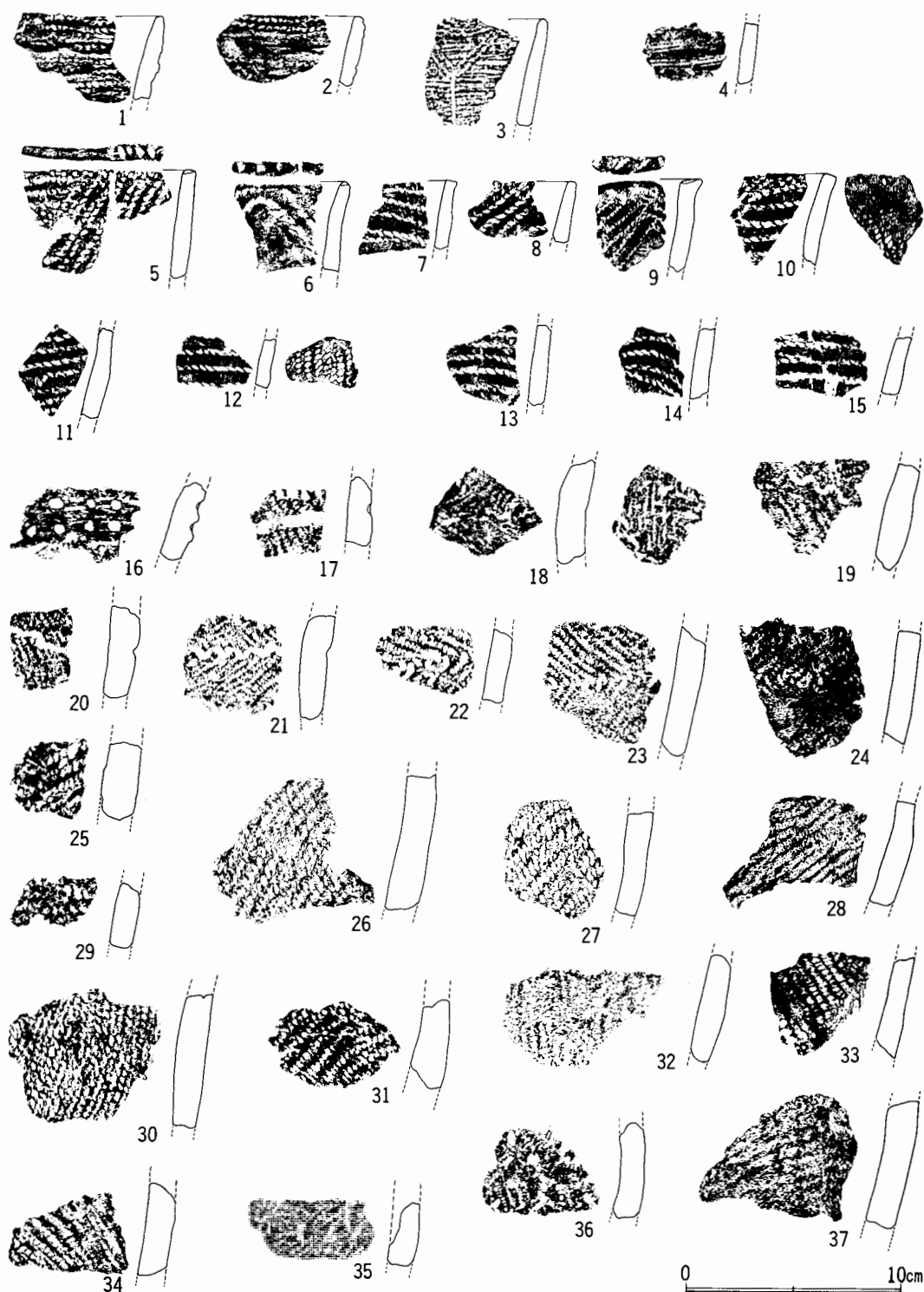
大きく2種類に分けられる。

A(418～423)

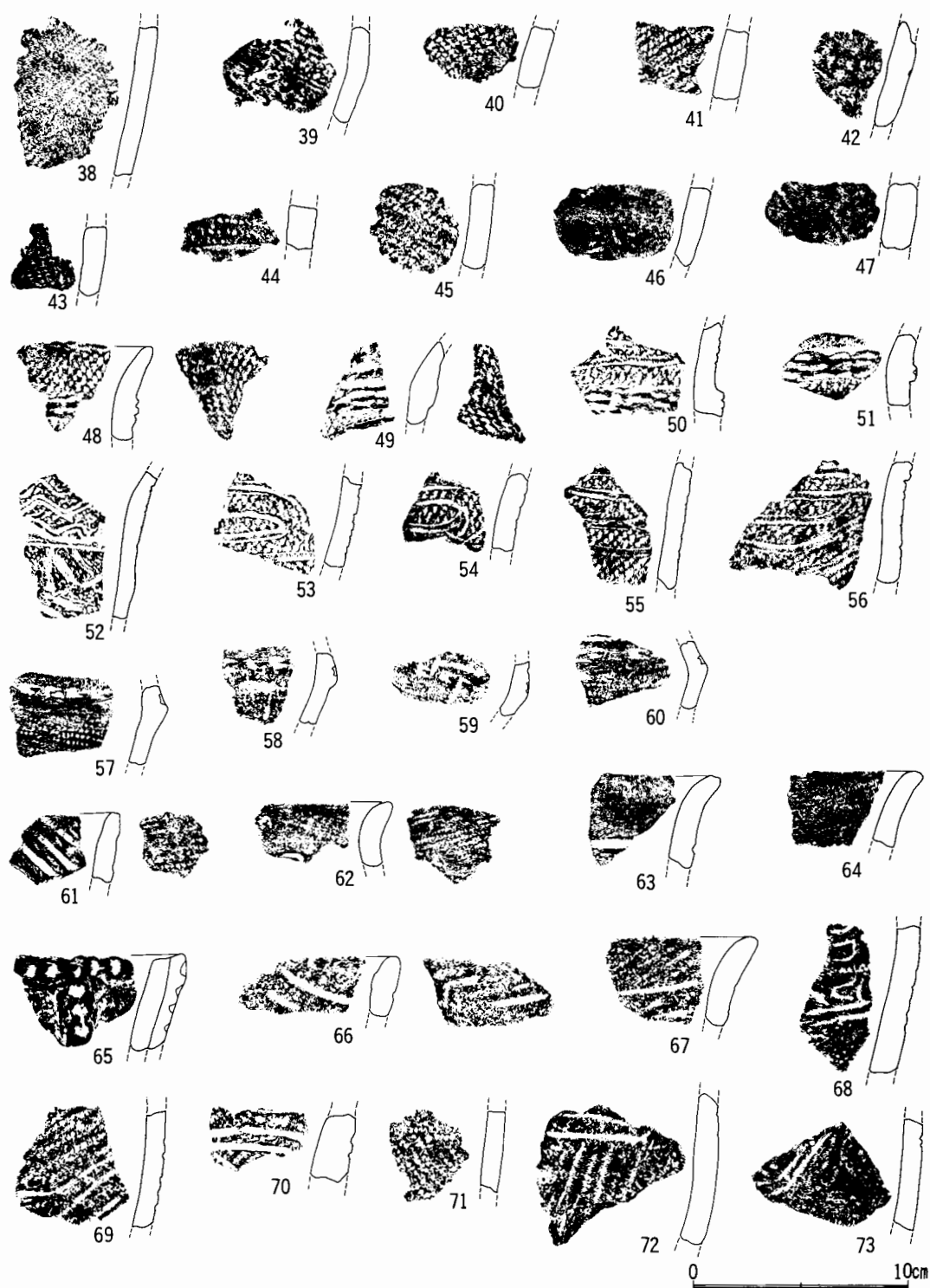
同一土器の破片で、撚糸文の施文される土器である。

B(448～455)

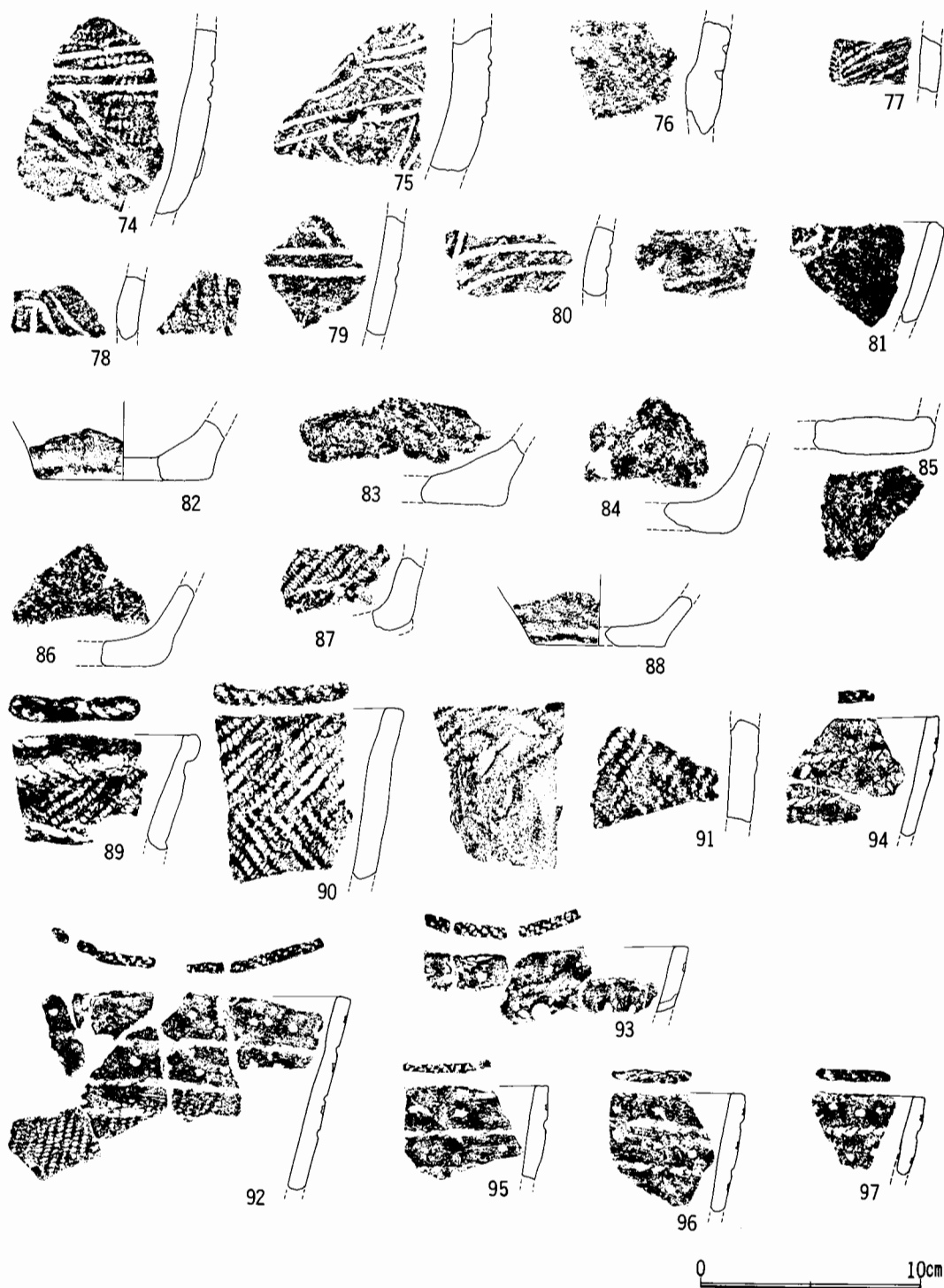
いわゆる後北C₂—D式土器と呼ばれ、帯縄文の施文される土器である。口縁部から底部まで見られる。底部は、意識的に穿孔された痕跡が認められるものもある(455)。



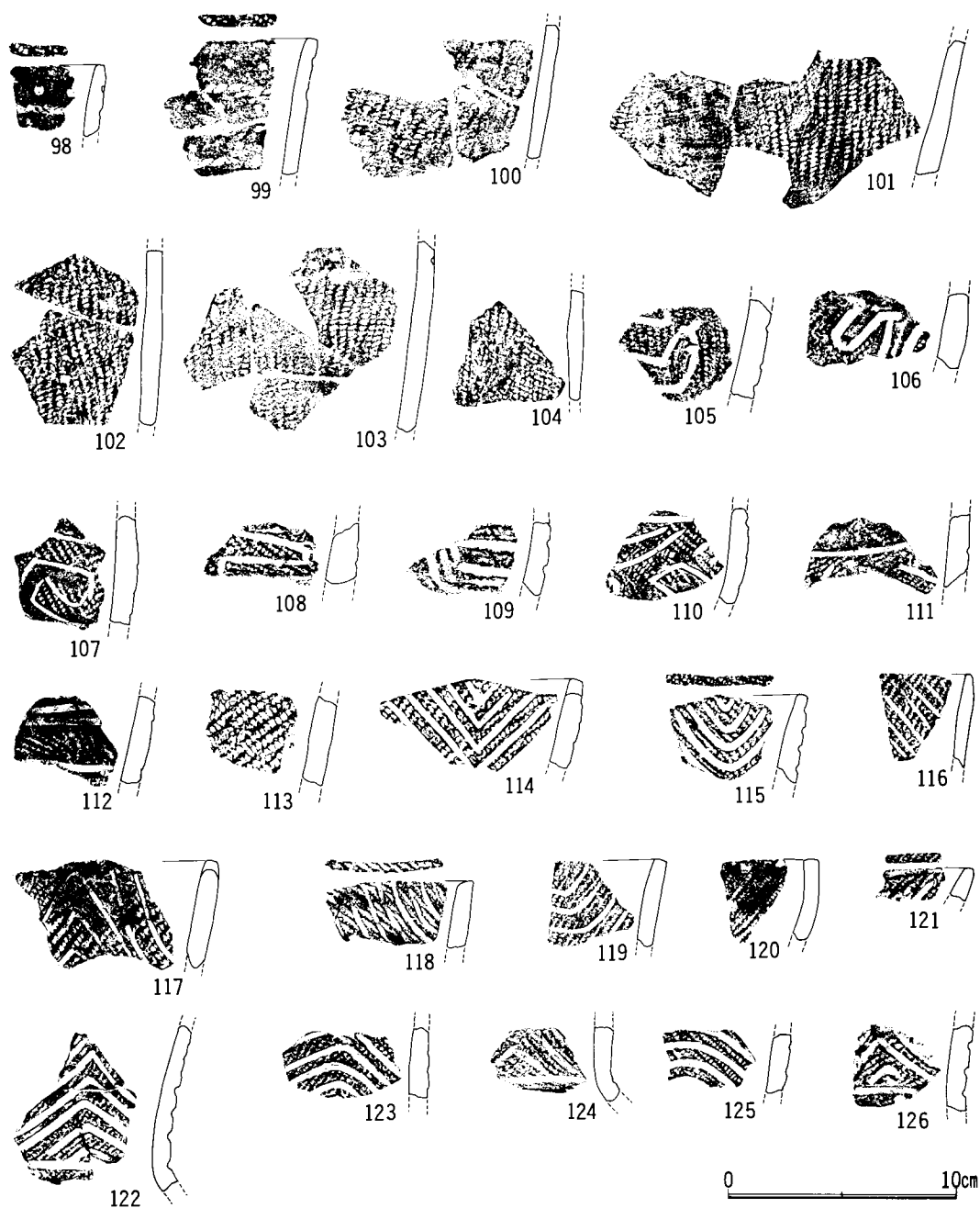
第15图 发掘区出土土器拓影图(1)



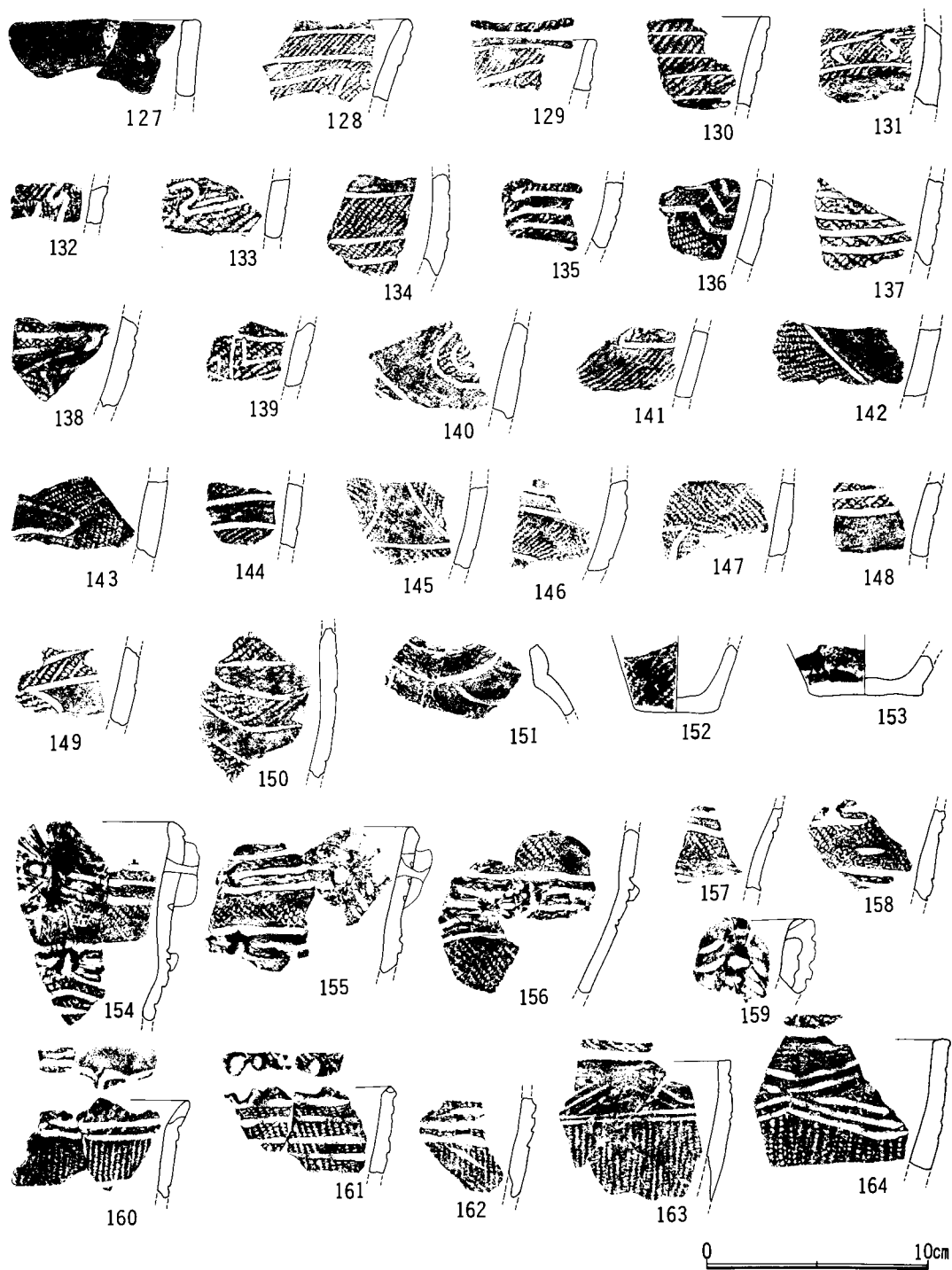
第 16 图 发掘区出土土器拓影图(2)



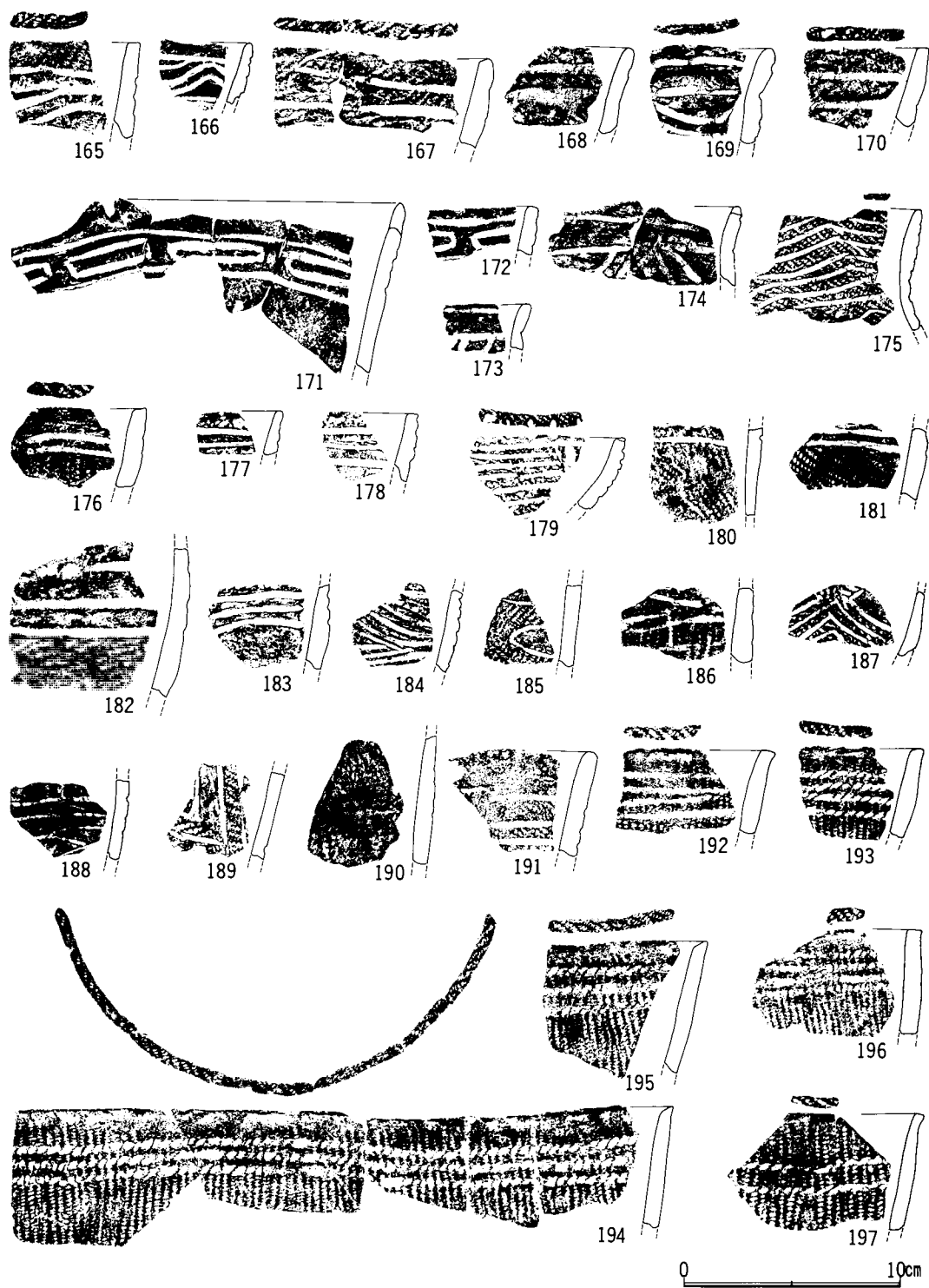
第 17 图 发掘区出土土器拓影图(3)



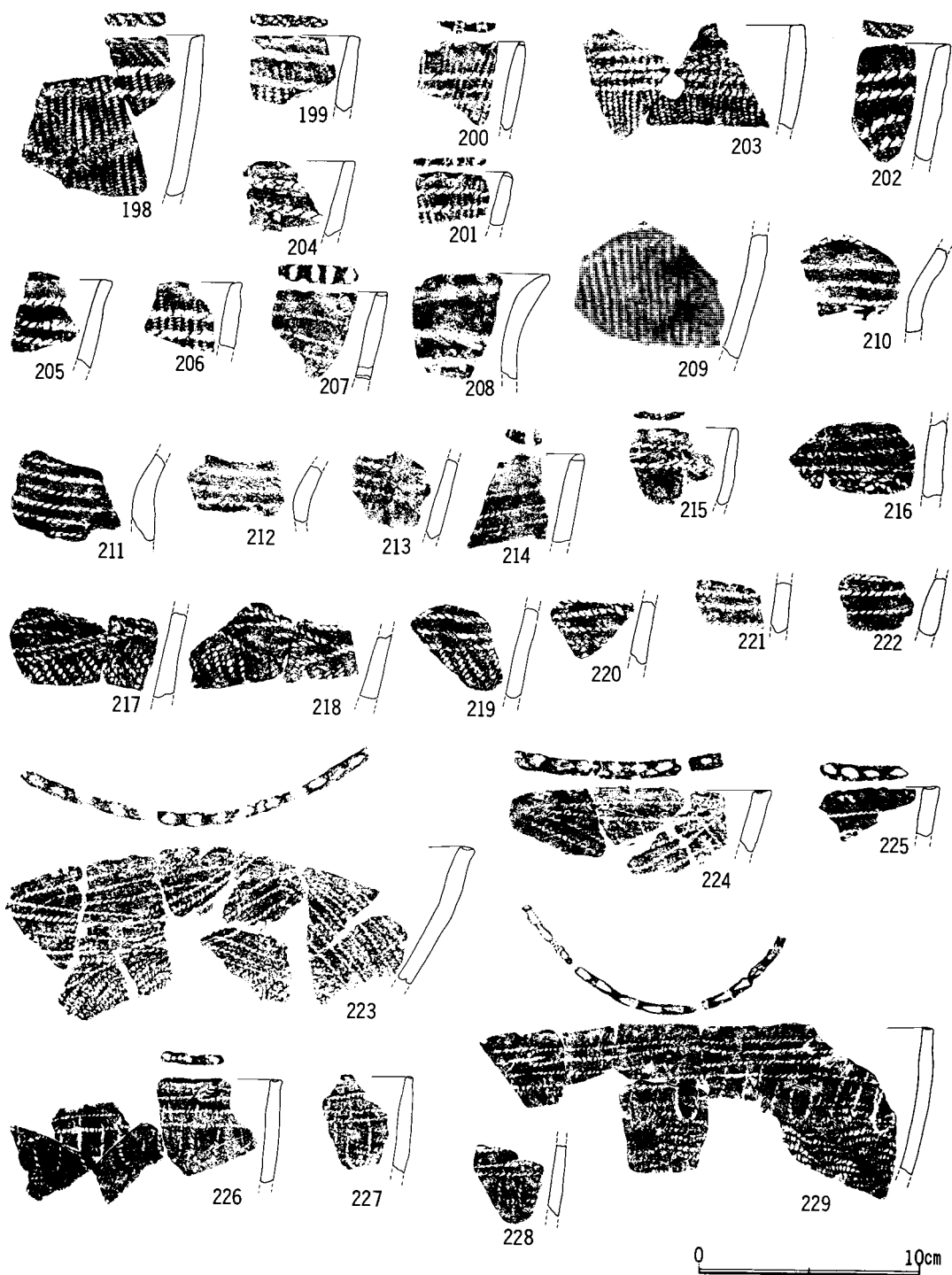
第 18 图 发掘区出土土器拓影图(4)



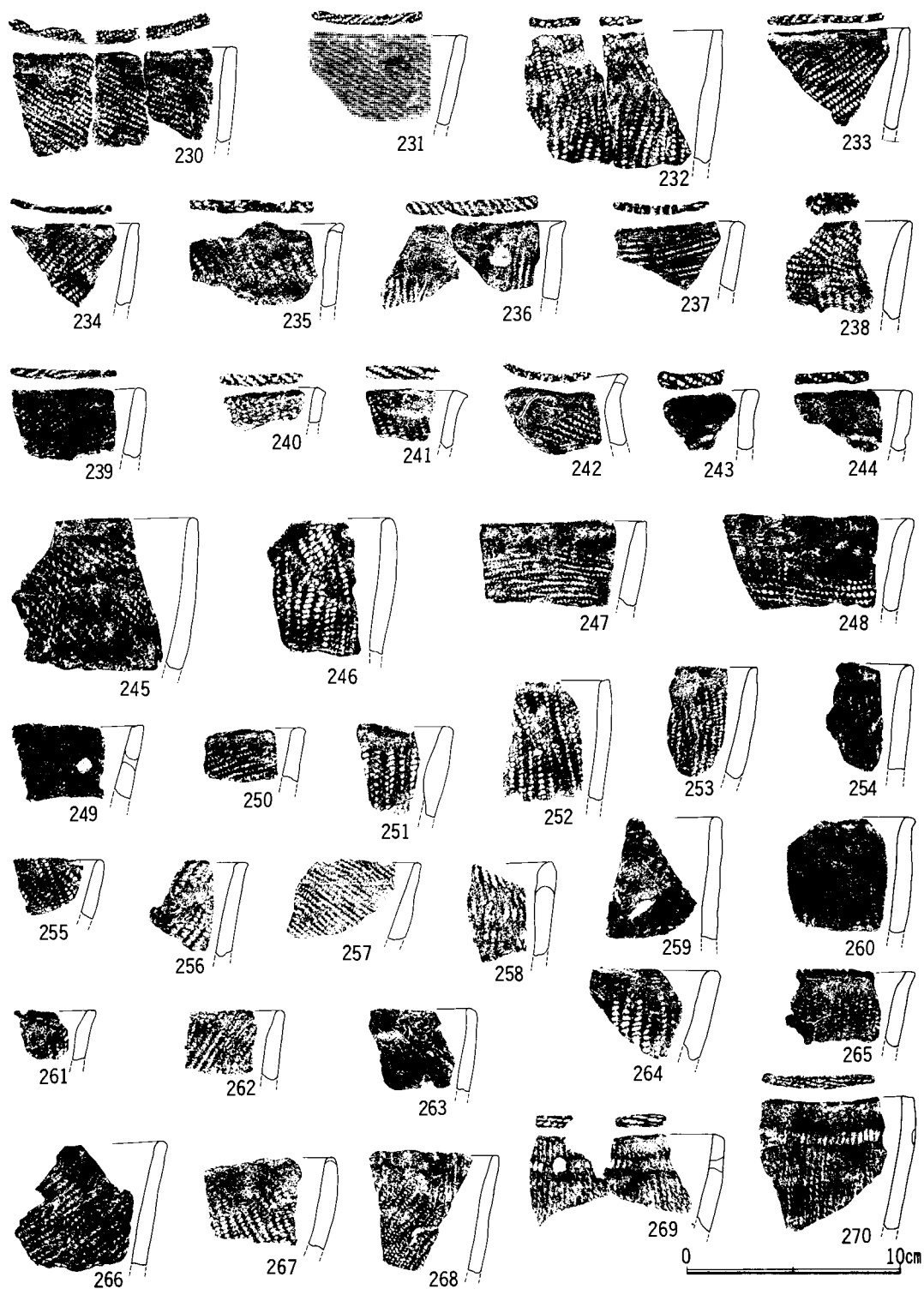
第 19 图 发掘区出土土器拓影图(5)



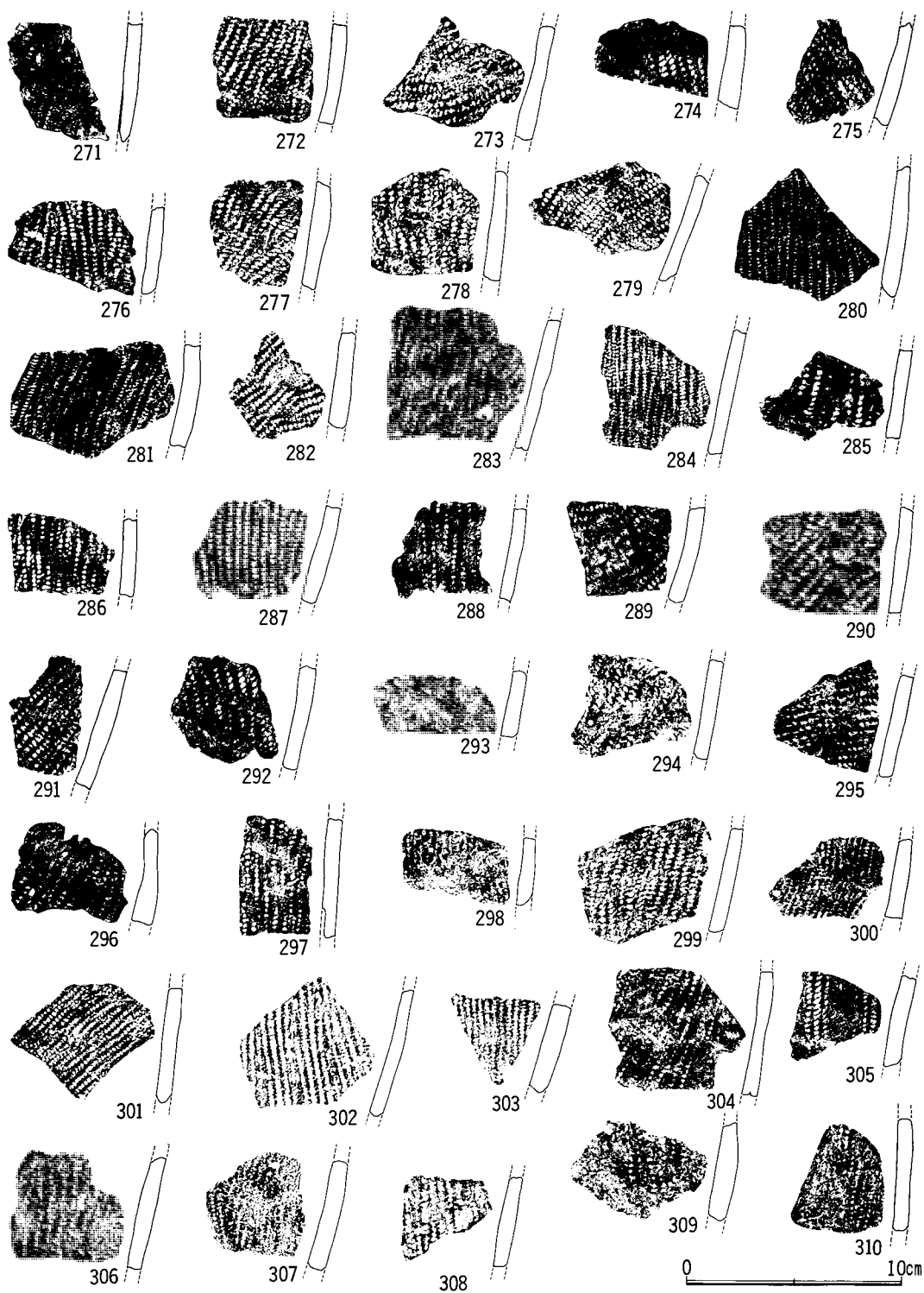
第 20 图 发掘区出土土器拓影图(6)



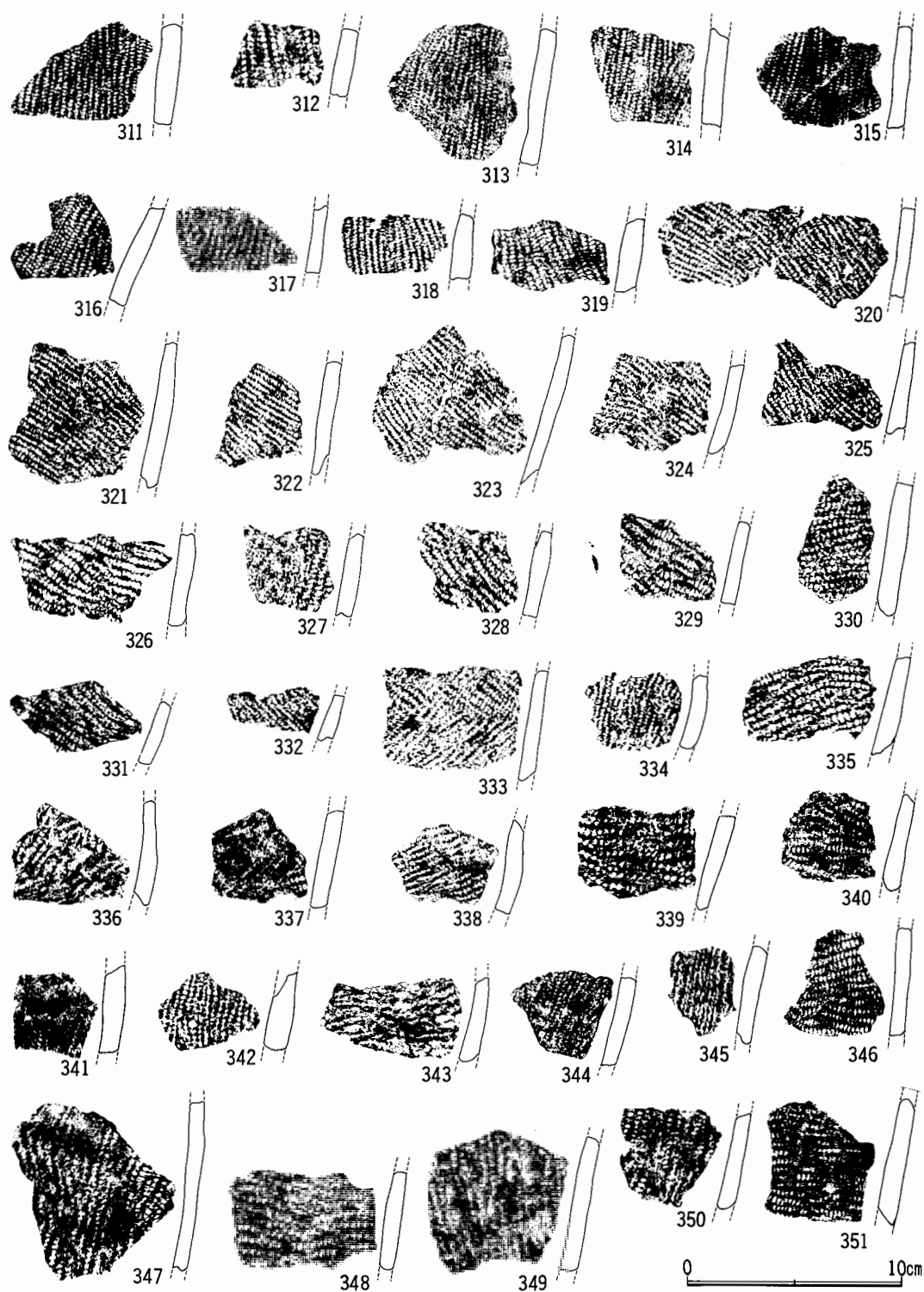
第 21 图 发掘区出土土器拓影图(7)



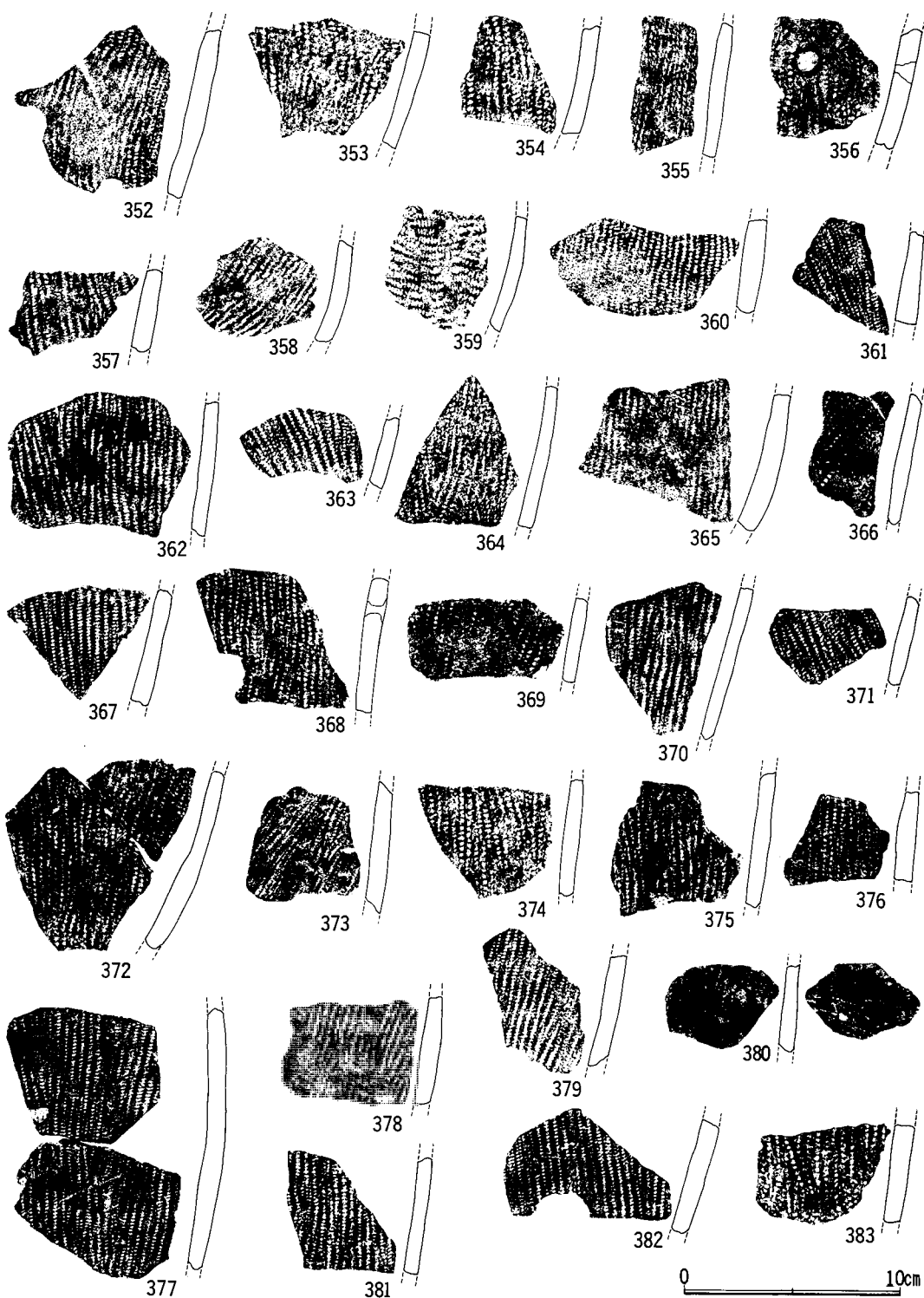
第 22 图 发掘区出土土器拓影图(8)



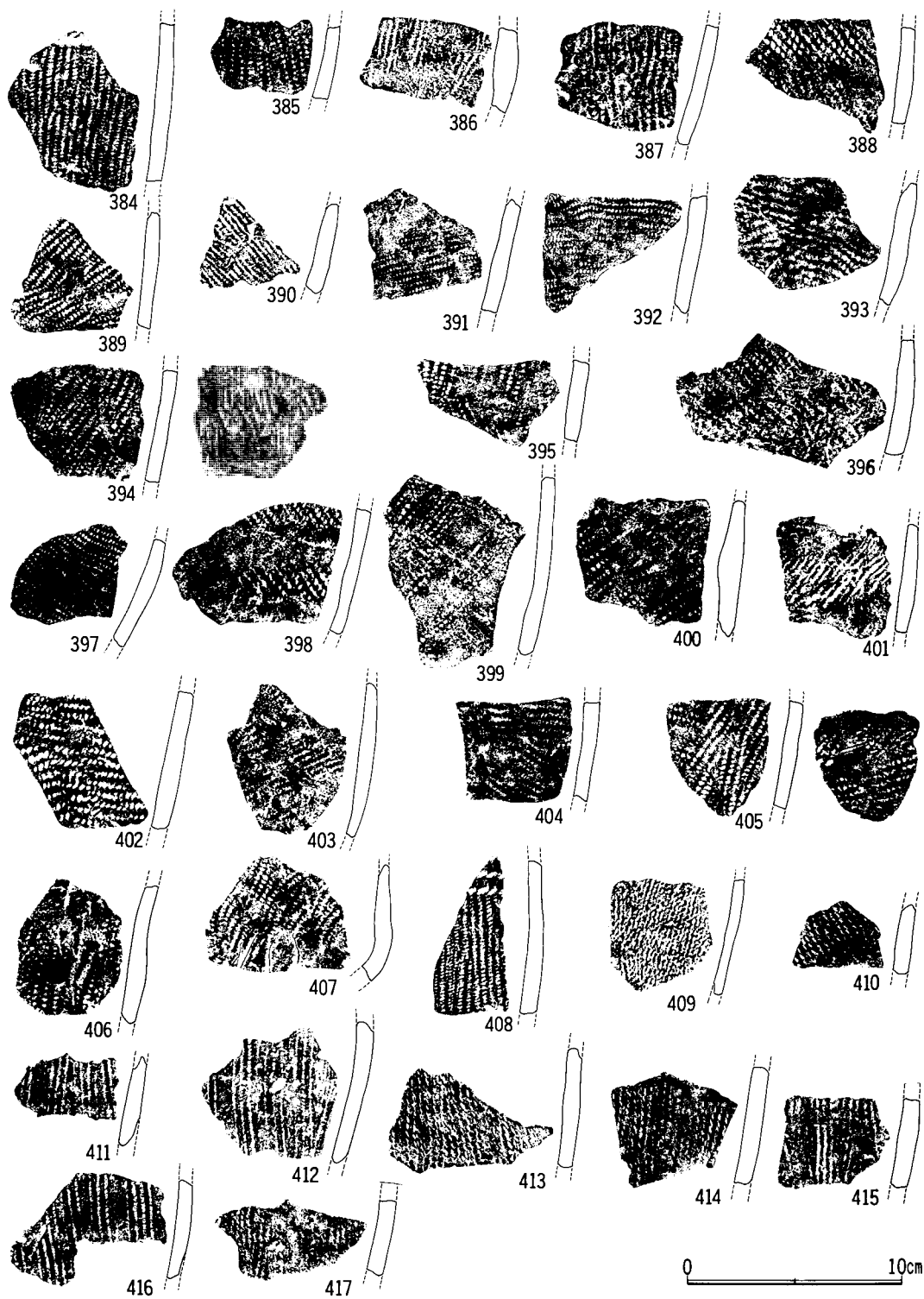
第 23 图 发掘区出土土器拓影图(9)



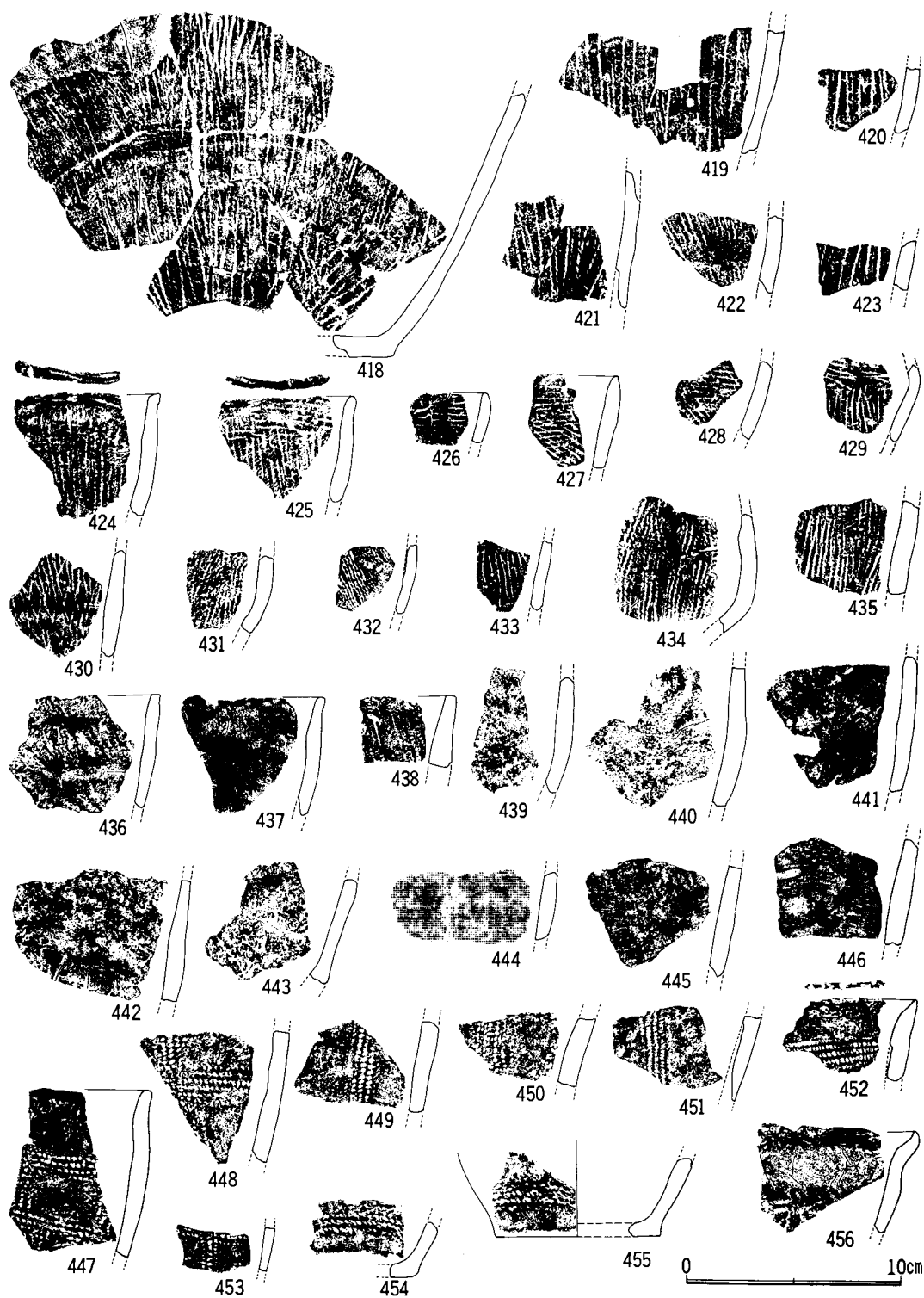
第 24 图 尧掘区出土土器拓影图(10)



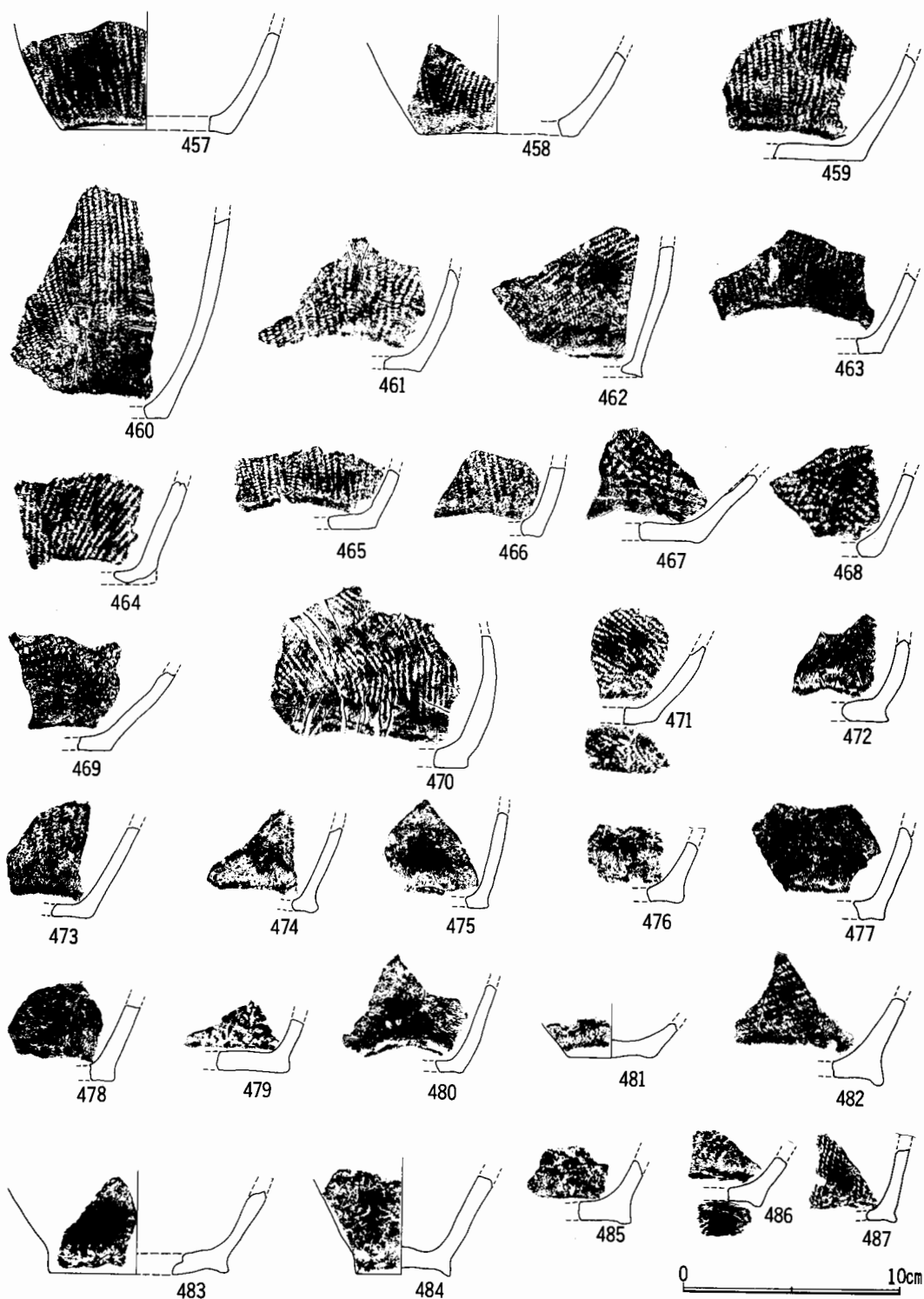
第 25 图 发掘区出土土器拓影图(11)



第 26 图 发掘区出土土器拓影图(12)



第 27 图 尧掘区出土土器拓影图(13)



第 28 图 发掘区出土土器拓影图(14)

第2節 石 器

石 鏃 (第29図1～25)

全例黒耀石製で大きく分けて有茎鏃、無茎鏃の2種類に分類できる。

有茎鏃(1～7)では尖頭部がやや狭長のもの(1)と、正三角形に近いもの(2～5)がある。後者は、縄文時代後期に最も多く見られる形態である。6は、1～5に比べて太い茎を持つもので、7は、破損品であろう。

8～25は無茎鏃である。8はやや大型で両面に入念な加工を行う。9～15は中型で両面加工を行っているもの。16～22は同じく中型の大きさであるがやや粗雑な作りのものである。23～25は極めて小型のものである。

石 銛(先) (第29図26)

1点のみ出土している。石銛先茎と思われるが、あるいはナイフ状石器のつまみの可能性もある。

石 錐 (第29図27, 28)

27, 28ともに基部を欠失し錐先の部分を残すのみである。

ナイフ状石器 (第29図, 29～41)

木葉形と称すべき形態のも(29～31)と、つまみ付の形態のもの(32～37)と、破損品(38～41)に分けることができる。

29は、大形の剝片の片面に入念な調整を加え、裏面は、その側縁にのみ調整を加えている。中心部近くに孔が見られるが、黒耀石中に含まれる気泡が脱落したものであろう。30, 31は、数少ない黒耀石以外の石器である。30は、両面の側縁に荒い調整を加え、31は、片面にやや入念な調整を加える。

つまみ付のナイフの完形品のうち32, 33をのぞく他のものは太いつまみを持つ形態のものである。32は、つまみ部と刃部の境にやや深いえぐり込みをつけ、刃部は片面のみを加工している。33は、つまみ部と刃部の境に浅いえぐりを入れ、刃部先端は正三角形に整形している。裏面の側縁にも調整が加えられる。

34～37は、太いつまみをつける形態のものである。34は、両面に入念な調整を行っている。35は、片面は全体的に加工するが、裏面は片側縁のみ加工している。36は、やや荒い調整を片面に加えたのみである。37は、両面に調整が行われる。38～40は、刃部のみ残存した欠損品である。38は入念な調整が加えられるが、一部に原石面を残している。39, 40は、片面の側縁にのみ調整が見られるものである。41は、つまみ部の破片であろう。

削器および使用痕のある剥片（第 30 図 42～51）

42 は、縦長剥片の片面の一部に調整を加え、43 は、その一側に使用痕の認められるものである。44 以下は、両面ないし片面にも剥離の加工が認められるが、いずれも破損品のため形態が明らかでない。

搔 器（第 30 図 52～56）

52, 53 は、小型の剥片の両面に調整を加え、その一端に刃部を作出している。54 は、大形剥片の原石面の残る面に背の高い刃部を作る。55 も一端に刃部が認められるが、その大部分は欠失していると思われる。56 は、いわゆる円形搔器である。

剥 片（第 30 図 57～59）

57 は、縦長剥片の断片であり、一側に使用痕状の小剥離が認められる。58 は、片面に小型の縦長剥片を幾度か剥ぎ取った痕跡が認められる。59 は、荒い剥離の加えられた石材で、石斧の未成品かとも思われる。

石 斧（第 30 図 60～64, 第 31 図 65）

60 は、発掘地点に一般的に見られる自然石を研磨し刃部を作出している。実用品と考えるには、石質がもろく、しかもその選定が安易である。61 は、小型品で基部を欠失している。両面を入念に研磨している。62 も基部を欠失している。両面ともに一時調整面を大きく残し、片刃の刃部を作出する研磨を行っている。63 は、三角形を呈する片刃の石斧である。ところどころに一次調整痕が残っている。64 は、大型の石斧であるが、基部のみであり、しかも半分に剥離している。65 は、片面は敲打を加える調整を行い、その反対の面は荒割の調整を行い、両側は原石面のままとっている。この形状から考え石斧の未成品としてよいであろう。

擦 石（第 31 図 66）

断面三角形を呈する自然石の一側に擦面が見られる。石質のせいもあるが、擦面はそれ程滑らかでない。

たたき石（第 31 図 68, 69, 第 32 図 71～73）

棒状礫を使用するものと円礫を使用するものがある。

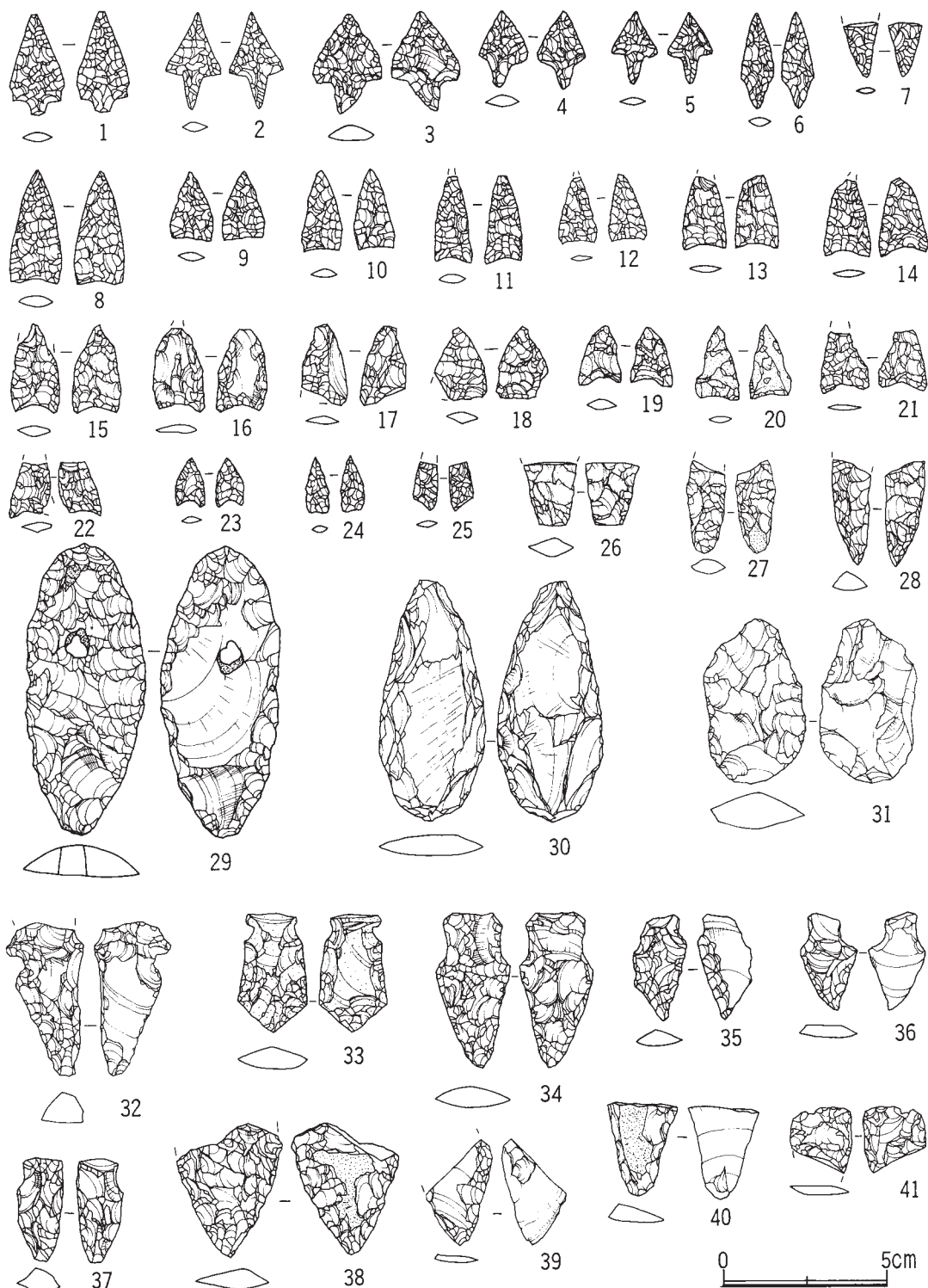
68 は、細長い礫を使用したもので、図示する下端が加熱を受けた痕があり、ところどころ加熱による剥離も見られる。一部に小さな敲打を加えられるとともに、長軸の一端には大きく力を加えてた剥離が認められる。69 は、やや細長い原石の一部である。残存する部分には、特に使用痕が認められない。71 は、片面の 2 カ所に集中して敲打痕が認められ、長軸一端にも大きく力を加えた敲打痕がある。半分以上を欠失している。72 はやや扁平な円礫を使用している。片面のほぼ中央部に敲

打痕があり、一側に剥離が見られる。全体にススが付着している。73 は、棒状原石の長軸の一端にわずかに敲打痕がある。

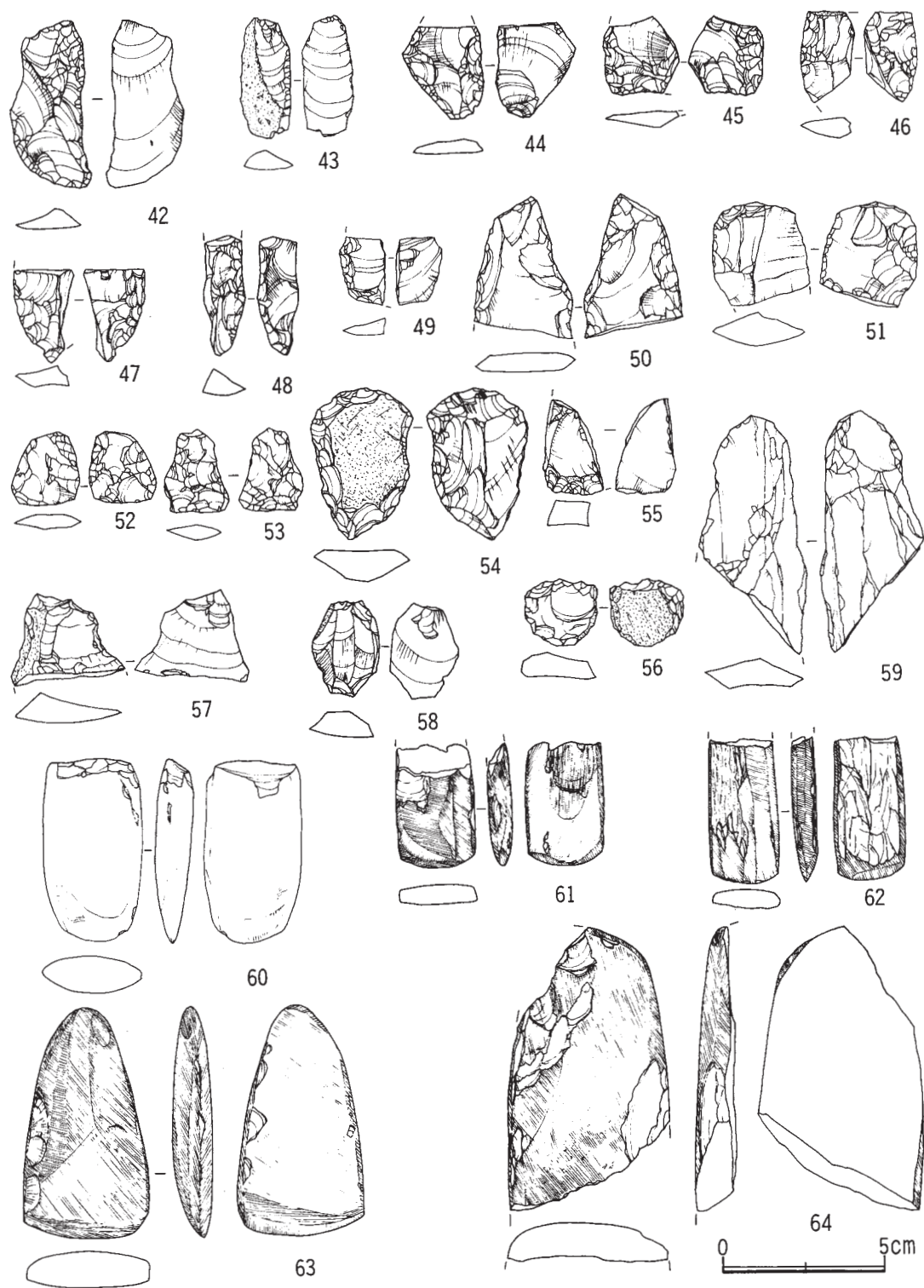
台石、石皿（第 32 図 70, 74）

74 は、たたき石というより台石として使用したものであろう。断面三角形の長さのある大型石で、途中から折れている。山形の面は、敲打痕が認められる。全体的に熱を受けており、加熱による剥離が見られる。

74 は、石皿である。両側縁は敲打により整形を加える。長軸辺は強い力を加え打ち欠いて調整を行っている。擦面は、かなり使用しており他の面に比べ滑らかになっている。



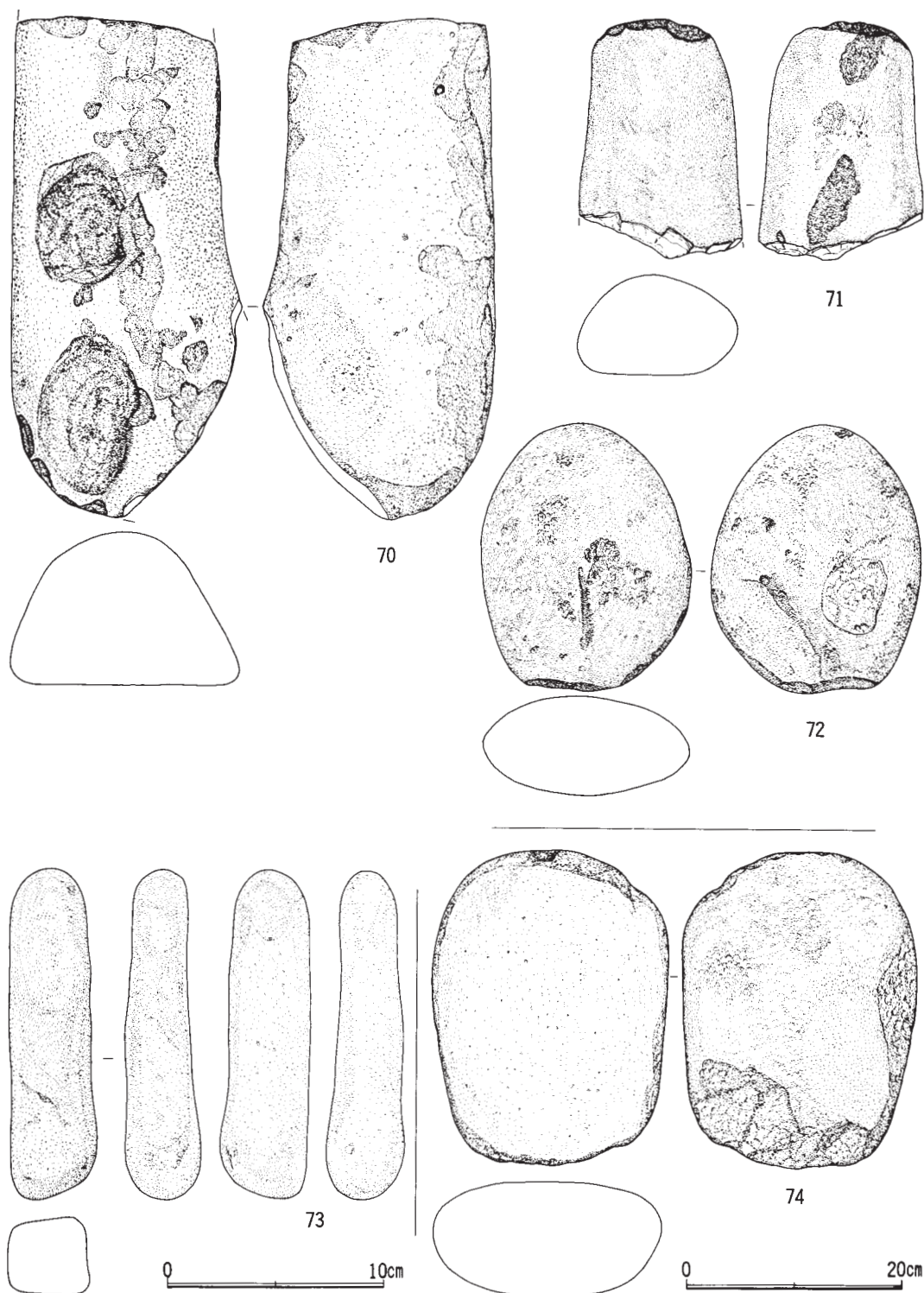
第 29 图 发掘区出土石器实测图(1)



第 30 图 尧掘区出土石器实测图(2)



第 31 图 发掘区出土石器实测图(3)



第 32 图 发掘区出土石器实测图(4)

第6章 ま と め

平成2年から3カ年にわたってあやめ野中学校「遺跡の森」で実施した体験発掘調査の結果、27個の土壌を発見した。この種の土壌は、昭和56年度、昭和62年度の発掘調査で総計92個を発見され、その構築時期は縄文時代晩期終末から続縄文時代初頭と考えられている。

今回の発掘調査で発見した27個についても、その構築時期を確定するに足りる発見は、全く得られなかった。しかし、今回発見の土壌群で、掘り込み面から確認のできるピットでは、すべて第Ⅳ層あるいは第Ⅳ'層の赤褐色火山灰を切って構築していた。この火山灰の上層からは縄文時代晩期終末以後の土器が出土するが、そのなかでも晩期終末から続縄文時代初頭の土器の出土量が最も多い。以上の事実と前2回の発掘調査でもこの種のピットの構築時期が晩期終末から続縄文時代初頭に位置すると考えられることなどを併せると、今回のピットの構築年代もこの時期に帰属させることが最も妥当と思われる。

このピット群の性格に関して明らかにし得る確証は、今回の調査でも全く発見できなかった。前2回の発掘の結果では、市内の他の遺跡の発掘などから土壌墓と考えている。ここでも一応土壌墓の可能性が最も大きいとしておきたい。ただ、千歳市ママチ遺跡の該種ピットの土壌の分析結果では、サケなどの脂肪酸が検出され、魚類（サケ等）の貯蔵施設ではないかとの問題も提起されている。

今回の発掘調査で発見した土器は、縄文時代早期、中期、後期、晩期、続縄文時代の各時期にわたっている。そのなかでも晩期終末から続縄文時代初頭と考えられる土器の量が最も多い。昭和56年度の調査では早期の土器1点のほかは、中期と晩期及び続縄文時代初頭の土器が中心である。昭和62年の調査は、最も調査面積が広いこともあって多くの土器が発見されている。早期の土器数十点と中期、後期、晩期、続縄文時代と各時期にわたる土器が見られる。そのなかでも後期初頭から中葉、晩期終末から続縄文時代初頭の土器が最も多い。

今回の発掘調査は、再三述べるように発掘面積が極めて狭いために、それ程多くの発見はなかった。しかし、体験発掘に参加した生徒達は、土中から発見される小さな石にも目の色を変えて興奮し、黒耀石や縄文の見られる土器片などを発見すると、まさに喚声をあげ、石鏃、石斧などの発見では参加者全員に自慢して歩く喜びようであった。日常的な業務として毎年数千m²もの遺跡を時間と予算に追われて発掘し、発見による喜びを忘れてしまった我々にとっては、まさに発掘の原点に立ち返らせてくれる刺激となった。その意味では、今回の体験発掘では参加したあやめ野中学校生徒や近隣の小学生、父母、先生方有志の皆さんにとっても多く学ぶところがあったと思われるが、我々もまた大いに得るところがあり、大変有意義な調査であったといえる。

第1表 ピット一覧表

ピット 番 号	挿 図 番 号	図 版 番 号	規 模 長径×短径×深さ(cm)	出土遺物			磔	備 考
				土 器	石 器	その他		
1	8	6 A	192 × 103 × 41	2	擦石 1		3	平成 2 年
2	9	6 B	82 × 71 × 14	18			2	〃
3	9	7 A	101 × 87 × 26				11	〃
4	9	7 B	98 × 87 × 26	3			3	〃
5	10	8 A	(110) × (102) × 28				6	〃
6	10	8 B	72 × 70 × 19				3	〃
7	10	9 A	111 × 92 × 24				11	〃
8	10	9 B	75 × 73 × 25				6	〃
9	11	10 A	116 × 94 × 41	5			2	〃
10	12	10 B	112 × 84 × 40	10			7	〃
11	11	11 A	119 × 103 × 32	4	敲石 1		1	〃
12	12		65 × 50 × 42	1			3	〃
13	12	11 B	99 × 95 × 32				9	〃
14	12	12 A	89 × 89 × 26				9	〃
15	13	12 B	73 × 66 × 15					平成 3 年
16	13	13 A	63 × 58 × 17	1				平成 4 年
17	13	13 B	66 × 64 × 18					〃
18	13	14 A	97 × 71 × 10					〃
19	13	14 B	67 × 56 × 18				5	〃
20	13	15 A	53 × 49 × 12				4	〃
21	13	15 B	78 × 69 × 14				2	〃
22	14	16 A	69 × 56 × 13				1	〃
23	14	16 B	63 × 62 × 11				1	〃
24	14	17 A	87 × 84 × 29				3	〃
25	14	17 B	73 × 66 × 14					〃
26	14	18 A	73 × 55 × 6	2				〃
27	14	18 B	69 × (46) × 17					〃

第2表 石器計測値一覧表

挿 図 番 号	器 種 名	規 格 (cm)			重量(g)	石 質	備 考
		長 さ	幅	厚 さ			
1	石 鏃	(3.08)	(1.70)	(0.40)	(1.4)	黒耀石	基部先端,かえし両端欠損
2	〃	3.00	1.68	0.37	0.9	〃	
3	〃	3.07	2.09	0.62	2.4	〃	
4	〃	2.40	1.49	0.64	1.2	〃	
5	〃	2.22	1.40	0.32	0.5	〃	
6	〃	2.93	0.96	0.38	0.7	〃	
7	〃	(1.67)	(1.01)	(0.31)	(0.3)	〃	基部のみ
8	〃	3.46	1.55	0.48	(2.0)	〃	
9	〃	2.06	1.30	0.35	0.8	〃	
10	〃	2.42	1.21	0.33	0.8	〃	
11	〃	(2.58)	1.15	0.41	(1.0)	〃	先端欠損
12	〃	(2.04)	1.24	0.30	(0.5)	〃	〃
13	〃	(2.23)	1.22	0.25	(0.8)	〃	〃
14	〃	(2.35)	1.43	0.27	(0.8)	〃	〃
15	〃	(2.76)	1.50	0.40	(1.4)	〃	〃
16	〃	(2.53)	1.56	0.37	(1.2)	〃	〃
17	〃	(2.50)	(1.40)	0.38	(0.9)	〃	かえし一部欠損
18	〃	2.20	(1.50)	0.42	(1.2)	〃	〃
19	〃	1.87	1.29	0.38	0.7	〃	加 熱
20	〃	2.22	1.30	0.49	0.6	〃	〃
21	〃	(1.86)	1.49	0.28	(0.6)	〃	先端欠損
22	〃	(1.78)	1.11	0.35	(0.5)	〃	先端,かえし一部欠損
23	〃	1.44	0.86	0.24	0.3	〃	
24	〃	1.70	0.71	0.27	0.3	〃	
25	〃	(1.76)	0.62	0.32	(0.3)	〃	先端,かえし一部欠損
26	石 鋸 先	(1.99)	1.68	0.72	(2.2)	〃	石鋸先基部
27	石 錐	(2.83)	1.24	0.62	(1.8)	〃	一部欠損
28	〃	(3.23)	1.21	0.66	(2.3)	〃	一部欠損
29	ナイフ状石器	8.95	3.61	1.09	34.6	〃	
30	〃	7.40	3.18	0.74	23.0	泥 岩	
31	〃	5.03	3.00	1.19	17.9	硬質頁岩	
32	〃	(4.75)	2.32	0.96	(10.1)	黒耀石	柄部一部欠損
33	〃	3.64	2.09	0.73	5.2	〃	
34	〃	4.76	2.25	0.73	6.6	〃	
35	〃	3.25	1.13	0.50	2.2	〃	
36	〃	3.03	1.74	0.37	1.8	硬質頁岩	
37	〃	3.20	1.37	0.78	3.5	黒耀石	
38	〃	(4.05)	(3.24)	(0.85)	(8.0)	〃	欠損(刃部先端のみ)
39	〃	(3.33)	(1.71)	(0.46)	(2.0)	〃	欠損(〃)

挿 図 番 号	器 種 名	規 格 (cm)			重量(g)	石 質	備 考
		長 さ	幅	厚 さ			
40	ナイフ状石器	(2.86)	(2.13)	(0.59)	(3.0)	黒耀石	欠損(刃部先端のみ)
41	〃	(1.93)	(1.90)	(0.49)	(1.5)	〃	欠損(柄部のみ)
42	刮器または使用痕のある剥片	5.14	2.21	0.65	5.9	〃	
43	〃	3.80	1.63	0.59	3.9	〃	
44	〃	(2.90)	(2.40)	(0.46)	(3.2)	〃	ナイフ状石器の刃部の一部か
45	〃	(2.40)	(2.21)	(0.49)	(2.7)	〃	〃
46	〃	(2.89)	(1.64)	(0.69)	(3.4)	〃	〃
47	〃	(2.91)	(1.82)	(0.65)	(3.1)	〃	〃
48	〃	(3.69)	(1.16)	(0.80)	(3.0)	〃	〃
49	〃	(1.95)	(1.42)	(0.49)	(1.9)	〃	〃
50	〃	(4.14)	(3.15)	0.66	(9.8)	硬質頁岩	
51	〃	(3.13)	(2.92)	0.90	(9.8)	〃	ナイフ状石器の柄部か
52	搔 器	2.14	2.09	0.50	2.3	黒耀石	
53	〃	2.56	1.86	0.56	2.3	〃	
54	〃	4.67	3.11	1.18	15.9	〃	
55	〃	(2.99)	(1.67)	(0.93)	(5.0)	〃	
56	〃	2.03	2.25	0.80	4.1	〃	円 形
57	剥 片	(2.70)	(3.53)	(1.07)	(6.5)	〃	
58	〃	3.02	2.00	0.69	4.6	〃	
59	〃	(7.30)	(3.42)	0.90	19.5	泥 岩	
60	石 斧	5.80	3.10	1.17	29.1	細粒砂岩	
61	〃	(3.79)	(2.48)	(0.70)	(11.1)	片 岩	欠損
62	〃	(4.46)	(2.13)	(0.72)	(11.1)	〃	〃
63	〃	7.16	3.99	1.19	51.9	泥 岩	
64	〃	(8.78)	(5.15)	(1.18)	(73.1)	〃	
65	〃	12.69	4.17	3.62	344.5	〃	
66	擦 名	18.15	8.10	5.40	1,135	安山岩	
67		18.10	13.55	105.50	4,600	〃	pit 13 出土一部にスス付着
68	敲 石	21.70	4.70	2.74	405	〃	
69	〃	(7.58)	(7.19)	(5.47)	(335)	〃	欠損
70	〃	(23.15)	(10.70)	(7.15)	(2,600)	〃	〃
71	〃	(10.94)	(7.40)	4.67	475	〃	〃
72	〃	12.20	9.55	4.71	470	溶結凝灰岩	
73	〃	15.20	3.86	3.62	415	安山岩	
74	石 皿	28.85	20.99	10.75	10,600	〃	
pit 1	擦 石	18.75	7.19	6.88	1,115	泥 岩	
pit 11	敲 石	9.38	7.81	7.50	741	安山岩	

図版 1



遺跡付近空中写真



A 遺跡遠影



B 遺跡遠影



A 遺跡遠影



B 遺跡遠影



A 遺跡遠影



B 発掘着手時



A 発掘状況



B 発掘状況



A 第1号ピット



B 第2号ピット



A 第3号ピット



B 第4号ピット



A 第5号ピット



B 第6号ピット



A 第7号ピット



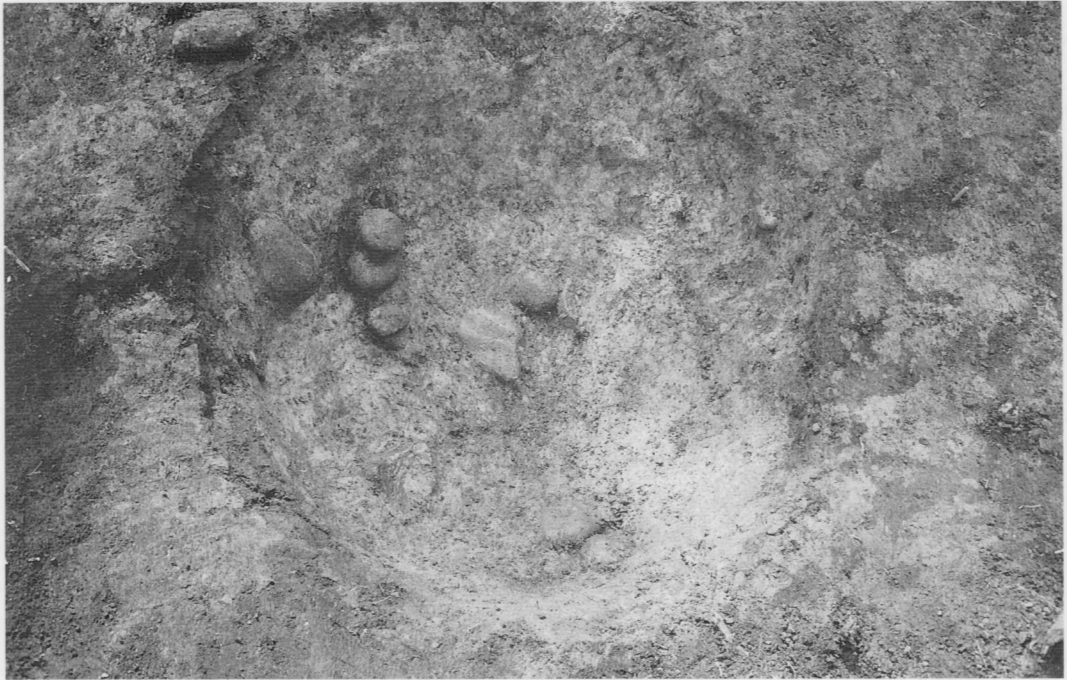
B 第8号ピット



A 第9号ピット



B 第10号ピット



A 第 11 号ピット



B 第 13 号ピット



A 第14号ピット



B 第15号ピット



A 第16号ピット



B 第17号ピット



A 第18号ピット



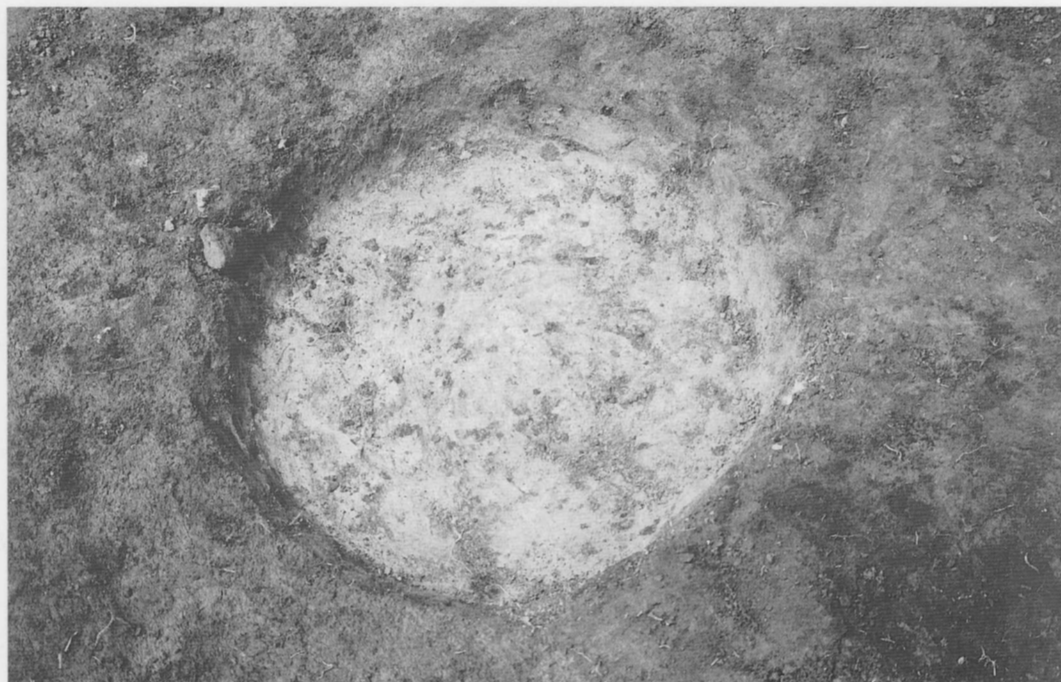
B 第19号ピット



A 第20号ピット



B 第21号ピット



A 第22号ピット



B 第23号ピット



A 第24号ピット



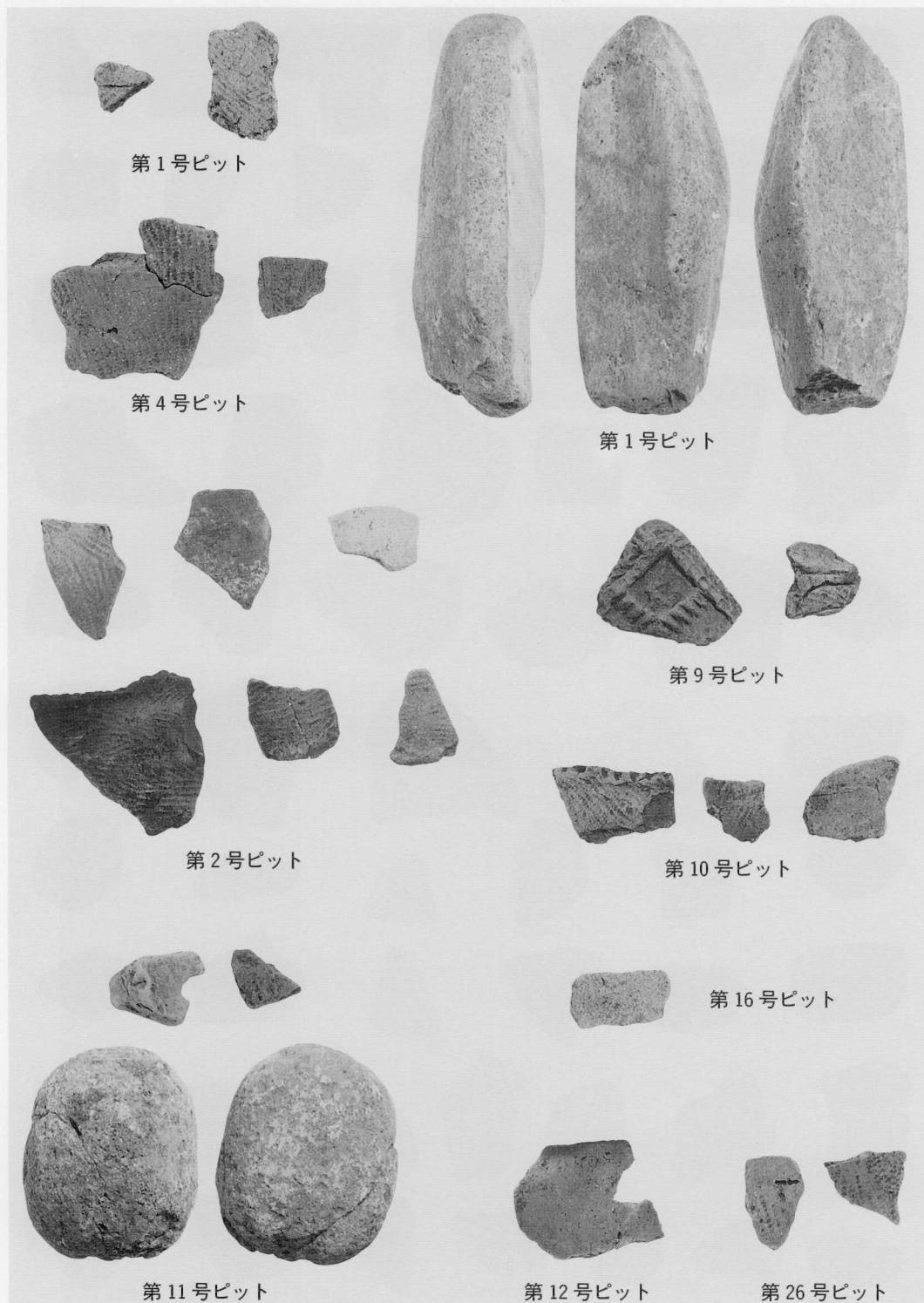
B 第25号ピット



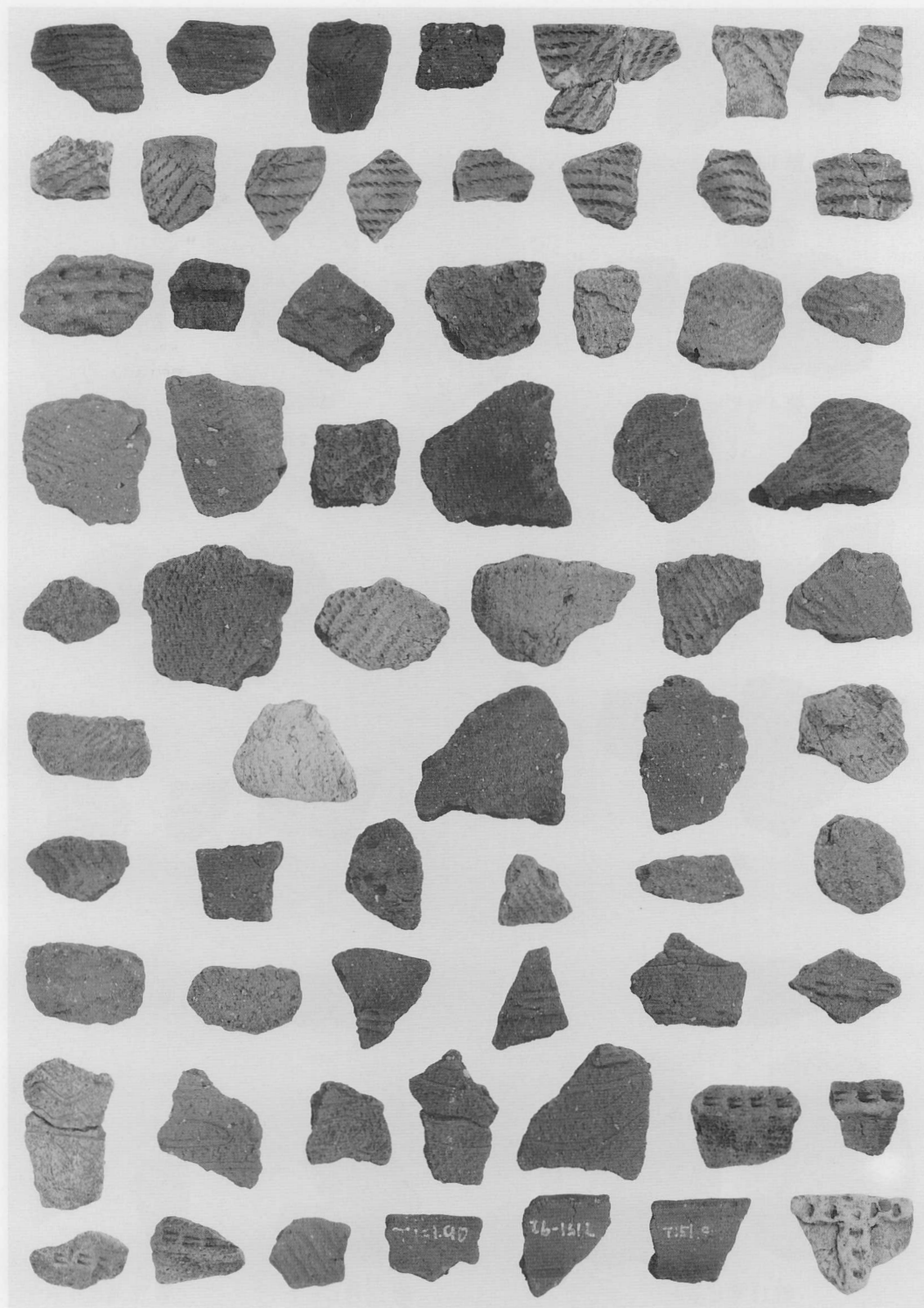
A 第26号ピット



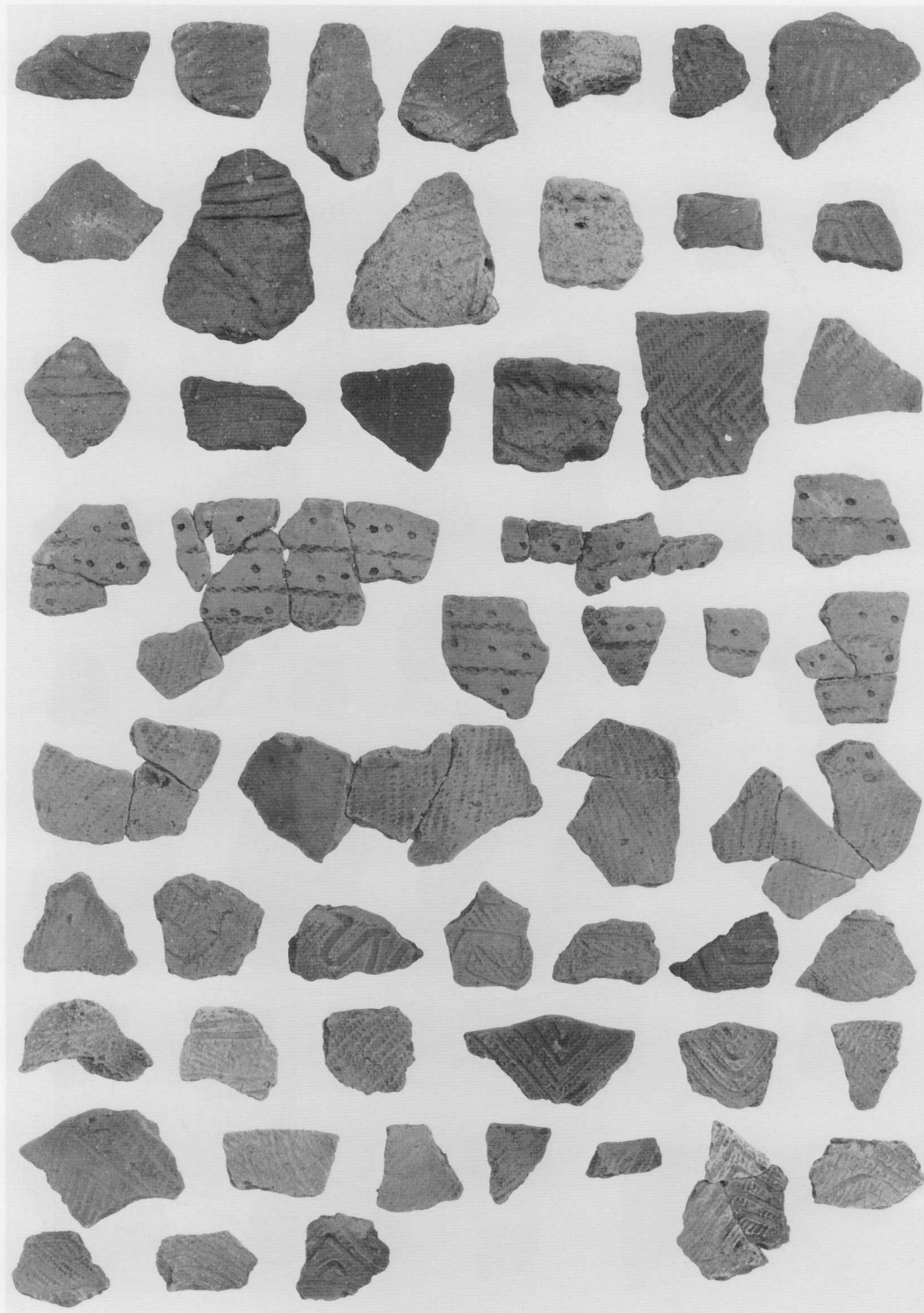
B 第27号ピット



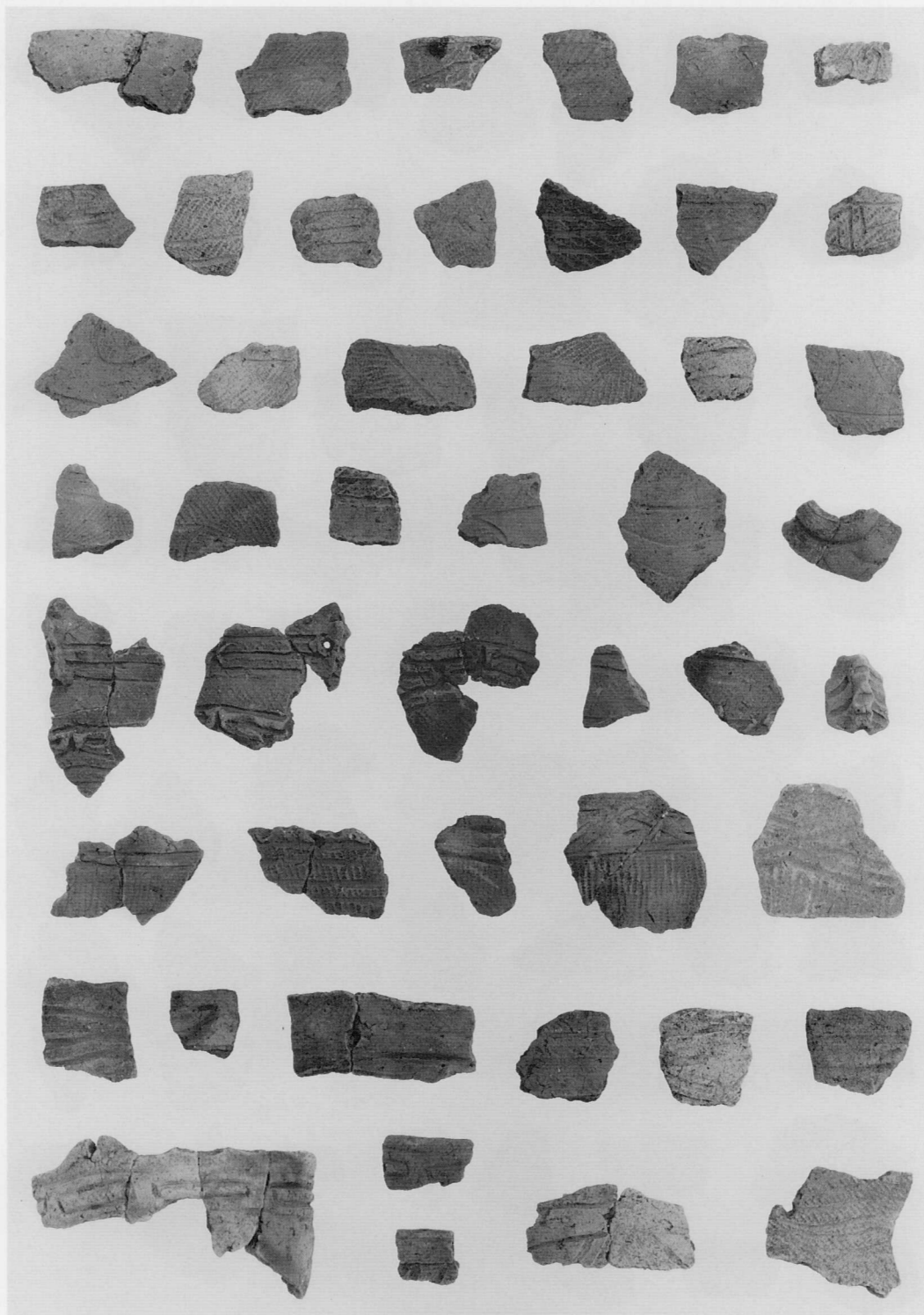
遺構出土遺物（約1/3）



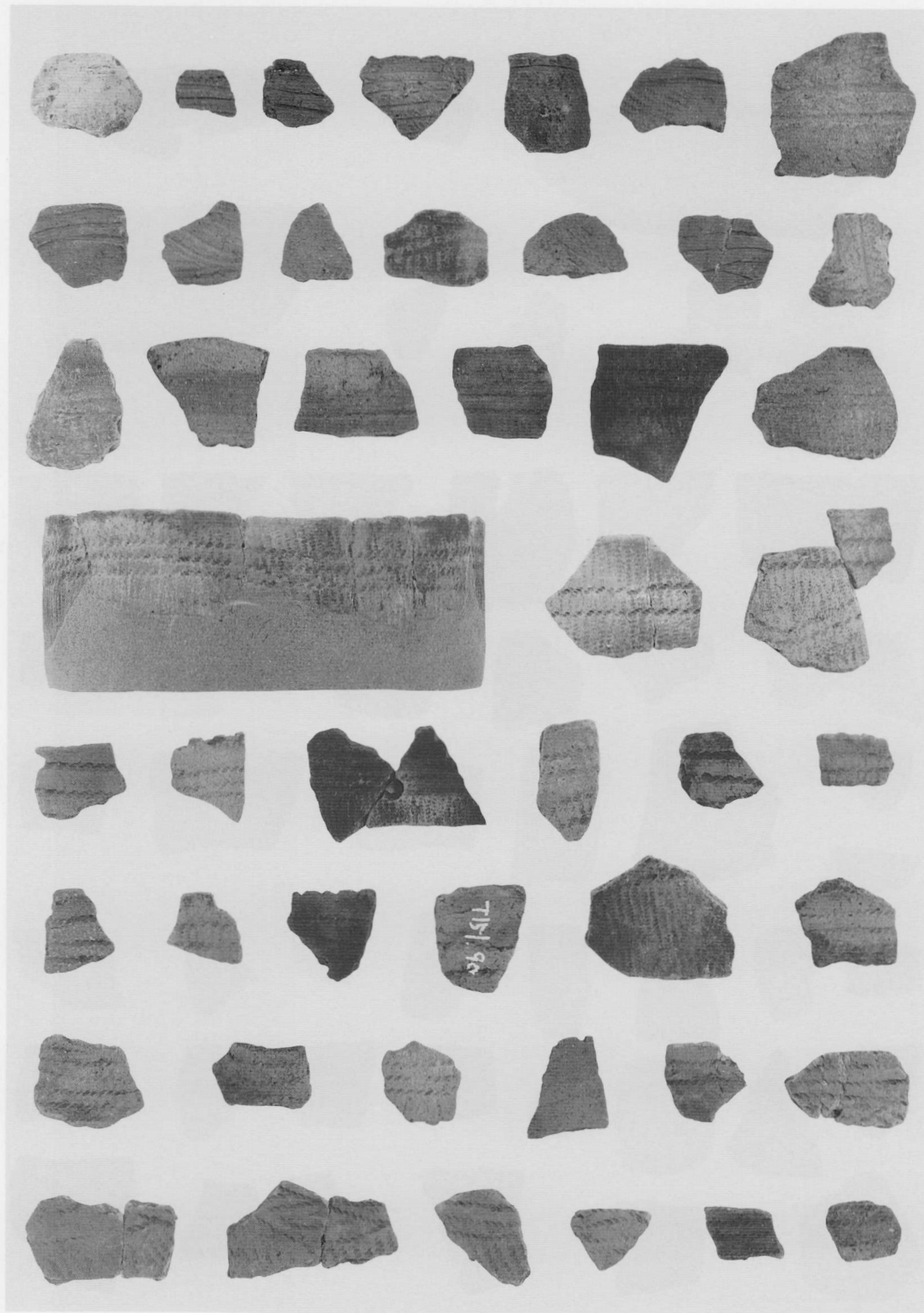
発掘区出土土器(1) (約 1/3)



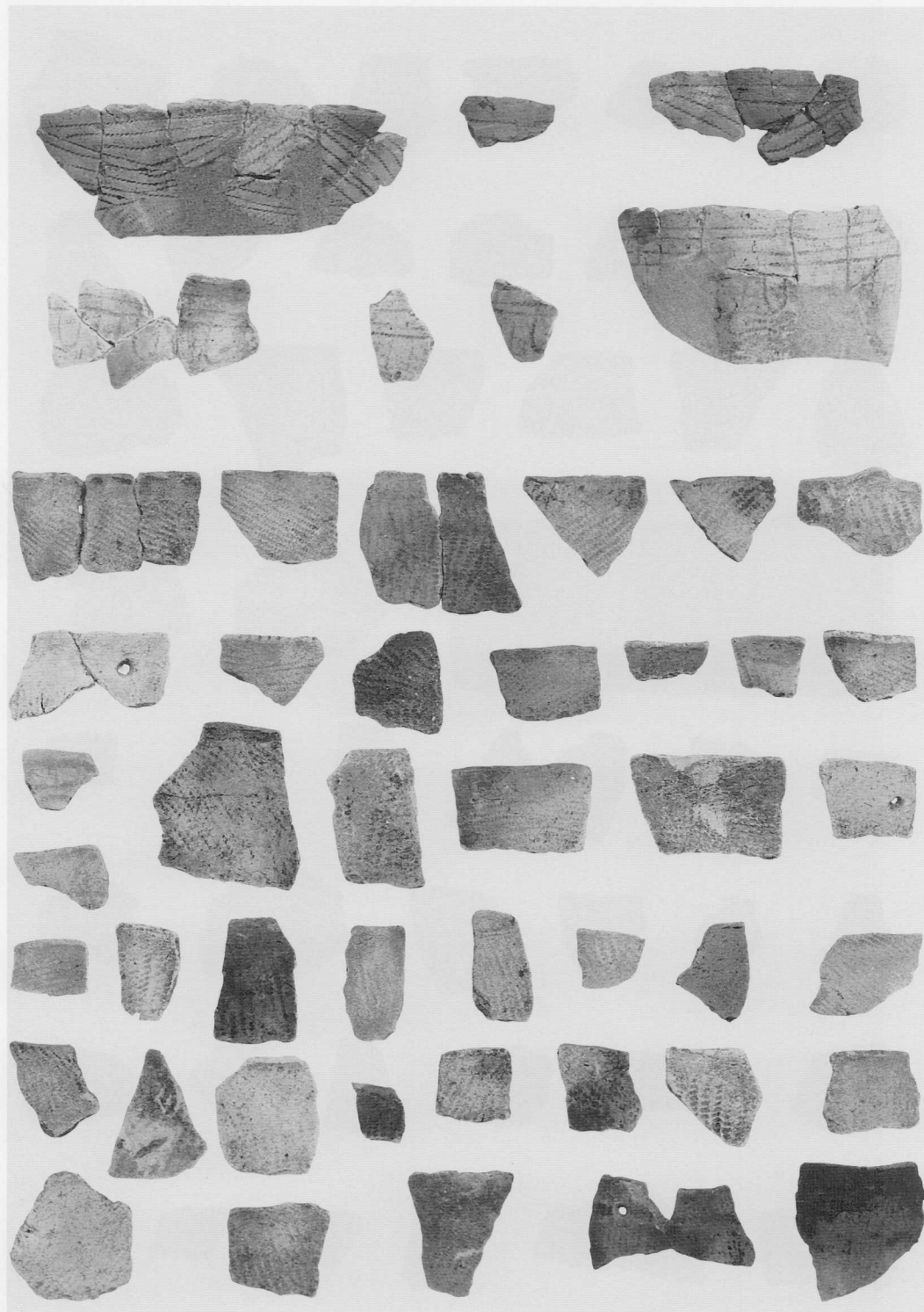
発掘区出土土器(2) (約 1 / 3)



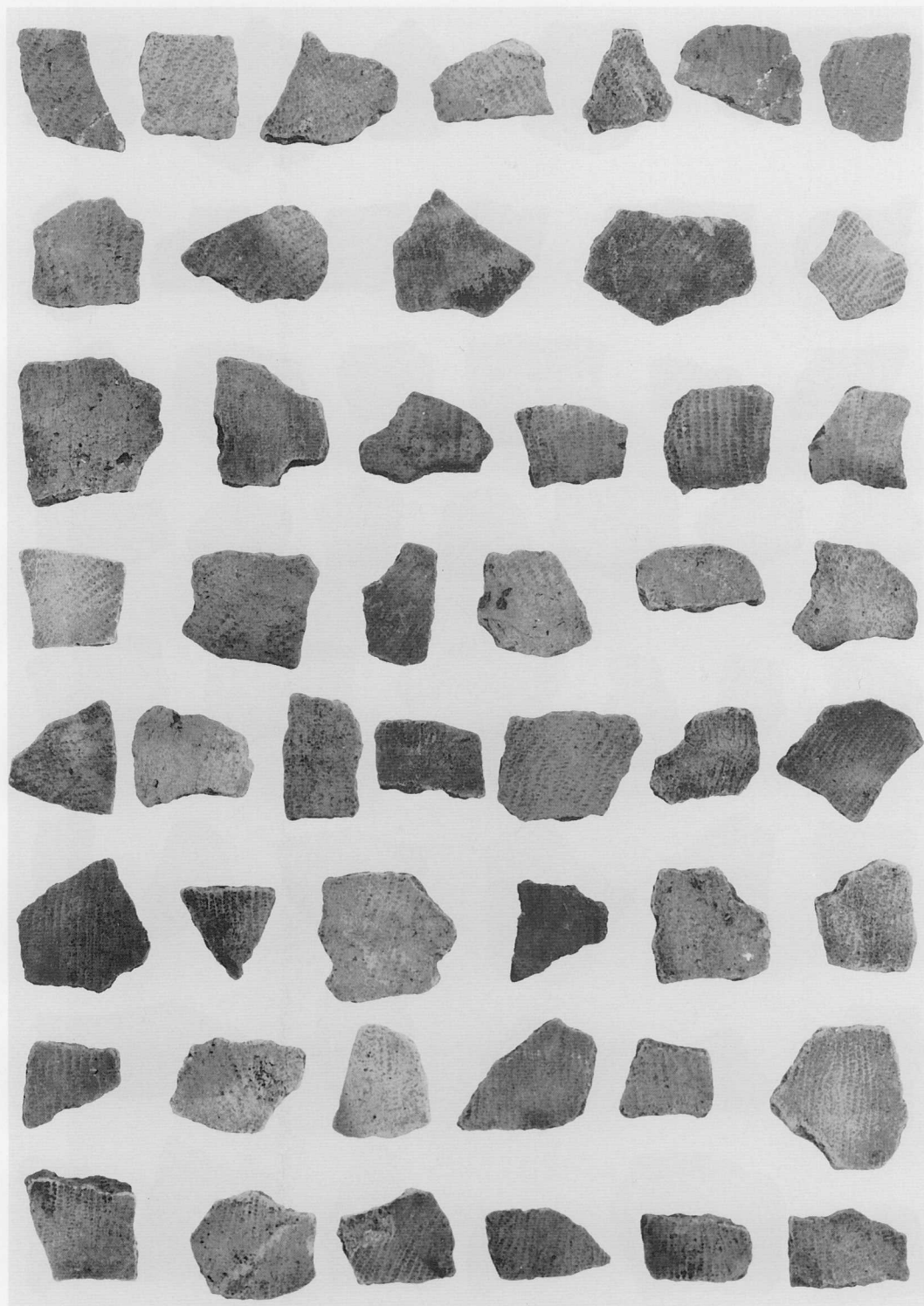
発掘区出土土器(3) (約 1/3)



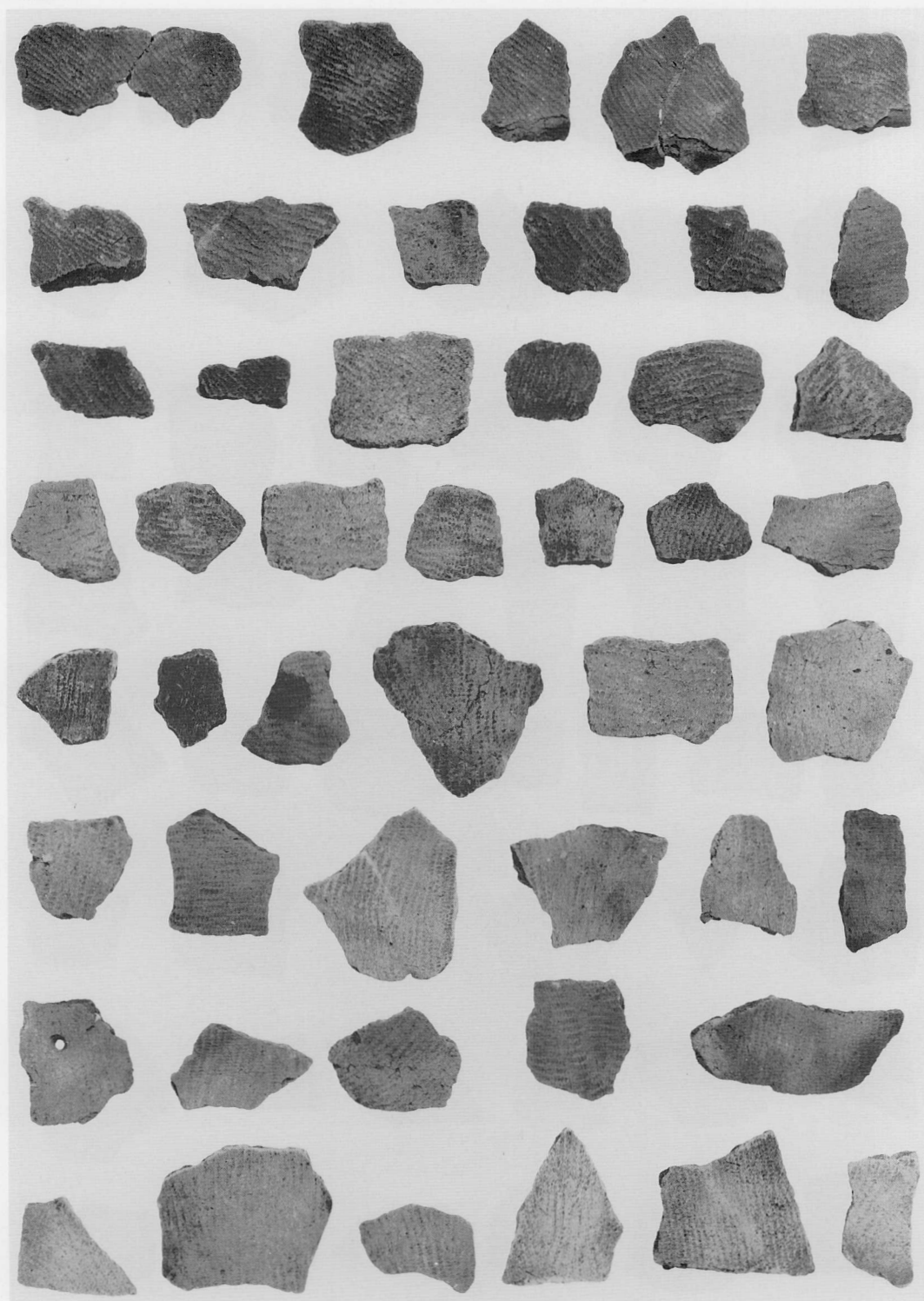
発掘区出土土器(4) (約 1 / 3)



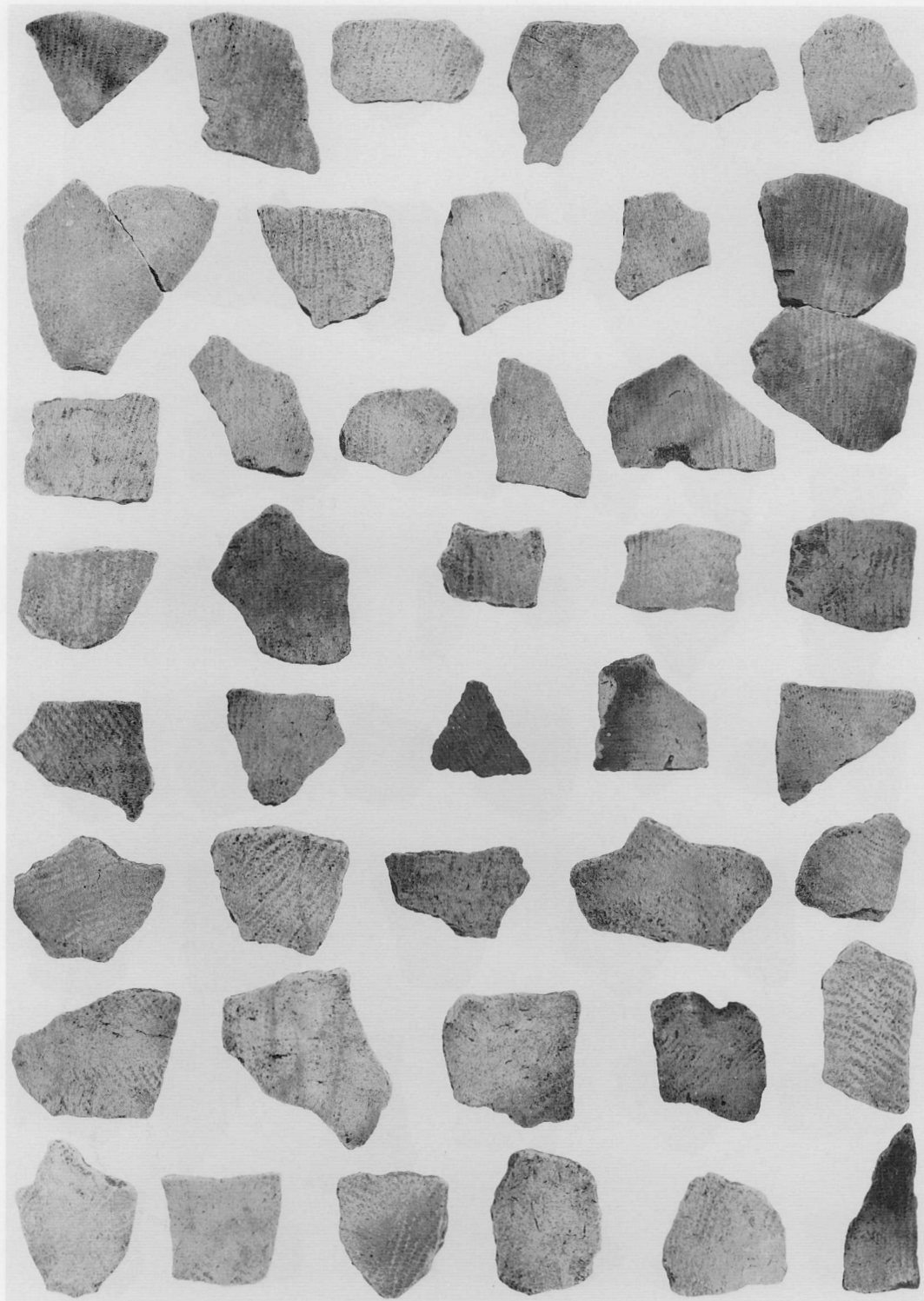
発掘区出土土器(5) (約 1 / 3)



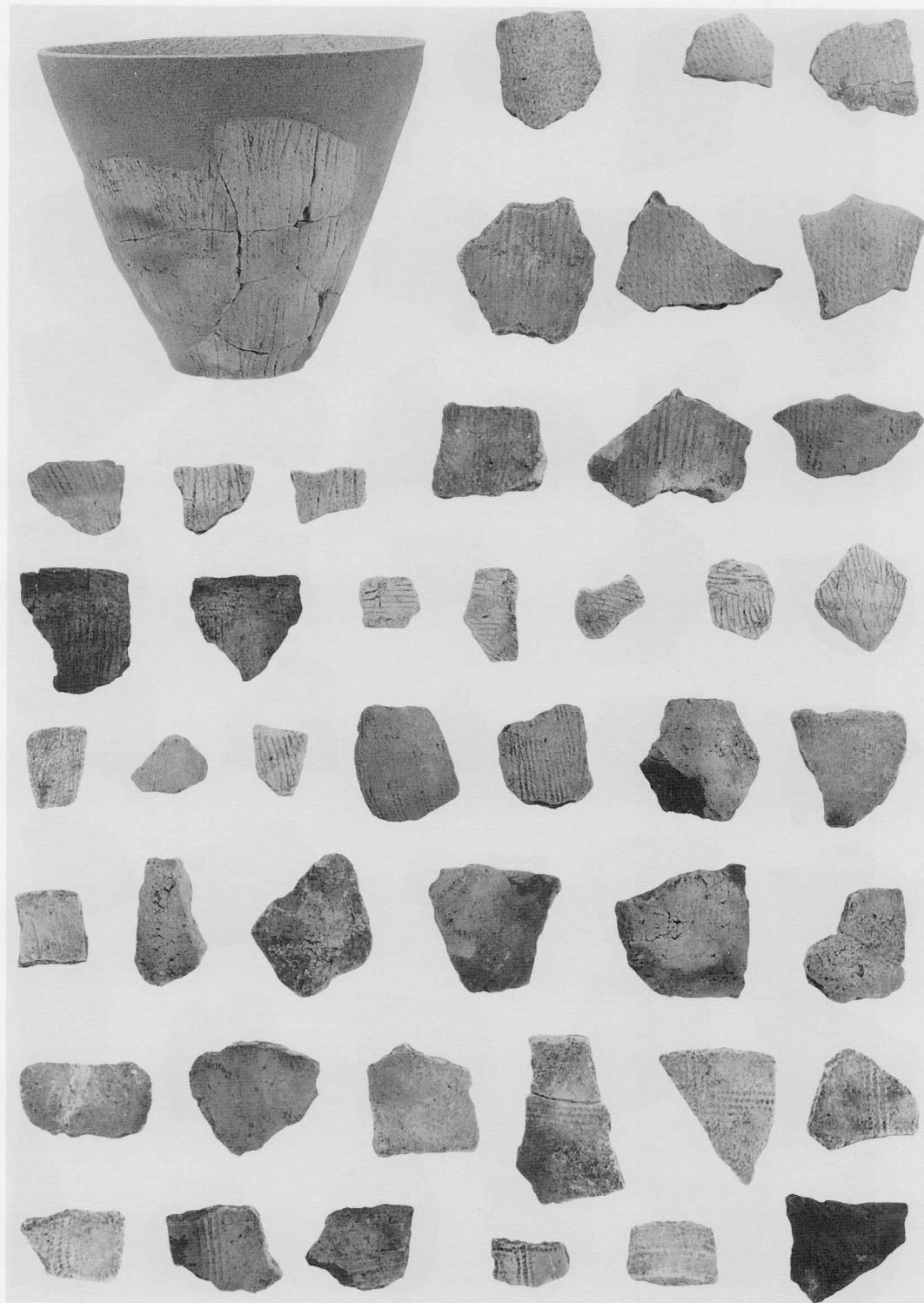
発掘区出土土器(6) (約 1/3)



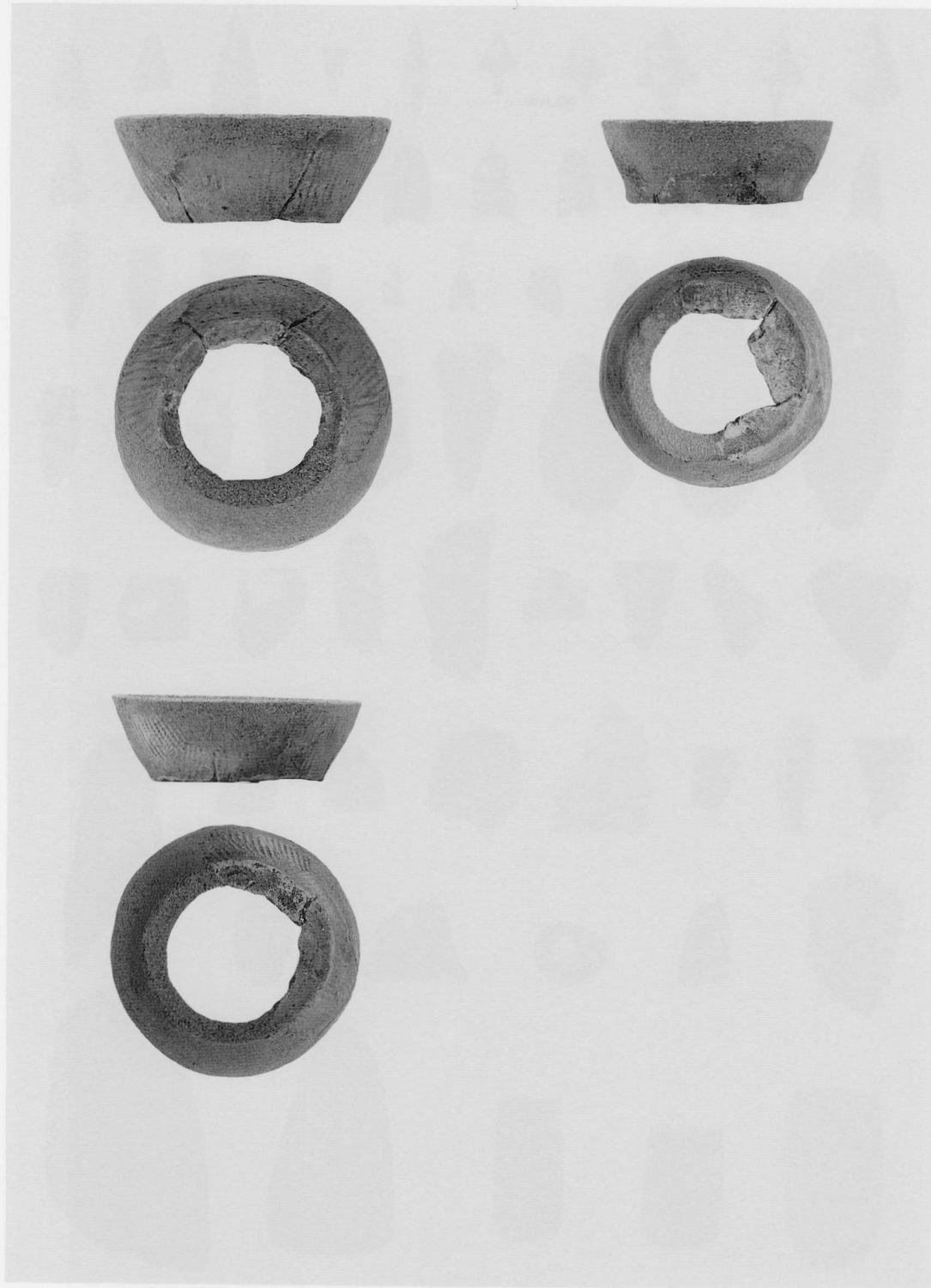
発掘区出土土器(7) (約 1/3)



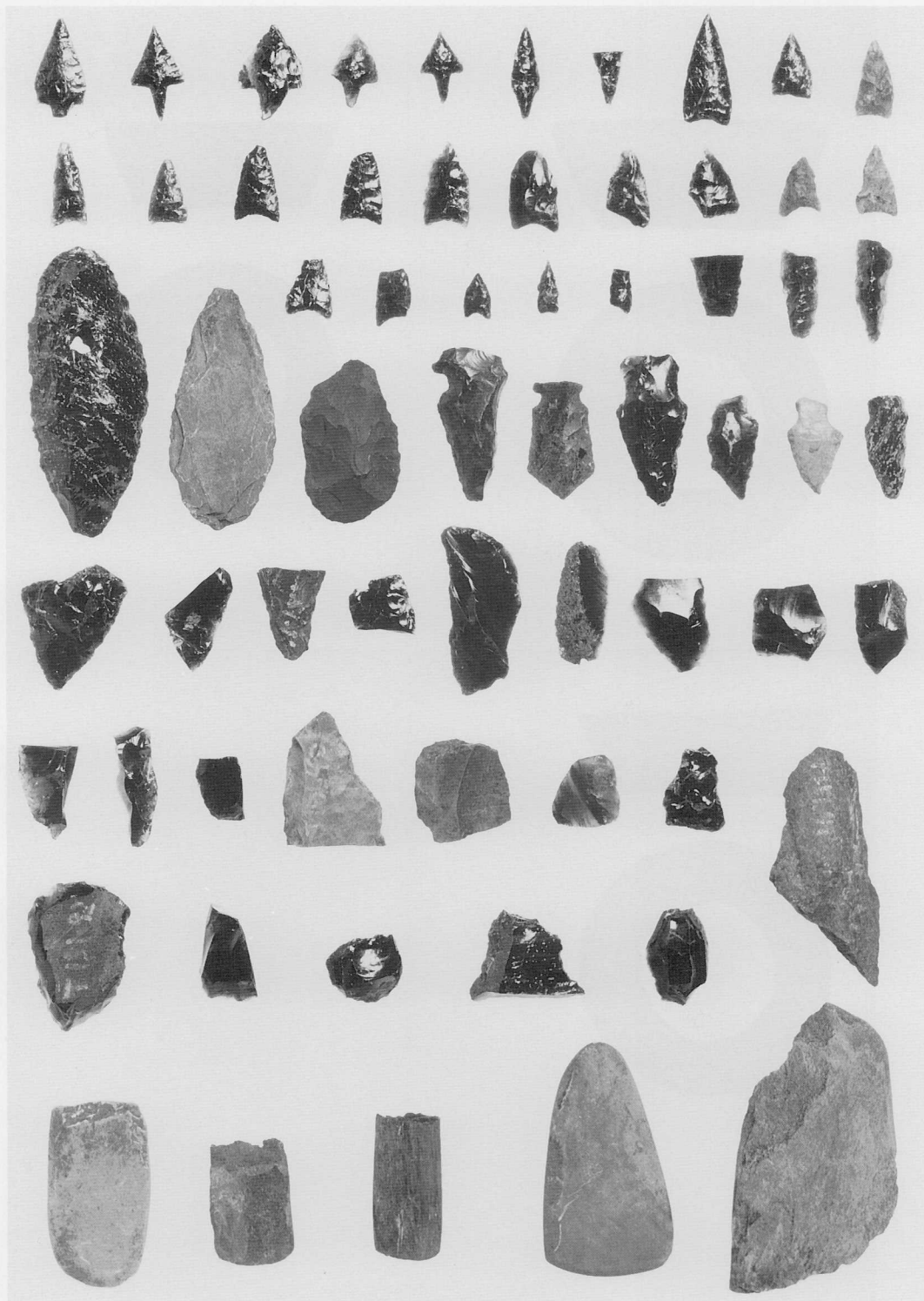
発掘区出土土器(8) (約 1/3)



発掘区出土土器(9) (約 1/3)



底部穿孔土器（約 1 / 3）



発掘区出土石器(1) (約 1/2)



発掘区出土石器(2) (約 1/3)



発掘区出土石器(3) (約 1 / 3)

付篇 遺跡発掘体験学習の記録

体験学習の日程

- 1 平成 2 (1990) 年度
6 月 4 日(月)～ 6 月 7 日(木)
- 2 平成 3 (1991) 年度
6 月 3 日(月)～ 6 月 7 日(金)
- 3 平成 4 (1992) 年度
6 月 8 日(月)～ 6 月 12 日(金)

遺跡編年表

おもなできごと	本州の時代区分		年代	北海道の時代区分	おもなできごと	市内のおもな遺跡																
日本に人が住みはじめる	先土器 Preceramic		50,000		北海道に人が住みはじめる 海峡ができる 細石刃文化	T 464 遺跡（豊平区羊ヶ丘） S 354（白石区本通）																
土器の使用がはじまる			20,000																			
縄文海進、温暖化 土器の形が多くなる 土器の装飾が発達する 生活圏の拡大 村が大きくなる 大きな貝塚が増える すり消縄文が広がる 土偶が多くなる 東北に亀ヶ岡土器 沖積地拡大、低地遺跡増加 稲作がはじまる 金属の使用 邪馬台国 大和朝廷の統一 仏教伝来 大化の改新 （阿部比羅夫 658 年） 奈良に都がおかれる 多賀城造営 京都に都がおかれる 板上田村麻呂 源頼朝鎌倉に幕府をひらく	縄文	早 期 前 期 中 期 後 期 晩 期	縄文	貝殻文土器 石刃鎌文化 縄目文様の土器が広がる 縄文海進、温暖化 紅葉山砂丘に人が住みはじめる 生活圏の拡大 すり消縄文土器が全道的に広がる ストーンサークル、集合基地がつくられる 扇状地に遺跡が広がる	S 267 遺跡（厚別区大谷地） T 210 遺跡（豊平区西岡） S 91、S 96 遺跡（白石区北郷・南郷） S 256 遺跡（厚別区上野幌） T 310 遺跡（豊平区平岸） N 309 遺跡（手稲区前田） S 94 遺跡（白石区本通） T 464 遺跡（豊平区羊ヶ丘） S 242 遺跡（厚別区厚別東） M 67 遺跡（南区石山） N 295 遺跡（手稲区前田） T 310 遺跡（豊平区平岸） N 1 遺跡（手稲区前田） T 361 遺跡（豊平区里塚） S 268 遺跡（厚別区大谷地） T 466 遺跡（豊平区羊ヶ丘） T 210 遺跡（豊平区西岡）																	
						6,000	Jomon	Jomon	後 期 晩 期													
						B.C.																
										A.D.												
											続縄文 Epi-Jomon	金属器の使用はじまる 恵山文化（道南） 後北文化（全道） 石器の種類が減少する 北海道系文化が南下する 北海道と本州との交流が多くなる 土器の縄目文様が多くなる	S 153 遺跡（厚別区厚別東） N 295 遺跡（手稲区前田） S 354 遺跡（白石区本通） K 135 遺跡（北区北 6 西 5） T 465 遺跡（豊平区羊ヶ丘） S 153 遺跡（厚別区厚別東） N 162 遺跡（西区二十四軒）									
														700								
															薩摩 Satsumon （オホソック Ohoosoku）	●本州系文物の大量移入 土師器、須恵器の移入 北海道式古墳 住居にカマドがつく 機械技術（紡錘車） 金属器の一般化 初歩的な農耕が行われる （アワ・ヒエ・豆・ソバ）	K 446 遺跡（北区麻生） K 460 伊勢（北区北 31 西 10） N 162 遺跡（西区二十四軒） K 441 遺跡（北区北 34 西 7） サカシュコトニ川遺跡（北区北 17 西 13） K 435 遺跡（北区北大第 2 農場跡） N 426 遺跡（西区二十四軒）					
																		アイヌ	土器の消滅、鉄鋼が一般化 内耳土器	T 71 遺跡（豊平区平岸） N 19 遺跡（西区発寒）		
																					Ainu	チヤシ
室町																						
		安土・桃山																				

遺跡発掘体験学習を終えて

「付篇 遺跡発掘体験学習の記録」
は、一部のみを公開しています。

感動を求めて

教諭 遠 藤 紘之助

平成2年から3年間にわたって行われてきた社会科の遺跡発掘体験学習も、平成4年で一応の区切りがつけました。この間、約550名（当時の各2年生）が、歴史学習の一環として体験学習をすることが出来ました。

社会科における体験学習は、5年度から実施される文部省の示す指導要領に重点的に取り上げられるようになっていますが、多くの学校では、その教材化に苦勞しているのが現状のようです。しかし、本校では、そうした指導要領を3年前から先取りした形で、カリキュラムに組み入れ、実施できたことは、生徒にとっても大きくプラスになっていました。

俗に現代っ子は、三無主義などと言われ、教室における一斉授業においても、そうした傾向を否定することが出来ない場面にくつも出会います。特に興味、関心においては、自分に直接さし迫るひっ迫感があるものでなければ、心を動かそうとしません。現に本校1階の歴史ゾーンに常設展示されている復元土器も、本校建設時に、発掘、復元されたものという意識がほとんどありません。しかし、発掘体験をすることにより、その意識が大きく変わってきます。「やっぱり本当だったんだ」「なるほど」「へえーすごいや」、生徒達の内なる叫びにも似た感動の言葉がほとばしり出て来ます。そして発掘中は、時間を忘れ、また天候も気にせず一心不乱に取り組むこれらの姿は、この体験学習がねらう「子供達の本物の姿」をそこに見い出すことが出来ます。ここで得られた体験そして感動は、生徒達の生涯にわたって忘れ得ぬものとして、心に残っていくでしょう。そして、これからも、この体験をもとに、感動を追い求め、学習していく生徒であってほしいと思います。

最後に、この3年間、親身になってご指導下さった埋蔵文化財センターの加藤係長、上野さん、そして職員の方々に厚く御礼を申し上げます。

生徒とともに流した汗

教諭 小 池 千 秋

あやめ野中の社会科教師として、3年間体験した「遺跡発掘学習」は、私自身も大きな思い出となった。

この学習は、オリエンテーションから始まるが、埋蔵文化財センターよりお借りしている様々な遺物を利用しながら、縄文期の様子等を説明していく。実際に、くっきり浮かぶ土器片の縄目文様や精密な作りの矢じりなどをみて、目を輝かす生徒。いよいよ発掘、雨の日や日ざしの強い日など

様々な条件の中で実に根気よく発掘作業を続ける生徒達の姿をみると、こちらにも熱が入り、汗が流れてくる。やがて、あちこちから歓声があがる。自分たちが生活しているこの土の下に、確かなにはるか昔の人々の生活を実感する生徒達。この瞬間は、私にとっても大きな喜びとなった。体験学習だからこそ、得ることのできた喜びであったと思う。

2時間という生徒に与えられた時間は、またたく間に過ぎていった。学習後の生徒達の満足感に充ちた表情は、いまでもはっきり思い浮かぶ。生徒達と流した汗は、私自身の教師生活でも、大きな思い出となるであろう。

最後に、元気な生徒達及び未熟な私達に、粘り強く御指導いただいた埋蔵文化財センターの方々
に心よりお礼を申し上げます。

遺跡発掘学習を終えて

教諭 成 田 昭 人

3年間にわたる遺跡の発掘学習に参加できたことは、私にとってとても幸運であったと感じています。

まず、自分自身が縄文時代の遺跡発掘を体験できたこと。自分自身、初めての体験であり、遺跡の発掘がどのように行われるのかが分かっただけでも、大変な勉強になっただけでなく、遺物を掘り出した喜びを味わえることができ、本当にいい経験になりました。

また、生徒に遺跡発掘を体験させ、学習に活かすことができ、生徒に生きた教材を与えることが、いかに大切であるかを改めて知ることになりました。2時間単位で1クラスの発掘学習を行いました
が、2時間の間に一喜一憂しながら、必死に掘り続けている生徒の姿を見ることができたし、さらにその体験を活かしての歴史の授業を行えたこの体験は、自分の教師経験の中で、大きなものとして残ると思います。

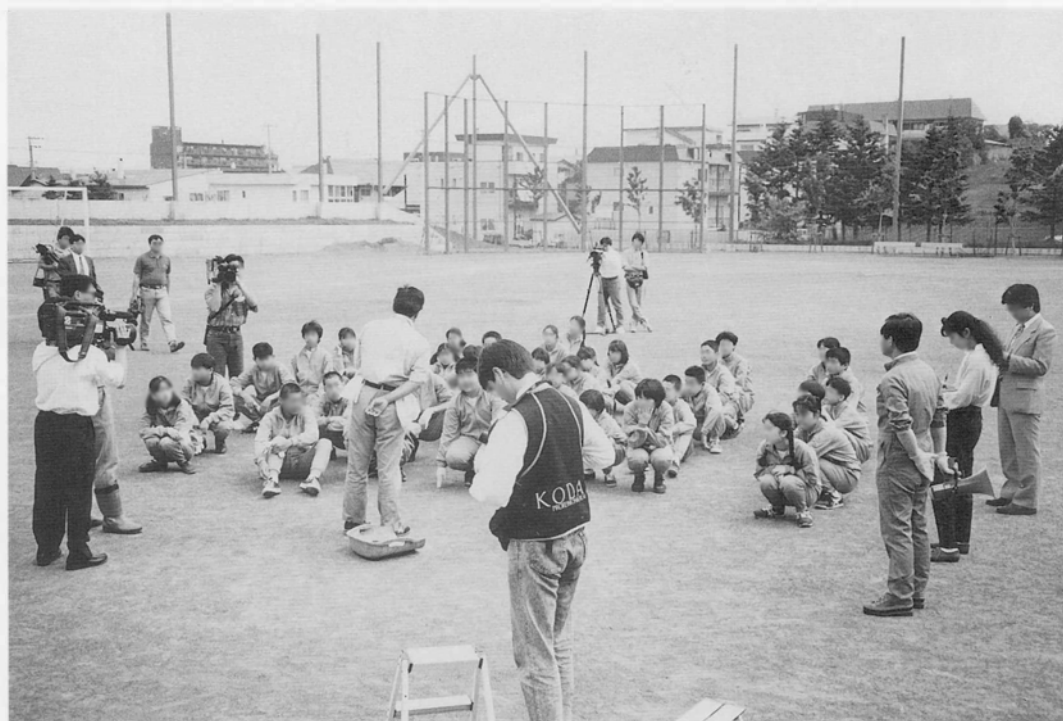
平成 2 年度



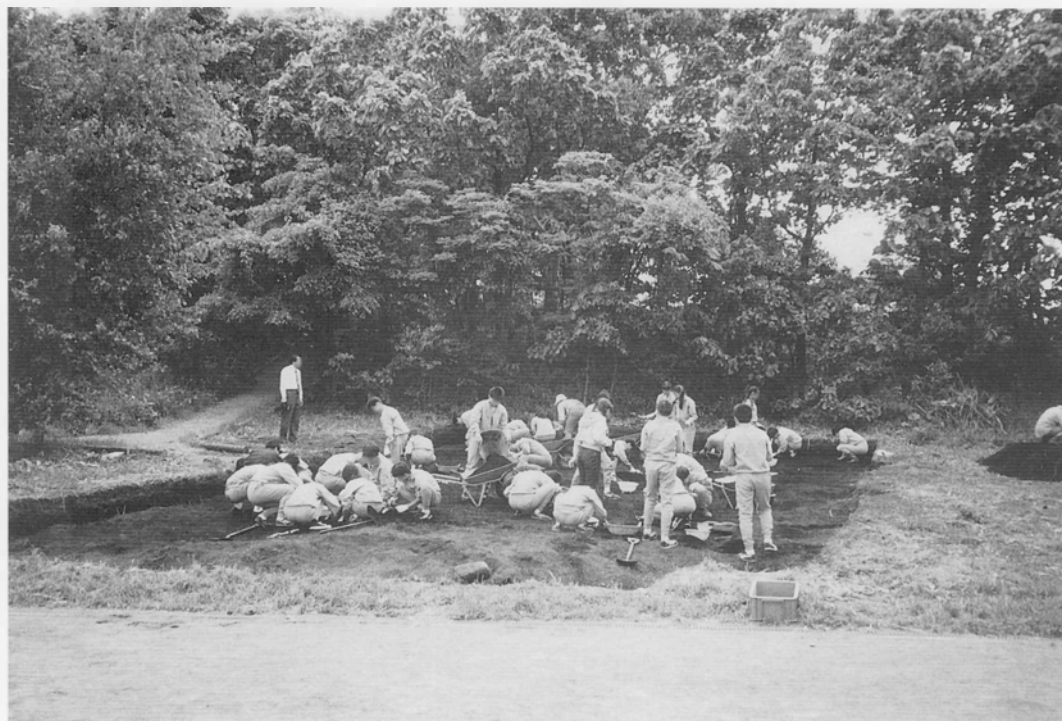
平成2年度



平成 3 年度



平成 3 年度



平成3年度



平成 3 年度



平成3年度



平成3年度



平成 3 年度



平成4年度



平成 4 年度

国語・数学



平成 4 年度



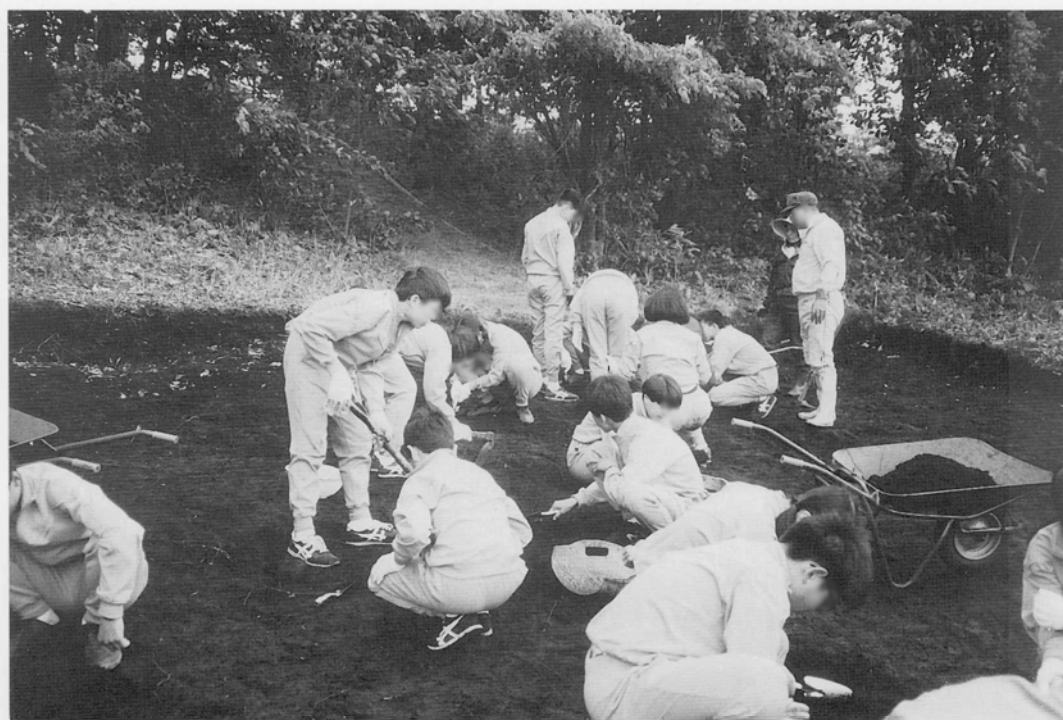
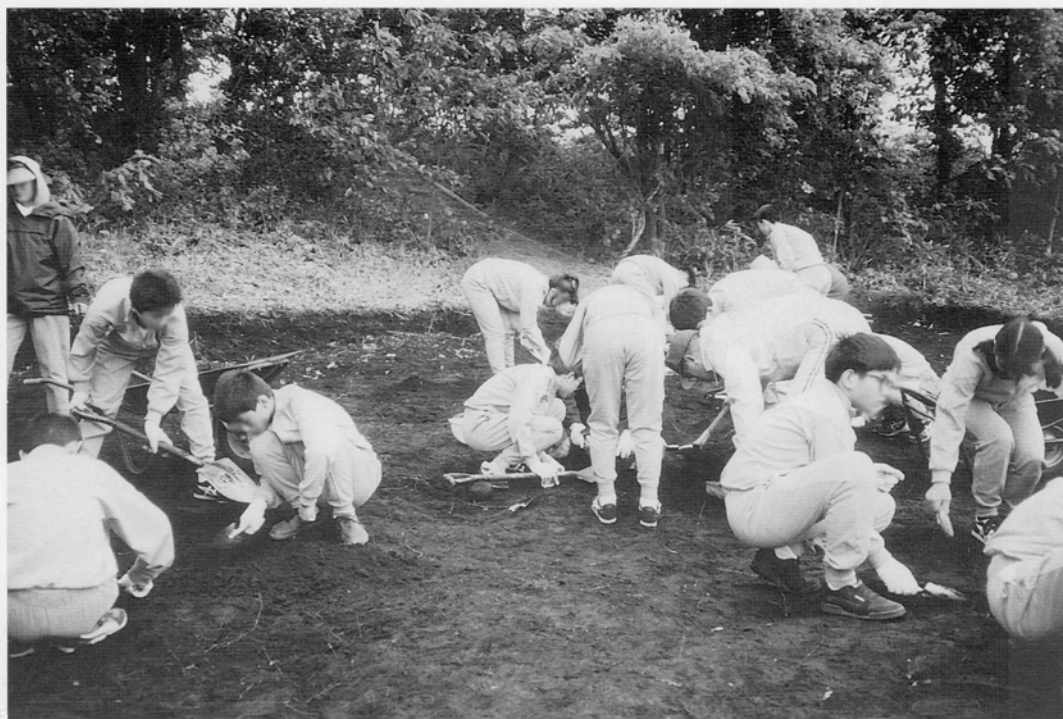
平成 4 年度



平成4年度



平成 4 年度



平成4年度



札幌市文化財調査報告書 XLIV

T 151 遺跡

平成 5 年 3 月 25 日 印刷

平成 5 年 3 月 30 日 発行

発行者 札幌市教育委員会
060 札幌市中央区南 1 条西 14 丁目
編集 札幌市埋蔵文化財センター
064 札幌市中央区南 22 条西 13 丁目
(011)512-5430
印刷所 (株)アイワード